

SEND プログラム

(チューラーロンコーン大学サマースクール/ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール/
「京都で学ぶアジアと日本」研修/インドネシア大学スプリングスクール/シドニー大学スプリングスクール)

2014年度実施報告書

森 真理子 (国際交流センター センター長・教授)

佐々木幸喜 (アジア研究教育ユニット [国際交流センター] 特定助教)



目次

はじめに

1	SEND (Student Exchange－Nippon Discovery) プログラム	2
1.1	概要	
1.2	SEND 準備活動	
	全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講	
	『和英対訳版日本古典文学研究論文集』の刊行	
1.3	2014(平成 26)年度 of 取組み	
2	実施状況および実施体制	8
3	チューラーロンコーン大学サマースクールプログラム	12
	募集要項／ポスター／研修日程／参加者名簿／	
	準備講座①会話教室／準備講座②発表準備／受入れ教員所感／参加報告	
4	ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクールプログラム	28
	募集要項／ポスター／研修日程／参加者名簿／	
	準備講座①会話教室／受入れ教員所感／参加報告	
5	「京都で学ぶアジアと日本」研修	47
	募集要項／ポスター／研修日程／参加者名簿	
6	インドネシア大学スプリングスクールプログラム	56
	募集要項／ポスター／研修日程／参加者名簿／	
	準備講座①会話教室／準備講座②発表準備／受入れ教員所感／参加報告	
7	シドニー大学スプリングスクールプログラム	80
	募集要項／ポスター／研修日程／参加者名簿／	
	受入れ職員所感／参加報告	

編集後記

1. はじめに

国際交流センター長
森 眞理子

平成24年に開始し、25年度から本格的に活動を始めた、世界展開力強化事業「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成」によるアセアン地域大学への学生派遣プログラムは、平成26年度には、サマープログラムとしてチュラーロンコーン大学、ハノイ国家大学(外国語大学、人文社会科学大学)、スプリングプログラムとしてインドネシア大学、シドニー大学への学生派遣を実施した。今年度は派遣学生の総数を15名から42名に増やし、昨年度の実績を踏まえてより充実したカリキュラムを提供する研修内容を盛り込んだものとなった。



SEND プログラムとは、短期留学を契機とし、日本人学生がアジアを中心とした海外の派遣先大学で、その国の文化に触れ、人と出会い、新しい発見をすることによって、自分自身および日本への再理解・再構築につないで行こうとする大学教育であるといえる。京都大学の講義を飛び出し、よりアクティブに世界の中で、自分を主張し、他者を受け入れ、様々な文化経験をする事により、これまでの常識が覆ることもあるし、すぐに目立った変化がないとしても、長い目で見れば世界に目を向ける恰好の機会となる。SEND プログラムはその最初のステップになる短期留学である。今年度の派遣学生の報告にも、そのような新しい出会いと、よい意味での価値観の反転が書かれているものが多かった。この経験が将来に生かされることを期待する。

このようなプログラムを企画・実施するには、それなりの経験と実績が必要である。国際交流センターには、学生派遣の実績がこれまでも多くあり、それが新しいプログラムを立ち上げる際に大いに役立っている。それらの実績を学ぶことから始めた SEND プログラムも2年目に入り、カリキュラムを練り上げる過程で先方の大学教員とプログラム実施前から密に連絡を取り合うなど、人的つながりやノウハウもある程度蓄積されてきた。

にもかかわらず、予期せぬ事故や事件は常に起こるものであり、今年度の学生派遣でも、いくつかの事例が報告されている。しかし、そのたびに一喜一憂せず、冷静に対処するだけの体制も組み立てられており、派遣先大学との密な連携によって一つずつ解決していくことができた。体制の整備の重要性もさることながら、そこに人の強力な連携があったことは見逃せない。

今年度の SEND 短期学生派遣に多大なご支援をいただいたアジア研究教育ユニット、学内各部署の先生方、事務関係者、さらに派遣先大学で学生が快適に学修できる環境を作って下さった各大学の教職員の方々のご尽力に、厚く御礼申し上げる次第である。

2015(平成27)年3月

1 SEND (Student Exchange－Nippon Discovery) プログラム

1.1 概要

2012(平成 24)年度から始まった世界展開力強化事業「「開かれた ASEAN+6」による日本再発見－SEND を核とした国際連携人材育成」プロジェクトでは、文学研究科、経済学研究科、教育学研究科、農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、経営管理大学院、人文科学研究所、東南アジア研究所、国際交流センターで構成されるアジア研究教育ユニット(KUASU:Kyoto University Asian Studies Unit)が母体となって、東南アジア諸国連合(ASEAN)に東アジア、南アジア、オセアニアを加えた「ASEAN+6」における次世代人材育成のためのプログラムを企画実施してきた。SEND (Student Exchange－Nippon Discovery)とは、外部の視点から日本社会を見直し、日本を再発見するプロセスを経験することで、アジア地域や世界各地における相互理解と、共通して直面している問題の解決を目指すものである。

2014(平成 26)年度、京都大学国際交流推進機構 国際交流センターでは短期 SEND として、8 件の派遣プログラム、1 件の受入れプログラムを実施した。本報告書ではその内、5 プログラム(ASEAN、豪州)における教育実践ならびに展望・課題について報告する。東アジアへの派遣プログラムについては、『大学間学生交流協定による学費免除型短期留学プログラム 2014 年度 実施報告書』(京都大学国際交流推進機構 国際交流センター／国際企画連携部門[編])を、ASEAN 受入れプログラムの詳細については、『短期学生受入れプログラム実施報告書』(京都大学国際交流推進機構 国際交流センター／国際企画連携部門[編])をそれぞれ参照されたい。

本報告書で紹介するプログラム一覧

プログラム名	対象国・地域
《派遣》チュラーロンコーン大学サマースクールプログラム	タイ
《派遣》ベトナム社会科学学院・ハノイ国家大学サマースクールプログラム	ベトナム
《受入れ》「京都で学ぶアジアと日本」研修	タイ、ベトナム
《派遣》インドネシア大学スプリングスクールプログラム	インドネシア
《派遣》シドニー大学スプリングスクールプログラム	オーストラリア

1.2 SEND 準備活動

1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講(資料1)

SEND に参加する学生には、派遣先で交流する人々に対して、日本語や日本文化、日本文学の諸相について、日本語あるいはそれ以外の言語でも紹介し説明することが求められる。その実践とし

て国際交流推進機構 国際交流センターでは、平成 25(2013)年 4 月より「日本語・日本文化演習」(全学共通科目 拡大科目群／カルチャー一般科目)を開講している。本授業は国際交流推進機構教員が 2 名体制で担当するリレー形式であり、平成 26 年度は、前期を森眞理子教授と佐々木が、後期を長山浩章教授と家本准教授がそれぞれ担当し、後期には佐々木がコーディネーターとして加わった。本授業の実践を経て、派遣学生が、自国の文化を違う角度から見つめ直し、再発見する機会を得ることも大いに期待される。

(資料 1) 平成 26 年度「日本語・日本文化演習」シラバス

(京都大学 OpenCourseWare HP参照)

学期	前期／後期
時間	金 5／火 2
担当教員	森 眞理子(国際交流推進機構)
授業形態	演習
学年・対象	全回生
授業の テーマ	日本人学生、特に海外大学に短期留学を計画している学生が、留学先大学において日本語を教え、日本文化を紹介するなどの経験を通して、日本文化を再発見し、その過程を通してグローバルな視野に立った物の見方・考え方を養うことを目的とする。
レベル	Undergraduate
授業計画	現在実施されている、日本学生の海外派遣推進(SEND)プログラムの一環として、海外派遣先の大学で、日本語・日本文化を多面的に理解し紹介できることが要請されている。日本人であっても日本語や日本文化について深い理解をもって解説するためには、言語・文化に意識的に向き合わなければならない。本授業は、日本語や日本文化を意識的に捉え、深い理解に立って外国人と見方や考え方を共有できるよう、講義・実習・討議を交えて進めていく。本授業は国際交流推進機構教員によるリレー式講義・演習によって行われる。 1.オリエンテーション 2.非母語話者に対する日本語教授法解説 3.日本語教授法実習 4.多文化の中の日本文化講義 5.日本文化に関するプレゼンテーション及び討議 6.まとめ 海外留学を考える学生を優先するが、これまでとは異なる新しい視点で日本語・日本文化を考えてみようとする学生や留学生の受講も歓迎する。
評価方法	出欠や課題、積極的参加態度などの平常点と期末試験を総合して評価する。
履修要件	特になし。
教科書	ハンドアウト

1.2.2 『和英対訳版日本古典文学研究論文集』の刊行(資料 2)

これは、2012(平成 24)年 12 月より開始した文学研究科国語学国文学研究室との共同作成による和英対訳版の日本古典文学論文集の継続事業であり、森眞理子教授・湯川志貴子准教授・

佐々木(2013年度より)が担当した。論文集のプロトタイプ版は2014年3月に完成した(150部印刷)。この論文集は、SENDに参加する学生が、日本語や日本文学、日本の文化について、外国人に対しどのように発信していけばよいかを学び取り、実践する上で実際に活用できる参考図書として提供されるものである。これらの論文は、各執筆者の代表的な論文の中から選りすぐったものであり、特に外国人学生・研究者が、和歌、俳諧、『源氏物語』や日本語の歴史をはじめ、日本の古典や古語に対する理解をより深めるための内容を多く含んでいる。日本人学生と外国人学生の双方にとって、実用性・応用性に富んだ優れた和英対訳版としての学習効果が期待される。

(資料2)『和英対訳版日本古典文学研究論文集』

執筆者および所収論文一覧(掲載順)

執筆者	論文名	Studies
木田章義 (Akiyoshi KIDA)	濁音史摘要	A Brief History of the Evolution of <i>Dakuon</i> ("Muddy" Sounds)
大槻 信 (Makoto OTSUKI)	平安時代の辞書についての覚書	A Note on Dictionaries of the Heian Period
金光桂子 (Keiko KANAMITSU)	中世王朝物語における物の怪 —一六条御息所を起点として—	<i>Mononoke</i> in Japanese Medieval Court Tales —Using Rokujo no Miyasundokoro as a Point of Reference
森真理子 (Mariko MORI)	俳諧における表現と伝統の変容	The Expression and Reception of Classical Literary Tradition in <i>Haikai</i>
森真理子 (Mariko MORI)	闇のいたまの月見ばや唯	Linking Imagery in the <i>Renku</i> : <i>Neya no itama no tsuki miyaba tada</i>

1.3 2014(平成26)年度の実践(詳細は各章を参照のこと)

○チューラーロンコーン大学サマースクールプログラム

2013年度から始まったプログラムであり、2年目の実施となる。期間は2週間。5名が参加した。主なカリキュラムとして、語学講義、特別講義、文化講義、授業参加、実地研修、発表討論が実施された。語学講義は派遣学生のための特別クラスとして生まれ、10回(1コマ3時間)行われた。特別講義も語学講義と同様、派遣学生のために開講されたもので、Chomnard Setisarn 助教授や京都大学大学院文学研究科出身の教員が担当してくださった。文化講義は、外国人学生を中心とするBALAC(Bachelor of Arts Program in Language and Culture)が開講する正規授業を聴講した。実地研修先には、アユタヤ遺跡、エメラルド寺院が選定された。共同発表は、チューラーロンコーン大学生複数名と京大生1名の混合で行われた。準備段階として、両大学の学生たちはSNSによる打ち合わせを、両大学の教員の指導の下行った。また、派遣前にはベトナム研修学生と合同発表会を実施した。

○ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクールプログラム

2013 年度から始まったプログラムであり、2 年目の実施となる。期間は 2 週間。8 名が参加した。昨年度の主な受入れ先が一大学(ハノイ国家大学外国語大学)だったのに対し、今年度は受入れ機関の拡充を図り、ハノイ国家大学外国語大学、ハノイ国家大学人文社会科学大学、また研究機関のベトナム社会科学院との協働となった。前半はハノイ国家大学外国語大学、後半はハノイ国家大学人文社会科学大学を拠点に研修が実施された。主なカリキュラムとして、語学講義、特別講義、文化講義、授業参加、実地研修、発表討論が実施された。語学講義は派遣学生のための特別クラスとして生まれ、2 回(1 コマ 2 時間)行われた。特別講義、文化講義についても語学講義と同様、派遣学生のために開講されたものである。実地研修先には、Trang An、Hoa Lu、Duong Lam が選定された。共同発表は、1 名ずつの発表で行われた。研修前の準備段階として、各大学の代表が SNS による打ち合わせを、三大学の教員の指導の下行った。9 月 14 日～18 日は、佐々木が同行し各大学との調整を行った。

○「京都で学ぶアジアと日本」研修

上記 2 プログラムと双方向型教育プログラムとなることを目指し、2014 年度から始まった受入れプログラムである。期間は 2 週間。28 名(内訳:チューラーロンコーン大学 5 名、ハノイ国家大学人文社会科学大学 5 名、ハノイ国家大学外国語大学 5 名、京都大学 13 名)が参加した。主なカリキュラムとして、語学講義、特別講義、文化講義、文化体験、学外研修、発表討論を実施した。共同発表は四大学の学生が各班に少なくとも 1 人は入るよう調整した。

○インドネシア大学スプリングスクールプログラム

2013 年度にテストケースとして実施した派遣プログラムをもとにカリキュラム開発を行ったものである。期間は 2 週間。9 名が参加した。主なカリキュラムとして、語学講義、授業参加、文化体験、学外研修、発表討論が実施された。語学講義は、外国人を対象としたインドネシア語講座 BIPA program (Bahasa Indonesia untuk Penutur Asing Program ; Indonesian for Non-native Speakers Program) での特別クラスを受講した。授業参加は人文科学部で行われた。実地研修先には、Taman Mini Indonesia Indah、Kota が選定された。共同発表は、インドネシア大学生と京大生の混合班(4 名程度)で行われた。京大生 1 名につき、インドネシア大学生 1 名が生活の補助に当たるバディ制度を試験的に導入した。また、派遣前にはオーストラリア研修学生と合同発表会を実施した。

○シドニー大学スプリングスクールプログラム

2013 年度まで“異文化研修プログラム”として実施されていたプログラム(担当:西川美香子 前 国際交流推進機構特定助教)を SEND プログラムとして引き継いだものである。期間は 2 週間。20 名が参加した。“Young Leaders Program”として開発されたカリキュラム(語学講義、文化講義、実地研修)に授業参加(日本学科)を組み合わせる形を採用した。実地研修先には、Calmsley Hill City Farm、日系企業訪問などが選定された。発表は、京大生班(各班 4 名)を現地学生が聴講する形で行われた。

●情報共有の方法

情報共有の方法として、以下の三点を実施した。

1) 発表準備に関する議事録の作成

主に、協力大学の関係教職員と情報を共有するために実施した。すべての派遣プログラムで研修開始までに全員が集まることのできる日程を調整し、発表準備に関する打ち合わせを行っている。回数としては、他プログラムとの合同発表も含め、一プログラムにつき、概ね 4、5 回程度である。打ち合わせには佐々木が同席した。議事録の作成は参加学生が交代で行い、佐々木が確認した後、教職員に送付している。

2) クラウドストレージサービスの利用

主に、研修日程(研修前～研修中)、報告書掲載用写真(研修中～帰国後)を確認、共有するために用いた。参加者決定オリエンテーションの際に指示した。

3) SNS の利用

学生への連絡は原則として、SEND プログラム担当教職員共有アドレスから行っている。SNS は主に、研修中の学生との連絡を円滑にするために用いた。メールでの連絡に並行する形で実施した。

これらの他に、危機管理体制の整備の一環として、緊急連絡網を作成し受入れ大学と共有している。

●成果と課題

全体として、万遍なく予定を組んでいただき、充実した研修を進めることができた。とりわけ、各プログラムで行われた語学講義での取り組みが、文化理解に対して積極性を持つ大きな契機となったようである。研修が進むにつれ、勉学、生活いずれにおいても課題を見つけ、それを自発的に解決しようとする態度が多く見られるようになったといえる。協働学習については、SNS による打合わせの意義が大きかったことは言うまでもない。来年度以降についても引き続き行わせることとしたい。また、発表準備に際し、東アジア超短期留学プログラムの担当教員(国際交流センター 河合淳子准教授、同 家本太郎准教授、国際企画連携部門 韓立友特任准教授)との連携があったことも記しておきたい。近い日程で派遣が行われ、かつ、発表討論が研修内容に組み込まれているプログラムの参加予定学生に対して、事前発表会への出席を呼びかけた。例えば、今年度実施したスプリングスクールでいうと、延世大学校(3 月 2 日～3 月 23 日)とインドネシア大学(2 月 22 日～3 月 8 日)、シドニー大学(2 月 28 日～3 月 15 日)がそれに該当する。テーマや使用言語、発表形態はプログラムによって異なるが、資料の提示の方法など、学ぶところも多かったようである。今後も他プログラム担当教職員との連携を図りたい。

また、SEND プログラム(タイ・ベトナム・インドネシア)参加者の同窓会を設立した。同じ年度・プログラム参加者同士の繋がりが今も継続していることを強みに、今後は、派遣年度・プログラムを超えた交流を促進していきたい。

今回、派遣学生 1 名(シドニー大学スプリングスクール)が現地での食事中、盗難に遭うという事案が起きた。当該学生に怪我がなかったのは不幸中の幸いであったのはもちろん、帰国に向けた対応を迅速に行うことができたのは、関係教職員に加え、旅行会社、領事館の協力によるところが大きい。関係各位に感謝すると同時に、再発防止に向け、派遣前教育(安全教育)を徹底していかなければならない。

(佐々木幸喜)

2 実施状況および実施体制

実施状況

派遣先大学・研究機関	期間 (2 週間)	応募者 数	参加者 数	学費 補助	渡航費 補助	宿泊費 補助	JASSO 奨学金
チュラーロンコーン大学 Chulalongkorn University	8 月 31 日 (日) ゝ 9 月 13 日 (土)	7 名	5 名	5 名※1	5 名※1	5 名※1	2 名
ベトナム社会科学学院 Vietnam Academy of Social Sciences	9 月 14 日 (日) ゝ	8 名	7 名 + JSPS 1 名	0 名	7 名※1	7 名※1	2 名
ハノイ国家大学 Vietnam National University, Hanoi	9 月 28 日 (日)						
インドネシア大学 University of Indonesia	2 月 22 日 (日) ゝ 3 月 8 日 (日)	10 名	9 名	9 名※1・2	9 名※1・2	9 名※1・2	3 名
シドニー大学 The University of Sydney	2 月 28 日 (土) ゝ 3 月 15 日 (日)	34 名	20 名	20 名※2	20 名※1・2	20 名※2	7 名
計		59 名	41 名 + JSPS 1 名	34 名	41 名	41 名	14 名

※1 及び JASSO 奨学金は大学の世界展開力強化事業～ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援～「開かれた ASEAN+6」による日本再発見-SEND を核とした国際連携人材育成」の支援を受けています。

※2 は「運営費交付金特別経費」の支援を受けています。

実施体制

(敬称略)

● チュラーロンコーン大学 (Chulalongkorn University) 実施責任者・SEND 受入れ教員： 文学部計画・発展担当副学部長 文学部東洋言語学科日本語講座助教授 担当職員： 文学部東洋言語学科日本語講座助手		Chomnard Setisarn Palanan Thananchai
● ベトナム社会科学学院 (Vietnam Academy of Social Sciences [VASS]) 実施責任者・担当教員： Director, Institute of Sociology Director, Institute for Family and Gender Studies		Dang Nguyen Anh Nguyen Huu Minh
● ハノイ国家大学 (Vietnam National University, Hanoi [VNU]) ○ 外国語大学 (University of Languages and International Studies [ULIS]) 実施責任者： 東洋言語文化学部長 SEND 受入れ教員： 東洋言語文化学部副学部長 東洋言語文化学部日本語部門長 東洋言語文化学部日本語部門講師		Ngo Minh Thuy Dao Thi Nga My Pham Thi Thu Ha Nguyen Huyen Trang
○ 人文社会科学大学 (University of Social Sciences and Humanities [USSH]) 実施責任者： 東洋学部日本学科長 SEND 受入れ教員： 東洋学部日本学科専任講師		Phan Hai Linh Vo Minh Vu
● インドネシア大学 (University of Indonesia [UI]) 実施責任者： Marketing Manager LBI FIB UI Manager of BIPA Program Assistant Manager of BIPA Program Coordinator, Faculty of Humanities SEND 受入れ教員： Lecturer, Faculty of Humanities		Tantriana Widyaningsih Elfrida Dwi Puspitorini Leli Dwirika S.Prasnowo Himawan Pratama

●シドニー大学(The University of Sydney)

実施責任者:

Director, office of Global Engagement

Sandra Meiras

Manager, International Program, Office of Global Engagement

Shirley Xu

担当職員:

Assistant International Project Coordinator,

Rebecca Whitcomb

International Leaders Program, Office of Global Engagement

●京都大学(Kyoto University)

実施責任者:

学生担当理事・副学長

赤松 明彦(Akihiko Akamatsu)―2014年9月30日

学生担当理事・副学長

杉万 俊夫(Toshio Sugiman)2014年10月1日―

国際交流推進機構長・教授

森 純一(Junichi Mori)

国際交流センター長・教授

森 眞理子(Mariko Mori)

担当教職員:

アジア研究教育ユニット 特定助教
(国際交流センター付)

佐々木 幸喜(Yuki Sasaki)

国際学生交流課交流支援掛 掛員

清水 瞳(Hitomi Shimizu)―2014年10月

ドニークラーク 有美(Yumi Donny-Clark)2014年11月―



● Thailand



募集要項

SENDプログラム

2014 年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクールプログラムのご案内

締切：2014 年 5 月 30 日(金) 12 時 00 分

【日程】

- ・ 8 月 31 日 (日) チュラーロンコーン大学 (バンコク市) 到着
- ・ 9 月 1 日 (月) オリエンテーション、タイ語・文化講座
- ・ 9 月 2 日 (火) ～ 9 月 12 日 (金) タイ語・文化講座、学生交流、実地研修、発表討論、修了式
- ・ 9 月 13 日 (土) 帰国

【詳細】

- ・ 募集人数：10 名程度
- ・ 募集対象：京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、
農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科に所属する者を優先する)
- ・ 募集条件：異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・ 費用詳細
学費：約 20,000 円
航空チケット代：約 85,000 円
諸費用 (国内移動費・その他)：約 30,000 円～40,000 円
宿泊費：39,000 円 (3,000 円×13 日) ※学内の国際学生寮 [予定]
海外旅行保険 [全員必須]：約 11,000 円 ※AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」に加入すること
(治療・救援費用無制限に設定)
- ・ 補助金
以下のとおり各種支援を行います。
研修支援 (約 70,000 円)：7 名 ※JASSO の支給要件を満たす者
日本国籍を有する者、または日本への永住が許可されている者
前年度の成績評価係数が 2.30 以上、かつ収入が限度額未満の者
航空チケット代・宿泊費 (154,000 円)：6 名

※ただし、参加決定後に取り消す場合はキャンセル料が発生します。

【申し込み】 今年度から応募方法が変わりました。

- ・ 申請手順：1. オンライン申請を行う。(オンライン申請の手順については【別紙】参照)
2. 申請内容をプリントアウトしたものに自署の上、以下の書類と共に所定の提出先に持参する。
 - ①応募申請書 (書式 1-1、短期派遣・単位取得プログラム)
 - ②語学力証明書 (書式 3、英語に関する記入のみで可)
 - ③成績証明書
 - ④パスポートの顔写真ページ写し (未取得者はその旨を申し出、早急に取得すること)
 - ⑤誓約書
 - ⑥収入に関する証明書 (JASSO 奨学金申請者のみ。応募申請書「書式 1-1」3 頁を参照のこと)
 - 給与所得者・・・源泉徴収票のコピー (税込み)
 - 給与所得以外・・・①確定申告を確定申告書の持参・郵送により行った場合
確定申告書 (第一表と第二表) (控) の写し (税務署の受付印があるもの)
※税務署の受付印がないものは、加えて市区町村役場発行の「所得証明書」(有料)が必要
 - ②確定申告を電子申告により行った場合
申告内容確認表の写し (受信通知又は即時通知を添付)

学部生については世帯の年収（給与所得世帯 908 万円未満、給与所得以外の世帯 422 万円未満）の証明書、
大学院生については本人および配偶者の収入（修士課程 486 万円以下）の証明書を提出してください。
この奨学金を受給する学生は、帰国後に留学の学習成果に関する報告書の提出が義務づけられています。報告書が提出されない
場合、もしくは不備がある場合、一旦支給された奨学金の全額返却が求められる場合もありますので注意してください。

- ・ 申請書提出先：研究国際部国際学生交流課交流支援掛 派遣プログラム担当 075-753-5679
（吉田国際交流会館地下 1 階 国際企画連携部門 事務室）
- ・ 選考：書類審査および面接により行います。
面接は 6 月 2 日以降に京都大学国際交流センター内で行います。
- ・ 最終結果通知：6 月中旬 オンライン申請時に登録済みのメールアドレスに通知します。

- ・ 本件照会先： 国際交流センター 森 眞理子
佐々木幸喜 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp
研究国際部国際学生交流課 清水 瞳 shimizu.hitomi.2e@kyoto-u.ac.jp

【スケジュール】

- ・ 参加者オリエンテーション：6 月中旬
- ・ ヘルスケア講義：7 月 2 日（水）12 時 10 分～12 時 50 分
（場所）国際交流センター K U I N E P 講義室

※オリエンテーションおよびヘルスケア講義は出席必須です。
オリエンテーションの日時・場所は追って連絡します。

【備考】

- ・ 自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・ 本プログラムは、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「タイ研修」（前期集中）の単位に充当されることがあります。
- ・ 本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（前期：金曜 5 限）を受講した上での参加を推奨しています。
- ・ 本プログラムには引率者が 1 名同行予定です（一部日程）。
- ・ 参加者全員に治療・救援費用無制限の AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。



～SENDプログラム～ タイ・チュラーロンコーン大学

SUMMER SCHOOL

2014年8月31日(日)～9月13日(土)

【日程】

- ・ 8月31日(日) チュラーロンコーン大学(バンコク都) 到着
- ・ 9月1日(月) オリエンテーション、タイ語・文化講座
- ・ 9月2日(火)～9月12日(金) タイ語・文化講座、学生交流
実施研修、発表討論、修了式
- ・ 9月13日(土) 帰国

【詳細】

- ・ 募集人数 : 10名程度
- ・ 募集対象 : 京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、
農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科に所属する者を優先する)
- ・ 募集条件 : 異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・ 費用詳細 : 学費 約20,000円
航空チケット代 約85,000円
諸費用(国内移動費・その他) 約30,000～40,000円
宿泊費 39,000円(3,000円×13日) ※学内の国際学生寮【予定】
海外旅行保険(全員必須) 約11,000円 ※AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」加入
(治療・救援費用無制限に設定)
- ・ 補助金 : 以下のとおり各種支援を行います。(ただし、参加決定後の取消にはキャンセル料が発生します。)
研修支援(約70,000円) : 7名 ※JASSOの支給要件を満たす者
航空チケット代・宿泊費(154,000円) : 6名



【申し込み】

書 類 : ①オンライン申請書 <https://area34.smp.ne.jp/area/p/nita0mjmel1pepbt9/hbbQ7J/login.html>
②応募申請書 ③語学力証明書 ④成績証明書 ⑤パスポートの顔写真ページ写し
⑥誓約書 ⑦収入に関する証明書(JASSO奨学金申請者のみ) ※詳細は「②応募申請書」参照

提出先 : 研究国際部国際学生交流課交流支援掛 派遣プログラム担当 075-753-5679
(吉田国際交流会館地下1階 国際企画連携部門 事務室)

締 切 : 2014年5月30日(金) 12時00分

面接日 : 2014年6月中旬

選 考 : 書類審査および面接により行います。

本件照会先 : 国際交流センター 森 真理子 / 佐々木 幸喜 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp
研究国際部国際学生交流課 清水 瞳 shimizu.hitomi.2e@kyoto-u.ac.jp

【備考】

- ・ 自然災害等其他事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・ 本プログラムは、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「タイ研修」(前期集中)の単位に充当されることがあります。
- ・ 本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(前期：金曜5限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・ 本プログラムには引率者1名が同行予定です(一部日程)。
- ・ 参加者全員に治療・救援費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。



研修日程

2014 Thailand In-Country Training Period:31st August-13rd September

As of 29th August

Date	Time	Category	Curriculum / Event	Lecturer / Staff	Place
Sun.,31st-Aug	11:45		出発(TG623)		Kansai International Airport
	15:35		到着		Suvarnabhumi International Airport
	Afterwards		宿舎チェックイン		CU iHouse (Chulalongkorn University international HOUSE)
Mon.,1st-Sep	8:00-11:00		オリエンテーション	Assist.Prof.Chomnard Setisarn スタッフ	401/14 MCS
		特別講義	タイ国紹介・タイ文化入門	Assist.Prof.Chomnard Setisarn	401/14 MCS
	13:00-16:00	語学講義	タイ語講座(1)	Dr.Parinya Wongtawan (Invited Instructor of Intensive Thai program)	401/14 MCS
	Afterwards		携帯電話購入		
Tues.,2nd-Sep	9:00-12:00	特別講義	タイの歴史と文化講座	Dr.Chanwit Tudkeao	601/27 MCS
	13:00-16:00	語学講義	タイ語講座(2)	Dr.Parinya Wongtawan (Invited Instructor of Intensive Thai program)	601/21 MCS
Wed.,3rd-Sep	9:30-12:30	文化講義	Thai Literature and Culture	Dr.Namphueng Padamalangula	401/5 MCS
	13:00-16:00	授業参加	日本語コミュニケーション I	Dr.Yuphawan Sopitvutiwong	501/5 MCS
Thurs.,4th-Sep	9:00-12:00	文化講義	Culture and Thai Tradition in Thai Lifestyle	Assoc.Prof. Sopit Tham-Aree	303 MCS
	13:00-16:00	語学講義	タイ語講座(3)	調整中(後日連絡)	601/25 MCS
Fri.,5th-Sep	9:30-12:30	語学講義	タイ語講座(4)	ワンナシン先生	601/6 MCS (昼食あり)
	13:00-16:00	語学講義	タイ語講座(5)	Dr.Parinya Wongtawan (Invited Instructor of Intensive Thai program)	601/29 MCS
Sat.,6th-Sep	7:50-	実地研修	歴史、伝統産業	前田先生	Ayutthaya
Sun.,7th-Sep	Whole Day		自由行動		
Mon.,8th-Sep	9:30-12:30	語学講義	タイ語講座(6)	ワンナシン先生	401/14 MCS (昼食あり)
	13:00-16:00	語学講義	タイ語講座(7)	Dr.Parinya Wongtawan (Invited Instructor of Intensive Thai program)	401/14 MCS
Tues.,9th-Sep	9:00-12:00	語学講義	タイ語講座(8)	Dr.Parinya Wongtawan (Invited Instructor of Intensive Thai program)	601/27 MCS
	12:00	実地研修	歴史、宗教		Temple of the Emerald Buddha
Wed.,10th-Sep	9:30-12:30	語学講義	タイ語講座(9)	ワンナシン先生	601/25 MCS
	p.m.	SEND	発表準備		
Thurs.,11th-Sep	8:00-11:00	SEND	発表討論・講評	Assist.Prof.Chomnard Setisarn	404 BRK
	13:00-16:00	語学講義	タイ語講座(10)	Dr.Parinya Wongtawan (Invited Instructor of Intensive Thai program)	601/23 MCS
	Afterwards		Muai Thai Live	Assist.Prof.Chomnard Setisarn	Asiatique Riverfront
Fri.,12th-Sep	9:00-11:00		修了式		815 MCS
Sat.,13th-Sep			宿舎チェックアウト		CU iHouse (Chulalongkorn University international HOUSE)
	11:00		出発(TG672)		Suvarnabhumi International Airport
	18:30		到着		Kansai International Airport

参加者名簿

	氏 名 (Name)	所属	学年
班 長	山 口 裕 也 (Yuya YAMAGUCHI)	経 済 学 部	B4
副 班 長	井 形 岳 史 (Takefumi IGATA)	経 済 学 部	B3
	石 井 裕 樹 (Hiroki ISHII)	工 学 部	B3
	久 保 田 秀 人 (Shuto KUBOTA)	農 学 部	B3
	米 田 実 紀 (Minori YONEDA)	農 学 部	B3

チューターとして思ったこと

Chonlada Charoenviriyakul
大学院薬学研究科修士課程 1 回生

私は、タイへ派遣される学生に向けたタイ語会話のチューターを担当しました。京大生たちがタイに派遣された時に生活できるように、最低限の日常会話を目標としてタイ語授業を行いました。教えたことは挨拶、自己紹介、道の尋ね方、料理の注文の仕方、時間の言い方などでした。まずはサワディークラップ/サワディーカ(こんにちは)、コップクンクラップ/コップクンカ(ありがとうございます)などの簡単な挨拶を教えました。次に、初めてチュラーロンコーン大学生と会うときのために自己紹介のやり方も教えました。また、タイ文字も教えました。タイ語は、子音、母音、声調の組み合わせで言葉を作るシステムです。子音は44、母音は32、声調は5もありますので、タイ文字をマスターするには通常3か月ほどかかります。しかし今回の授業は5時間しかないので、タイ文字の組み合わせまでは至らず、その紹介しかできませんでした。自分の名前をタイ文字で書かせるなどしたところ、学生達はタイ文字に興味を持ったらしく、タイ文字の授業中、皆楽しく勉強していました。

タイに着いた時に混乱しないように、言葉だけではなく、文化の違いや、タイではいけないことなどについても話しました。たとえば、トイレの使い方、電車の乗り方、タクシーの呼び方などです。タイでは、トイレを使った時に便器のふたを閉めません。もしふたが閉まっていれば、それは便器が壊れています。季節についても少し話しました。タイの季節は3つあります。夏、雨季、冬です。タイに派遣する期間はちょうど雨季です。雨季は Deng 熱がはやっている期間ですが、心配無用、蚊に刺されないように虫止めを使えば大丈夫です。

また、タイ料理も紹介しました。トムヤムクンやグリーンカレーは世界的に有名でみんな知っているのですが、それ以外のものを紹介しました。たとえば、地元の人が良く食べる定番のカパオライス(タイ風豚肉とバジルのピリ辛炒め)とソムタム(ピリ辛パパイヤサラダ)や日本人が好きになってくれそうなカオマンガイ(タイ風チキンライス)などです。

タイ語の授業を受けた学生の中で、タイに行ったことがあって、タイ語を少し知っている人もいました。その学生にとっては比較的楽な授業でしたが、初めてタイ語を習った学生にとっては初めて見た言葉が覚えにくくて、ちょっと厳しかったようです。それでも頑張って言葉を覚えて、興味津々で勉強してくれたので、見ていてとても嬉しかったです。

自分はタイ人なので当たり前ですが、普段はタイ語を無意識に使っています。しかし授業中、タイ語やタイの習慣などについて聞かれて、この言葉はいつ、どの場面で使うかなど、初めてタイ語について意識しました。タイの習慣についても、「あ、これは日本と違うんだなあ」と初めて気付いたこともありました。自分にとってもタイ語やタイの習慣についての理解が深まり、勉強になりました。

学生の皆さんはタイについて色々な興味を持ってくれたらしく、タイに行くことを楽しみにしているようでした。その様子は一人のタイ人としてとてもうれしかったです。ありがとうございました。

日 時	場 所	主な学習項目
8月4日(月)12:10~13:00	吉田国際交流会館 南講義室3	発音、自己紹介、挨拶表現
8月5日(火)12:10~13:00		食事(料理、注文)
8月6日(水)12:10~13:00		交通、「～はどこですか?」「〇〇をください」
8月21日(木)12:45~13:45		文字の書き方
8月22日(金)12:10~13:00		時間の数え方、文字の書き方、タイと日本の相違点

(表作成:佐々木幸喜)

タイ研修・ベトナム研修 合同発表会

日時： 2014年8月29日(金)8:45～12:00

場所： 吉田国際交流会館 南講義室3

担当： 国際交流センター 森 眞理子
KUASU/国交セ 佐々木幸喜

《タイ研修メンバー》

	氏名 (Name)	発表タイトル(仮)
1	山口 裕也 (Yuya YAMAGUCHI)	東京オリンピック2020の成功に必要なこと
2	井形 岳史 (Takefumi IGATA)	日本の皇室とタイの王室の違いとつながりについて
3	石井 裕樹 (Hiroki ISHII)	歴史的景観の保護について
4	久保田秀人 (Shuto KUBOTA)	タイ人によるタイ人のための日本観光マップをつくろう！
5	米田 実紀 (Minori YONEDA)	日泰における外国人のあり方について

《ベトナム研修メンバー》

	氏名 (Name)	発表テーマ(仮)
1	和田 洋介 (Yosuke WADA)	交通
2	桑原 綾 (Aya KUWAHARA)	食事
3	石須 慶一 (Keiichi ISHIZU)	大学の教育
4	佐藤 衣美 (Emi SATO)	サークル活動、アルバイト
5	舟橋 知生 (Tomomi FUNAHASHI)	娯楽
6	野田 貴頌 (Takanobu NODA)	年中行事
7	黒田 淳也 (Junya KURODA)	銭湯

(作成:佐々木幸喜)

โครงการ “โรงเรียนฤดูร้อน” มหาวิทยาลัยเกียวโตปี 2015: การก้าวข้าม “ลางร้ายของปีที่สอง”

ผู้ช่วยศาสตราจารย์ ดร.ชมนาด ศีตีสาร

สาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น ภาควิชาภาษาตะวันออก คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย

คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย โดยความร่วมมือของสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น ภาควิชาภาษาตะวันออกและศูนย์บริการวิชาการได้มีโอกาสดำเนินโครงการ “โรงเรียนฤดูร้อน” (Summer School) สำหรับนักศึกษามหาวิทยาลัยเกียวโตอีกครั้งในระหว่างวันที่ 1-12 กันยายน 2014 ซึ่งครั้งนี้เป็นครั้งที่สองต่อจากปีที่แล้ว เนื้อหาของโครงการส่วนใหญ่เหมือนเช่นปีก่อน คือเน้นด้านการเรียนภาษาและวัฒนธรรมไทย ในปีนี้นักศึกษาต้องเรียนภาษาไทยอย่างเข้มข้นขึ้นเพื่อให้ครบจำนวน 30 ชั่วโมง นอกจากนี้ยังต้องเข้าฟังการบรรยายพิเศษเกี่ยวกับศาสนา สังคมและวัฒนธรรมของไทย เข้าร่วมสังเกตการณ์การเรียนการสอนรายวิชา “ภาษาญี่ปุ่นเพื่อการสื่อสาร 1” เดินทางไปทัศนศึกษาที่จังหวัดพระนครศรีอยุธยา พระบรมมหาราชวังและวัดพระศรีรัตนศาสดารามเพื่อเรียนรู้เกี่ยวกับประวัติศาสตร์และศิลปวัฒนธรรมไทยตั้งแต่ในอดีตจนถึงปัจจุบัน และที่ขาดไม่ได้คือการทำงานร่วมกับนิสิตชั้นปีที่ 2 ของสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่นเพื่อทำรายงานกลุ่มในรายวิชา “ปริทัศน์วัฒนธรรมญี่ปุ่น”

เนื่องจากมีประสบการณ์จากปีก่อน ในปีนี้ดิฉันในฐานะผู้ประสานงานโครงการและผู้รับผิดชอบรายวิชา “ปริทัศน์วัฒนธรรมญี่ปุ่น” จึงพยายามเปิดโอกาสให้นิสิตนักศึกษาของทั้งสองมหาวิทยาลัยได้หารือกันมากขึ้น ด้วยการแนะนำให้ทั้งสองฝ่ายติดต่อกันผ่านช่องทางโซเชียลมีเดียต่าง ๆ ตั้งแต่เนิ่น ๆ ส่วนหนึ่งก็เพราะมหาวิทยาลัยของไทยได้เลื่อนการเปิดเทอมจากเดิมมิถุนายนออกไปอีก 2 เดือนเป็นเดือนสิงหาคม ดิฉันจึงขอให้นิสิตใช้เวลา 2 เดือนที่ว่างนี้ในการหารือเรื่องการทำรายงานกับนักศึกษาของมหาวิทยาลัยเกียวโต ผลก็คือผู้เรียนทั้งสองฝ่ายสนิทสนมกันได้เร็วขึ้น แม้เพิ่งพบหน้ากันที่ประเทศไทยได้ไม่นาน นั่นเพราะต่างได้เรียนรู้ซึ่งกันและกันมาแล้วในระดับหนึ่งผ่านการทำงานออนไลน์ หัวข้อของรายงานก็ค่อนข้างหลากหลาย ทันสมัยและมีความคิดสร้างสรรค์ ได้แก่ “โตเกียวโอลิมปิกกับการสื่อสารกับต่างชาติของชาวญี่ปุ่น” “ความสัมพันธ์ระหว่างราชวงศ์ของญี่ปุ่นและไทย” “การรักษาภูมิทัศน์ของสถานที่ท่องเที่ยว” “การสร้างความจริงให้ท้องถิ่น” และ “ความสัมพันธ์ระหว่างประชาชนกับผู้พบพในประเทศญี่ปุ่นและไทย”

ความพิเศษอีกอย่างหนึ่งของโครงการในปีนี้เป็นคือ ดิฉันได้รับความเชื่อใจจากการท่องเที่ยวแห่งประเทศไทยให้บัตรเข้าชมการแสดงชุด Muay Thai Live: The Legend Lives ณ โรงละคร The Stage @ ASIATIQUE ที่ ASIATIQUE The Riverfront ซึ่งเป็นแหล่งช้อปปิ้งริมแม่น้ำเจ้าพระยา โรงละครดังกล่าวเป็นโรงละครที่สร้างใหม่เพื่อการแสดงนี้โดยเฉพาะ เหตุผลหนึ่งที่ตัดสินใจพานักศึกษาทั้ง 5 คนมาชมการแสดงก็เพราะทั้งหมดเป็นนักศึกษาชาย และจากประสบการณ์ส่วนตัว ผู้ชายชาวญี่ปุ่นส่วนใหญ่รู้จักและชื่นชอบศิลปะการต่อสู้ประเภทนี้ของไทยเป็นอย่างดี ผลักเป็นไปตามคาด นักศึกษาทุกคนที่ไปชมการแสดงดูสนุกสนานเพลิดเพลินกับการแสดงที่เต็มไปด้วยพลังและความบันเทิงครบทุกรูปแบบ แถมยังได้รับความรู้เกี่ยวกับมวยไทยอย่างเต็มอิ่มทุกคนดูประทับใจกับการแสดงมาก เห็นได้จากการเข้าไปขอถ่ายรูปกับนักแสดงที่ออกมายืนส่งผู้ชม ทั้งยังสนุกกับการเลือกซื้อของที่ระลึกที่เกี่ยวกับมวยไทยด้วย อันที่จริงการแสดงนี้จัดทำออกมาได้ดีมาก น่าตื่นตาตื่นใจสำหรับคนไทยด้วย จนดิฉันอดเสียใจไม่ได้ที่ไม่ได้ชวนนิสิตชาวไทยให้มาร่วมชมการแสดง และคิดว่าในปีต่อ ๆ ไปน่าจะได้จัดกิจกรรมทัศนศึกษาเช่นนี้โดยพานิสิตชาวไทยไปด้วย ซึ่งน่าจะทำให้ผู้เข้าร่วมโครงการมีความประทับใจและสร้างความทรงจำดี ๆ ได้มากกว่านี้

ดังเช่นสำนวนว่า “ลางร้ายของปีที่ 2” ซึ่งนิยมใช้ในวงการกีฬาอาชีพและวงการแสดงของญี่ปุ่น เนื่องจากโครงการ “โรงเรียนฤดูร้อน” ในปีแรกประสบความสำเร็จเป็นอย่างดี ดิฉันในฐานะผู้ประสานงานจึงรู้สึกท้อแท้แต่ขณะเดียวกันก็คิดค้นว่าเราจะทำให้ดีกว่าปีก่อนได้หรือไม่ การมอบหมายงานให้เร็วขึ้นและให้เด็ก ๆ ทำงานกันอย่างอิสระมากขึ้น ตลอดจนการหากิจกรรมใหม่ ๆ เช่นการพาไปชมการแสดงมวยไทยนับเป็นความพยายามที่จะเอาชนะ “ลางร้ายของปีที่สอง” ดังกล่าว ซึ่งก็คงต้องถามผู้เข้าร่วมโครงการว่าเห็นด้วยหรือไม่ อย่างไรก็ตาม การทำกิจกรรมในปีนี้อาจทำให้ดิฉันเชื่อว่า การคิดและทำสิ่งใหม่ ๆ อยู่เสมอน่าจะเป็นแนวคิดที่สามารถนำมาใช้ในการบริหารจัดการโครงการในปีต่อ ๆ ไปได้ด้วย

京都大学「サマースクール」2014 年:「2 年目のジンクス」を超えて

チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座助教授

チョムナード・シティサン

2014 年 9 月 1 日～12 日において、チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座と同学部アカデミックサービス・センターの協力のもと、京都大学の学生のための短期学習プログラム、通称「サマースクール」が行われました。今回は 2013 年に引き続き 2 回目の実施となりました。前回同様、今回もタイ語とタイ文化の学習が中心でした。特にタイ語は前回より学習時間が増え、合計 30 時間勉強しなければならないことになりました。その他に、タイの宗教・社会・文化に関する特別講義の受講や、「日本語コミュニケーション I」の授業見学、そしてタイの古代から現代までの歴史と伝統を概観するための古都アユタヤと王宮・エメラルド寺院の現地見学も含まれていました。そして最後に、日本語専攻 2 年次の学生との共同学習による成果を「日本文化入門」という授業で発表をしてもらうというプログラムも組まれています。



前回のプログラムの経験を生かし、学生が共同学習・発表を行う「日本文化入門」では、いくつかのソーシャルメディアを紹介して両大学の学生がより早い時期で交流を開始できるよう計りました。また、昨年のタイは、大学の学年開始を 6 月から 8 月に変更した年でもあり、調整の 2 ヶ月間を共同学習の打ち合わせに利用してもらいました。その下地作りの甲斐もあってか、タイで初対面を果たした後、両大学の学生同士はすぐに仲良くなり、京都大学の学生も早くタイの生活環境になれ、タイの学生と比較的簡単に打解けた感じを受けました。発表のテーマも「東京オリンピックにおける日本人の外国語コミュニケーション」、「タイの王室と日本の皇室の関係」、「都市化と観光地・景観の保全」、「地方の活性化に向けた取り組み」、「日泰における移民との関わり」と実に多彩で時事的で独創性に富んだものになっていました。

そして今年のもう一つの特別なことは、タイ国政府観光庁より、サマースクールの参加者全員に Muay Thai Live: The Legend Lives というムエタイ・ショーのチケットを提供してもらったことです。このショーは ASIATIQUE The Riverfront というチャオプラヤー川沿いにある大型ショッピングモールの一角に新設された The Stage @ ASIATIQUE という専用劇場で上演されています。私がこの企画を思いついたのは、今回の参加者が全員男子学生で、経験上日本人の男性はタイのこの伝統的な格闘技を知っている人が多く、興味を持ってもらえるのではと思ったからです。そして予想通り、京都大学の皆さんは存分に迫力満点のショーを満喫し、またムエタイの由来や「決まり手」などについても大いに学んでくれたようです。公演後、皆さんが出演者との写真撮影を求めたり、専用ショップでムエタイ関連のお土産を楽しく選んだりした様子を見ると、連れて来てよかったと本当に思いました。事実このショーはタイ人にとっても十分楽しめるもので、タイの学生も誘えばよかったとも悔やんでいます。来年以降、このような現地見学プログラムには両校の学生が参加できるよう調整できればと思います。

日本のプロのスポーツ界や芸能界でよく使われる「2 年目のジンクス」という言葉のように、1 年目のサマースクールが大変な成功を収めただけに、2 年目の今回はそれ以上の成果が残せるか、調整役としてチャレンジングであると同時に圧力も感じました。早めの課題提示と学生主体のグループワークの実施、それに Muay Thai Live の鑑賞のような新しい企画は、そうした「2 年目のジンクス」を超えて行こうとする試みでしたが、成果のほどは参加者の感想を待たないといけません。それでも常に新しいことを考案・実施していくことが、今後このようなプログラムを運営していく上でヒントになると、今回のサマースクールを通じて確信した次第です。

山口 裕也(Yuya YAMAGUCHI)

経済学部 4 回生

今回のプログラムは大半がタイ語の講座で構成されていたこともあり、一番の学習成果はタイ語の基礎を習得できたことです。これは文字通り、タイ語の基礎が身に付いたということにとどまりません。英語以外の外国語を体系的に学ぶチャンスはあまりないため、他の言語を学ぶ必要性が出てきた時に今回の経験はきっと生きることでしょう。また、日本語を教える機会があった時や、日本語を学んでいる人と交流する時にも役に立つのではないかと思います。さらに教育に関心を持っている自分にとって、そもそも新しい言語をどのように教えるのかについて知ることができた点も収穫です。また、海外留学、海外交流への興味関心については一層増しました。今回はタイの学生にタイの魅力を数多く伝えてもらいましたが、この逆のことをしたいと思うようになりました。実際、私の帰国の翌日から、タイのタマサート大学よりサマースクールで京都大学に学生が来ていたため、彼らと一緒に授業を受けたり、京都の観光地を案内したりして、今度は日本の良さを伝える役目に回りました。

今回、日中のプログラムの大半はタイ語講座ではあったものの、放課後はタイの学生にバンコクを案内してもらったり、現地の料理を紹介してもらったりしました。個人的にバンコクには旅行で行ったことがあったのですが、現地の人に付きっきりで案内してもらえたことで、旅行者だけでは絶対に行き着けないようなところにたくさん行くことができました。これが旅行と留学の大きな違いで、留学の醍醐味だと思います。また、

日本に興味を持ち、日本語を必死に学んでいる学生と2週間過ごすのは日本人としていい刺激になりました。もっと自国や自分の言語について関心をもたなければいけないと思うことが何度もあったからです。

上にも述べた通り、プログラムの大半はタイ語講座でした。しかし、その他にも豊富なプログラムが提供されていました。例えば日本語の授業への参加、タイの宗教や文化に関する講義、そしてアユタヤや王宮への訪問などです。日本語の授業への参加を通して感じたのは、彼らの外国語の習得能力の高さ、またそれを支える教育制度のクオリティーの高さです。大学に入学して数ヶ月しか経っていないにも関わらず、ある程度日本語が話せる人がいて、そこからさらに1年経つとその能力が大幅に向上していることに驚かされました。これは日本が見習うべきことでしょう。また、文化についての講義や名所の訪問を通して感じたのは、タイ人にとっての宗教の重要度です。タイ人の生活と宗教とが密接な関係にあることを再認識しました。

このようにタイでの経験を改めて振り返ってみますと、タイ語基礎の習得という短期的な目標に加え、日本と世界をつなぐ架け橋となる人材に、という大きな目標にも近づけたのではないかと思います。

最後になりましたが、両大学のご担当の方々、終始サポートしていただいた学生の方々をはじめとして、このサマースクールプログラム実施に関わっていただいた全ての方々にお礼申し上げます。

私は、残り 1 年半となった大学生活をより有意義にするため、これから就職してアジアをともに高めあっていく仲間となる人たちはどのような人々なのかを理解するため、東南アジアの学生と交流したいと思い、このプログラムに応募しました。まず気づいたことは、彼らは全力で毎日进行中としていたことでした。交流した学生が日本語学科であったからかもしれませんが、毎日授業がみっちりあり、テストや宿題も多いのに、私たちと全力で遊ぼうとし、自分たちの趣味も全力で楽しもうとしていました。彼らのエネルギー感こそが、東南アジアの成長中の雰囲気象徴しているもので、日本の学生にはないものなのかもしれないと感じました。また、彼らはとても優しく素直でした。たった 2 週間だけお邪魔している私たちに対し、毎日のように遊んでくれ、チュラ大の事務員さんとの通訳、交渉なども行ってくれて、私たちが不自由なく生活できるように、あらゆることをしてくれました。話を聞いていても素直に笑ってくれたり、日本について興味を持って聞いてくれたりしました。彼らの温かさに触れて、2 週間という短い期間にも関わらず、タイを大好きになってしまいました。

私は、タイ学生との共同発表テーマを、「日本の皇室とタイの王室、違いとつながり、その将来」としました。タイ人学生が日本語で発表するテーマとしては、本当に難しいものを選んでしまったと思ったのですが、めげずにタイ王室に関する文献を読み、それを和訳してくれました。彼らはいつも遊んでいるように見えて、空いた時間や帰ったあとに、しっかり勉強していることが分かり、日本で甘えている自分のことが恥ずかしくなりました。難しいテーマだったために、

調べ学習が中心になり、考察が甘くなってしまいましたが、私にとっても、タイ人学生にとっても、知っておかねばならないテーマについて深く学べたと確信しています。

プログラムにおいては、語学研修と、文化研修の時間がとても長く用意されていました。そのどちらもが私にとっては非常に興味深かったです。タイ語は、日本語とも英語とも違う構造を持っていて、「なぜ?」「おもしろい!」と思う言い回しや構文だらけでした。また、私はタイ王室を発表テーマにしていたこともあり、王宮見学や、文化講義はとても面白かったです。日本では考えられないほど仏教と王室が密接に関連しているため、タイの人たちの信仰心は厚く、政教分離の日本では考えられない仕組みだと感じました。講義では、このような仏教国になった経緯も説明していただき、歴史と現在、どちらも学ぶことができたと思います。

私はこのプログラムを通じ、タイの人たちの優しい強さと、日本への尊敬の心を実感しました。タイ人学生は、日本に強いあこがれと興味を持っていました。しかし、彼らの優しい強さをもってすれば、日本はすぐにタイより存在感のない国になっていくと思います。彼らのもつ日本への気持ちが次世代にもつながるように、日本人、外国人、全員で努力していくことが、私たちの世代に課された使命だと感じました。

最後に、この場をセットしてくださった京大、チュラ大の方々、講義を行ってくださった先生方、共に日々を過ごした日本人、タイ人学生のすべての人たちに御礼申し上げます。

今回のプログラムはタイ語講座を主とし、タイ文化講座やフィールド研修でより深くタイについて学習できるプログラムでした。またタイの学生と一つのテーマについて議論し、考えたことをクラスでプレゼン発表することが課題として与えられました。それぞれについての内容を述べていきます。

タイ語講座は京大生用に用意していただいたクラスで受けました。生徒は京大生5人だけだったので先生との距離が近く、集中して学ぶことができました。タイ語は声調があったり、子音の数が多かったりと今まで学んできた言語と異なる部分が多かったので初めは大きな壁がありました。しかし2週間のうちに慣れも感じて、最終的に今後の語学学習に対する心理的な抵抗感を減らすことができました。文化講座はタイの歴史や日泰の関係・タイにおける日本語教育についての話をいただきました。タイについて知っていた話も知らなかった話も両方ありましたが、予想以上にタイには日本文化が受け入れられていて驚くと同時に、日本人として嬉しく思いました。

主たるプログラムであった共同学習では、僕のチームは「歴史的景観の保護」をテーマに選び、京都とアユタヤを比較しつつ、景観保護には何が大切なのかを考えました。これまで日本でもそれほどプレゼン発表の経験をしてこなかった僕にとって、他国の学生と発展的なテーマについて共同で発表することは大きなチャレンジでしたが、一生懸命取り組むことで発表することができました。この経験は今後でも生かしたいと思います。タイの学生と取り組んだことにより、僕が考えていたアユタヤではなく、現地人のア

ユタヤに対する意見を知ることができ、日本との意識の違いに気づかされたのは有意義でした。また実地研修で実際にアユタヤに行っていたので、より身近に感じながら話し合いを進めることができたのも良かったと思います。

こうしたプログラム以外の時間にも、タイの学生とご飯を食べるなど、一緒に過ごす時間を多く持てました。タイ文化を紹介してくれ、遊びにも連れていってくれた彼らのホスピタリティには感謝しかありません。加えてこれも交流して気づいたのですが、彼らは日本への強い留学志向を持っており、そのために勉強を頑張る姿には刺激されました。彼らの日本語の授業カリキュラムも見るからにハードそうであり、今まで僕が持っていた留学に対するイメージが正直甘いものだったと痛感しました。

印象に残ったのは、日本にも進出している韓国のアイドルグループ EXO のイベントをバンコクで偶然に見かけたときです。広場には多くの EXO ファンが集まっていて熱気がたちこめていました。国の垣根を越えたポップカルチャーの浸透力と、そういった文化交流がもたらすエネルギーの大きさと可能性を感じた体験でした。

今回はタイの学生のおかげもあり、2週間という短期間だったものの充実した日々を過ごすことができました。これをきっかけに仲良くなった学生とは今後も交流を続けたいですし、もちろんチュラ大の学生が日本に来るときはおもてなしの心で迎えたいと思います。

このチュラーロンコーン大学サマースクールプログラムに参加するにあたり、掲げていた目標が二つあります。一つはタイ語の基礎を学ぶということで、もう一つはタイの学生との交友関係を広げるということです。というのも、僕はタイでの留学を予定しているので、タイ語を勉強する必要と同時に、現地の友達を増やしたいという気持ちがあったからです。この研修ではタイ語の講座をはじめ、タイの文化講座、チュラ大の日本語専攻の学生との共同学習・発表などが盛り込まれており、僕の当面の目標を果たすために十分なプログラム構成でした。語学講座では、タイ語を学んだことのない僕たち 5 人の研修生は、2 人のタイ人の講師の方から一から丁寧に会話のレッスンを受けました。語学講座が始まる前はタイ語で挨拶、ありがとう、ごめんなさい、などのとても初歩的な言葉しかわからない程度でしたが、研修後にはメンバー全員がタイ語で自己紹介、ちょっとした会話のやり取りができる程度(中学 1 年生の英会話能力レベル)まで達成しました。これはすべてタイ語が全く分からなかった僕たちに、手取り足取りタイ語を教えて下さった 2 人の講師の方のおかげです。また共同学習・発表では、僕は 7 人のチュラ大の学生と、タイの人が本当にいきたい日本の観光地というテーマについて取り組みました。僕たちのグループは三回の議論・吟味を重ね、その内容をまとめたスライドを作成し、発表の練習をある程度行った後に、発表の日をむかえました。この共同学習に取り組んでいく中で、僕はタイの

人々の考え方や生き方についてとても教えられたような気がします。発表自体は褒められたものではなかったと思いますが、一緒にテーマについて話し合い、スライドを作り上げていったことは何にも代えがたい宝物だと思っています。

この二週間の研修の間に、僕は(もちろん他 4 人の研修生もですが)毎日のようにタイの学生さんにご飯を食べたり、遊びに行ったりなどして交流を深めました。世界一早い観覧車に乗りに行ったり、カラオケに行って日本の歌を歌ったりしました。また小旅行なども計画してくれたり、とても濃密な二週間を過ごすことができました。この研修において僕がとても印象に残っていることは、語学講座や共同学習だけではなく、このようにタイの学生と毎日遊んで心を通わせたことです。僕たちはこの触れ合いの中でこそ、文化や国境なども関係ない、大切な友人関係になれたような気がします。

最初に挙げましたが、この研修において僕は二つの目標を掲げていました。タイ語の基礎を学ぶこと、タイの学生との交友関係を広げることです。僕はこの研修においてこれらの目標は、大いに果たされた(100 点満点)と今のところは考えています。しかし、同時に今後の自分自身の行動内容によってはこれが 0 点に成り下がるものだと考えています。これからも留学に向けてしっかりとタイ語の勉強を続けること、そしてなにより研修中にできた関係を大切にすることというのを守り続け、研修の成果が無駄にならないようにしたいと考えています。

チュラーロンコーン大学で行われたタイ語の講義や日本語学科の学生との共同発表は非常に有意義なものであり、改めて考えてみても参加して良かったと思うことができる二週間のサマースクールでした。タイ王国には今までに何度か旅行やインターンシップで訪れたことがあったので、今回再度タイに行く機会を得て、純粋にタイ語が上手になりたいという意志を持って参加しました。実際に現地では外国人向けにタイ語の授業が開講されており、チュラーロンコーン大学文学部の校舎内では制服を来ていない外国人の生徒も見かけました(補足:タイの大学では学生は制服を着ています)。その中で彼らと同じテキストを用い、しかも 5 人だけで計 30 時間の内容の濃い授業を受けることができました。授業では世にも難解なタイ文字の読み書きは飛ばして、会話に重点を置いた“聞く”“話す”の部分を中心に行い、帰国前のタクシーでは運転手のお兄さんとタイ語+ときどき英語ぐらいで会話できてしまったぐらい上達することができました。さらに帰国後も勉強しやすいような体系的な授業、教科書であり、継続してタイ語を学んでいきたいと思う程満足した内容でした。

日本語学科の学生との発表では、事前に参加者で話し合い、それぞれがテーマを決めて、そのテーマについてタイ人の学生達と一緒に調べて議論をしたりしてプログラムの終盤で発表するという形式でした。私は「日泰における外国人のあり方」という題で、この先の日本、タイにおいて外国人を受け入れていく為にはどのような政策を取れば良いのかという具体的な内容に踏み込んだテーマでした。そのため、授

業後や昼休みなどを活用して共同発表のメンバーと準備する時間を設けて、発表に備えました。5 チームによる多岐に渡る内容の発表でしたが、どの発表も魅力的で十分に練られており、加えてタイ人たちの物の考え方も知ることができました。個人的には、日本人とタイ人の性格やライフスタイルは非常に似ていると以前から感じていましたが、発表の中で学んだタイが実際に抱えている問題(英語が話せなかったり、隣国との関係)なども日本と似通った部分が多くあって、このような発表を続けて行くこともお互いの国を理解し合う上で非常に重要なものだと思います。

特に現地での生活を充実させてくれたものとして、タイ人学生との交流は切っても切り離せません。共同で発表を行った日本語学科の学生だけではなく、日本に興味を持っていたり、高校の頃から日本語を学習していた話することができた他学科や他学部の学生も一緒になって夕食に出かけたり、どこかに遊びに連れて行ってくれました。授業で習うこと以上に、彼らといることでタイやタイ人というものを知ることができました。将来的にもタイと関わることができれば、私にとってこの上ない幸せです。

最後にこのプログラムを成功させるために出国前に色々な面でお世話になった森先生、佐々木先生、清水さん、現地でお世話になったチョムナード先生やチュラーロンコーン大学の事務の方など、関係者の皆様には改めてこの場を借りて感謝の意を示したいです。ありがとうございました。



● Vietnam



募集要項

SENDプログラム

2014 年ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクールプログラムのご案内

締切：2014 年 5 月 30 日(金) 12 時 00 分

【日程】

- ・ 9 月 14 日（日）ハノイ国家大学（ハノイ市）到着
- ・ 9 月 15 日（月）～ 9 月 25 日（木）：於 ハノイ国家大学（外国語大学、人文社会科学大学）、ベトナム社会科学院
オリエンテーション、ベトナム語・文化講座、学生交流、実地研修
- ・ 9 月 26 日（金）発表討論、修了式
- ・ 9 月 27 日（土）自由行動、出発
- ・ 9 月 28 日（日）帰国

【詳細】

- ・ 募集人数：10 名程度
- ・ 募集対象：京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
（大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、
農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科に所属する者を優先する）
- ・ 募集条件：異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・ 費用詳細
学費：約 20,000 円
航空チケット代：約 95,000 円
諸費用（国内移動費・教科書代・その他）：約 30,000 円～40,000 円
宿泊費：39,000 円（3,000 円×13 日）※近隣のホテル
海外旅行保険 [全員必須]：約 12,000 円 ※AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」に加入すること
（治療・救援費用無制限に設定）
- ・ 補助金
以下のとおり各種支援を行います。
研修支援（約 70,000 円）：7 名 ※JASSO の支給要件を満たす者
日本国籍を有する者、または日本への永住が許可されている者
前年度の成績評価係数が 2.30 以上、かつ収入が限度額未満の者
航空チケット代・宿泊費（154,000 円）：6 名
※ただし、参加決定後に取り消す場合はキャンセル料が発生します。

【申し込み】 今年度から応募方法が変わりました。

- ・ 申請手順：1. オンライン申請を行う。（オンライン申請の手順については【別紙】参照）
2. 申請内容をプリントアウトしたものに自署し、以下の書類と共に所定の提出先に持参する。
 - ①応募申請書（書式 1-1、短期派遣・単位取得プログラム）
 - ②語学力証明書（書式 3、英語に関する記入のみで可）
 - ③成績証明書
 - ④パスポートの顔写真ページ写し（未取得者はその旨を申し出、早急に取得すること）
 - ⑤誓約書
 - ⑥収入に関する証明書（JASSO 奨学金申請者のみ。応募申請書「書式 1-1」3 頁を参照のこと）
 - 給与所得者・・・源泉徴収票のコピー（税込み）
 - 給与所得以外・・・①確定申告を確定申告書の持参・郵送により行った場合
確定申告書（第一表と第二表）（控）の写し（税務署の受付印があるもの）
※税務署の受付印がないものは、加えて市区町村役場発行の「所得証明書」（有料）が必要
 - ②確定申告を電子申告により行った場合
申告内容確認表の写し（受信通知又は即時通知を添付）

学部生については世帯の年収（給与所得世帯 908 万円未満、給与所得以外の世帯 422 万円未満）の証明書、

大学院生については本人および配偶者の収入（修士課程 486 万円以下）の証明書を提出してください。

この奨学金を受給する学生は、帰国後に留学の学習成果に関する報告書の提出が義務づけられています。報告書が提出されない場合、もしくは不備がある場合、一旦支給された奨学金の全額返却が求められる場合もありますので注意してください。

- ・申請書提出先：研究国際部国際学生交流課交流支援掛 派遣プログラム担当 075-753-5679
（吉田国際交流会館地下 1 階 国際連携企画部門 事務室）
- ・選考：書類審査および面接により行います。
面接は 6 月 2 日以降に京都大学国際交流センター内で行います。
- ・最終結果通知：6 月中旬 オンライン申請時に登録済みのメールアドレスに通知します。

- ・本件照会先： 国際交流センター 森 真理子
佐々木幸喜 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp
研究国際部国際学生交流課 清水 瞳 shimizu.hitomi.2e@kyoto-u.ac.jp

【スケジュール】

- ・参加者オリエンテーション：6 月中旬
- ・ヘルスケア講義：7 月 2 日（水）12 時 10 分～12 時 50 分
（場所）国際交流センター K U I N E P 講義室

※オリエンテーションおよびヘルスケア講義は出席必須です。
オリエンテーションの日時・場所は追って連絡します。

【備考】

- ・自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・本プログラムは、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「ベトナム研修」（前期集中）の単位に充当されることがあります。
- ・本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（前期：金曜 5 限）を受講した上での参加を推奨しています。
- ・本プログラムには引率者が 1 名同行予定です（一部日程）。
- ・参加者全員に治療・救援費用無制限の AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。

～SENDプログラム～ ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学 Summer School



■2014年9月14日(日)～9月28日(日)■

【日程】

- ・ 9月14日(日) ハノイ国家大学(ハノイ市)到着
- ・ 9月15日(月)～9月25日(木)
於 ハノイ国家大学(外国語大学、人文社会科学大学)、ベトナム社会科学院
オリエンテーション、ベトナム語・文化講座、学生交流、実地研修
- ・ 9月26日(金) 発表討論、修了式
- ・ 9月27日(土) 自由行動、出発
- ・ 9月28日(日) 帰国



【詳細】

- ・ 募集人数 : 10名程度
- ・ 募集対象 : 京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、
農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科に所属する者を優先する)
- ・ 募集条件 : 異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・ 費用詳細 : 学費 約20,000円
航空チケット代 約95,000円
諸費用(国内移動費・その他) 約30,000～40,000円
宿泊費 39,000円(3,000円×13日) ※近隣のホテル
海外旅行保険(全員必須) 約12,000円 ※AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」加入
(治療・救済費用無制限に設定)
- ・ 補助金 : 以下のとおり各種支援を行います。(ただし、参加決定後の取消にはキャンセル料が発生します。)
研修費用(約70,000円) : 7名 ※JASSOの支給要件を満たす者
航空チケット代・宿泊費(154,000円) : 6名

【申し込み】

書 類 : ①オンライン申請書 <https://area34.smp.ne.jp/area/p/nita0mjmel1pepbt9/hbbQ7J/login.html>

※ID・パスワードは募集要項に記載しています。

- ②応募申請書 ③語学力証明書 ④成績証明書 ⑤パスポートの顔写真ページ写し
⑥誓約書 ⑦収入に関する証明書(JASSO奨学金申請者のみ)※詳細は「②応募申請書」参照

提出先 : 研究国際部国際学生交流課交流支援掛 派遣プログラム担当 075-753-5679
(吉田国際交流会館地下1階 国際企画連携部門 事務室)

締 切 : 2014年5月30日(金) 12時00分

面接日 : 2014年6月上旬

選 考 : 書類審査および面接により行います。

本件照会先 : 国際交流センター 森 真理子 / 佐々木 幸喜 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp

研究国際部国際学生交流課 清水 瞳 shimizu.hitomi.2e@kyoto-u.ac.jp

【備考】

- ・ 自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・ 本プログラムは、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「ベトナム研修」(前期集中)の単位に充当されることがあります。
- ・ 本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(前期:金曜5限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・ 本プログラムには引率者1名が同行予定です(一部日程)。
- ・ 参加者全員に治療・救済費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。



研修日程

2014 Vietnam In-Country Training
Period:14th September-28th September

As of 19th September

Date	Time	Category	Curriculum / Event	Lecturer / Staff	Place
Sun.,14th-Sep	10:30		出発 (VN331)		Kansai International Airport
	13:05		到着		Noi Bai International Airport
	Afterwards		ホテルチェックイン		ESALEN HOTEL
Mon.,15th-Sep	8:30-10:00		オリエンテーション	M.A Pham Thi Thu Ha M.A Nguyen Huyen Trang	ULIS A1棟509号室
	10:00-12:00		キャンパス案内、携帯電話 (SIMCard)購入	学生チューター	
	14:00-16:00	文化講義	ベトナム文化講義[教授言語:英語]	Dr. Ngo Tu Lap Assoc. Prof. Ngo Minh Thuy	
Tues.,16th-Sep	9:00-11:00	語学講義	ベトナム語講義	M.A Le Minh Hieu	ULIS A1棟301号室 Ngo Minh Thuy学部長のお宅 A2棟406号室 A2棟610号室
	11:00-13:30	昼食会	ベトナム人家庭訪問	Assoc. Prof. Ngo Minh Thuy	
	14:00-14:40	授業参加	総合日本語 (2年次)	M.A Nguyen Thi Trang	
	14:45-16:30	授業参加	日本語 作文 (2年次)	M.A Nguyen Thuy Ngoc	
Wed.,17th-Sep	Whole Day		自由行動 ※台風接近のため、予定していた「実地研修」は21日に順延	学生代表 Le Vu Tuan (ULIS)	ホアンキエム湖、玉山祠、ハノイ大教会
Thurs.,18th-Sep	9:00-11:00	語学講義	ベトナム語講義	Lai Thanh Hoa	ULIS A1棟301号室 A2棟402号室 A2棟601号室
	13:00-14:40	授業参加	日本語 読解 (2年次)	M.A Nguyen Hai Van	
	15:35-17:30	授業参加	日本語 会話 (2年次)	M.A Trinh Thi Phuong Thao	
Fri.,19th-Sep	8:00-10:00	授業参加	翻訳 (3年次)	M.A Tran Minh Phuong	ULIS A2棟401号室
	14:00-16:00	特別講義	環境問題[教授言語:英語]		VASS the Institute of Sociology, 9th Floor, No.1A
Sat.,20th-Sep	Whole Day		自由行動		
Sun.,21st-Sep	7:20-	実地研修	チャンアン、ホアルー (古都) ツアー	学生代表 Le Vu Tuan (ULIS)	Trang An, Hoa Lu (ロビー集合)
Mon.,22nd-Sep	9:00-10:50	文化講義	ASEAN[教授言語:英語]	Prof.Pham Quang Minh	USSH Meeting Room, Faculty of Oriental Studies, 2nd Floor, Building C
	14:00-15:50	文化講義	ベトナム文化史講義	Dr.Phan Hai Linh	
Tues.,23rd-Sep	8:00- 9:50	授業参加	日本宗教・思想講義	Dr.Pham Thi Thu Giang	USSH Room 504C, 5th Floor, Building C
	14:00-16:00	特別講義	環境問題[教授言語:英語]		VASS the Institute of Sociology, 9th Floor, No.1A
Wed.,24th-Sep	Whole Day	実地研修			Duong Lam Ancient Village
Thurs.,25th-Sep	9:00-10:50	文化講義	ベトナムの世界文化遺産講義	Dr.Phan Hai Linh	USSH Meeting Room, Faculty of Oriental Studies, 2nd Floor, Building C
	14:00-15:50	授業参加	日本語講義 (読解・作文)	Tran Thi Cam Van	
Fri.,26th-Sep	9:00-12:00	SEND	東アジアにおける生活様式の変容 ―日本・ベトナムを事例に―		USSH Conference Room, 5th Floor, Building H
			発表 (京都大学)	M.A Nguyen Huyen Trang (ULIS) 学生代表 Nguyen Thi Thuy Linh (USSH) Le Vu Tuan (ULIS)	
	13:30-14:30		発表 (ハノイ国家大学人文社会科学大学)		
	14:45-15:30		発表 (ハノイ国家大学外国語大学)		
	15:30-16:00		総合討論、講評		
	16:00		修了式		
Sat.,27th-Sep	a.m.		ホテルチェックアウト		ESALEN HOTEL
	Afterwards		自由行動		
Sun.,28th-Sep	0:05		出発 (VN330)		Noi Bai International Airport
	6:40		到着		Kansai International Airport

参加者名簿

	氏 名 (Name)	所 属	学 年
	舟橋 知生 (Tomomi FUNAHASHI)	総合人間学部	B1
	佐藤 衣美 (Emi SATO)	文学部	B2
	桑原 綾 (Aya KUWAHARA)	教育学部	B3
副班長	黒田 淳也 (Junya KURODA)	経済学部	B4
	石須 慶一 (Keiichi ISHIZU)	工学部	B4
	野田 貴頌 (Takanobu NODA)	工学部	B4
班長	和田 洋介 (Yosuke WADA)	大学院工学研究科	M2
	木村 可奈子 (Kanao KIMURA)	大学院文学研究科	JSPS

Tutoring Vietnamese (August 4th – August 8th, 2014)

Trinh Ha Ngoc Bich

D2, Graduate School of Environmental Studies

This report includes the class dairy and personal reviews on the course of tutoring Vietnamese language for a group of Japanese students who planned to go for a study tour in Vietnam. The course, which comprises only five classes, was aimed to: Introduce the first image of Vietnamese language; help the students to remember the alphabet and number; equip them with basic and essential phrases for the very beginners.

Day 1:

Before starting the lesson I took several minutes for introducing myself, my tutoring plan and memorizing the students' names. I personally suppose that teaching and learning a new language should be enjoyable and pressure-free. Therefore, I was trying to create a friendly atmosphere throughout the course of time.

- The first 30 minutes of the lesson was spent on introducing the alphabet. I noticed the student that pronouncing Vietnamese letters correctly was a relatively challenging task. Since I arrived at the room a while earlier than the students, 29 letters were written on the board in advance. I spoke the letters one by one and requested all students to repeat after me. 30 minutes was actually very short and we stopped around the first half of the alphabet. Although the students could speak along loudly and almost correctly, they seemed to be confused by some vowels which sounded similar, for example: “a” and “ă”; “o” and “ô”; “e” and “ê”; “u” and “ư”...etc.

- In the latter half of our class, students studied a number of greeting and self-introduction phrases, such as: “Xin chào”; “Chào + anh/chị/em/thầy/cô/bạn”; “Tôi/em/anh/mình + là + NAME”; “AGE + Tuổi” ...etc. Despite the complication in uses of pronouns, subjects and objects, students did not appear to be bothered. In contrary, they actively practiced and grasped the points quickly.

At the end of this lesson I requested two students to think of two words which they wanted to learn at the next class, at home, as a “shukudai” and briefly informed the content of the following day class.

Day 2:

- The first 20 minutes was spent on “checking” and revising the phrases which we had learnt. I delivered a small piece of paper to every student, asked them to write down- as much as they could remember- on how to introduce themselves in Vietnamese. Then I came to all of them, one by one, to help them write and pronounce correctly the sentences on their papers. One of the most popular writing mistake was “tôi” → “toi”. About speaking, I supposed the students should be advised that Japanese names were relatively hard to capture and memorize for Vietnamese people, especially when they uttered their names speedily. (Yousuke: X → Yo-u-su-ke: O)

- For the next 20 minutes, we went on learning and practicing the alphabet's letters. We also try vocalizing the words formed by combining the letters and marks. (B + a + huyền → Bà)

The rest of time we attempted to learn by heart numbers. As the lesson was about to end, some active students raised the questions on some new word and how to use those in sentences. That was a good chance to introduce the structure: Subject + Adjective (Tomomi + dễ thương → Tomomi is pretty/lovely).

Day 3:

- Checking and consolidation, asking students to make pairs and perform simple dialogues together.
- Practicing the alphabet and numbers with playing games.
- Studying more useful phrases for self-introduction: Tôi đến từ... → I come from...
- Talking on necessary preparations and notices when visiting Vietnam for the first time.

Day 4:

- Checking, playing games
- Learning new phrases: “Em tên là gì? → What is your name”, “Đây là cái gì → What is this?”, “Nhà vệ sinh ở đâu → Where is the restroom?”, “Cảm ơn bạn rất nhiều → Thank you very much”, “Tạm biệt → Good bye”, “Hẹn gặp lại → See you”, “Một-hai-ba-zô! → Similar to 「Kampai」 in Japanese or 「Cheer」 in English”.
- Words and phrases which students requested to be taught

Day 5:

This is the closing class. Therefore, a comprehensive test was planned consolidate and encourage the students. First, I randomly divided the class into two teams which will compete each other during the test. Of course, the winning team should be rewarded. The test was divided into 3 parts:

- + Part 1: Listening and writing down the specific numbers, sentences
- + Part 2: Checking the alphabets and numbers with an exciting fighting game
- + Part 3: All members of two teams had to give a speech of self-introduction. The score of each person would be added into the total score of his/her team.

These activities were greatly helpful to activate all members of the class and make them interacted, connected to another one. One of my efforts was to give all students the same chance to contact with Vietnamese language. I tried to notice the common mistakes, individual mistakes and correct them in front of everyone.

I believe this small course has achieved its initial goals in some aspects and the students could enjoy it. However, with only five classes it was really ambitious to expect the students to master the alphabets, pronouncing and forming words properly.

日 時	場 所	主な学習項目
8月4日(月) 12:10-13:00	吉田国際交流会館 南講義室4	母音、発音、「こんにちは」「私は(名前)です」
8月5日(火) 12:10-13:00		母音、子音、声調、発音、数字
8月6日(水) 12:10-13:00		母音、子音、声調、発音、数字、「私は〇〇歳です」
8月7日(木) 12:10-13:00		母音、子音、声調、発音、「私は〇〇出身です」
8月8日(金) 12:10-13:00		確認テスト(読む、書く、聞く)、自己紹介

(表作成: 佐々木幸喜)

Cảm nhận về chương trình SEND của Đại học Kyoto

Nguyễn Huyền Trang

Giảng viên Khoa Ngôn ngữ và Văn hóa Phương Đông

Đại học Ngoại ngữ - Đại học Quốc gia Hà Nội

Xin chào các thầy cô giáo và các bạn sinh viên Đại học Kyoto!

Tôi là Nguyễn Huyền Trang, giảng viên tiếng Nhật khoa Ngôn ngữ và Văn hóa Phương Đông, Đại học Ngoại ngữ- Đại học quốc gia Hà Nội. Năm 2013 và 2014, với tư cách là thành viên trực tiếp tham gia tổ chức, tôi rất vinh dự được gặp gỡ và tiếp xúc với các bạn sinh viên của Đại học Kyoto thông qua chương trình SEND. Đây là một chương trình trao đổi hết sức ý nghĩa với nhiều hoạt động phong phú. Trong thời gian của chương trình, 8 bạn sinh viên Đại học Kyoto đã tham gia giao lưu với sinh viên Việt Nam, học tiếng Việt, dự giờ học tiếng Nhật, trao đổi thảo luận ý kiến với giữa sinh viên hai trường, thăm quan thắng cảnh Hà Nội...

Trong hai tuần ngắn ngủi cùng tham gia các hoạt động học tập với sinh viên của Đại học Kyoto, các bạn đã để lại cho tôi ấn tượng vô cùng tốt đẹp. Ngay từ ngày đầu tiên, khi nghe các bạn chào hỏi bằng tiếng Việt, hay đặt rất nhiều câu hỏi hứng thú quan tâm đến Việt Nam trong giờ giảng văn hóa, tôi nhận thấy sự xuất sắc và tinh thần ham học hỏi của các bạn. Không chỉ vậy, bài thuyết trình được chuẩn bị kỹ càng với nội dung đặc sắc của các bạn trong buổi thảo luận càng khẳng định hình ảnh ưu tú của sinh viên trường đại học Kyoto.

Chúng tôi cũng hết sức ấn tượng với sự thân thiện, hòa đồng, khiêm tốn của các bạn với bạn bè xung quanh. Rất nhiều sinh viên của tôi đã chia sẻ rằng các em muốn tháng nào cũng được giao lưu với sinh viên Đại học Kyoto, đã học được rất nhiều điều về khác biệt giữa Nhật Bản và Việt Nam, hay còn nói rất muốn dẫn các bạn về giới thiệu với gia đình mình, hoặc muốn có chương trình homestay cho các bạn Nhật Bản... Hình ảnh các bạn sinh viên Kyoto mặc áo dài trong buổi lễ trao giấy chứng nhận và cùng nhau trao đổi quà, chụp ảnh lưu niệm với sinh viên Việt Nam thực sự là một kỷ niệm đẹp khó phai.

Bên cạnh đó, khoa Ngôn ngữ và Văn hóa Phương Đông chúng tôi cũng luôn cố gắng tạo điều kiện tốt nhất để các bạn sinh viên Đại học Kyoto có thể trải nghiệm được đời sống của sinh viên Việt Nam, cũng như ngôn ngữ văn hóa con người Việt Nam thông qua những hoạt động giao lưu hay những buổi tối thăm quan thành phố Hà Nội. Và qua chuyến đi Tràng An, nơi được ví như vịnh Hạ Long trên cạn, danh thắng tự nhiên lâu đời của người miền Bắc, chúng tôi mong rằng đã có thể đem đến cho các bạn hình ảnh một Việt Nam với thiên nhiên tươi đẹp và giàu truyền thống văn hóa. Chương trình giao lưu tuy ngắn nhưng chúng tôi hi vọng các bạn tích lũy được những hiểu biết và ấn tượng đẹp ban đầu và về tiếng Việt, văn hóa Việt và xã hội - con người Việt Nam.

Được trực tiếp tham gia chương trình từ giai đoạn bắt đầu bàn bạc kế hoạch với các giáo sư của Đại học Kyoto, chúng tôi nhận thấy Đại học Kyoto đã chuẩn bị cho chương trình một cách bài bản và hiệu quả, nỗ lực hết sức để các sinh viên có những ngày học tập, giao lưu bổ ích tại Việt Nam. Đại học Ngoại ngữ- Đại học quốc gia Hà Nội luôn đề cao tầm quan trọng của công tác giao lưu quốc tế, vì vậy chúng tôi mong rằng trong các năm tiếp theo, sẽ tiếp tục được đón nhiều hơn nữa sinh viên của Đại học Kyoto sang giao lưu, học tập. Đồng thời hi vọng mỗi quan hệ hợp tác giữa Đại học Kyoto và Trường chúng tôi ngày càng phát triển.

京都大学の SEND プログラムについて

Nguyen HuyenTrang

ハノイ国家大学外国語大学 東洋言語文化学部 講師

京都大学の先生方々及び学生の皆さん、はじめまして。ハノイ国家大学外国語大学東洋言語文化学部の日本語講師グエン・フエン・チャンと申します。2013年度・2014年度の京都大学との SEND プログラムに関わっていた者として、京都大学生と交流活動で接することができ、大変嬉しく思いました。このプログラムは、京都大学に在籍する8人が短い研修期間の中で、現地のベトナム人の学生との交流、ベトナム語講座、日本語授業参加、学生の専門性を活かした討論会、ハノイ観光など大変有意義な経験をするのできるプログラムだと思っています。



2週間にわたって、京都大学の学生といろいろな学習活動と一緒に参加しました。京都大学の学生の皆さんの印象は暖かく、素晴らしいものでした。最初の日にはベトナム語で挨拶したり、ベトナム文化講座でたくさんの興味深い質問をしたりする姿を見て、好奇心いっぱい優秀な学生さんだと分かりました。討論会における面白くてよく準備したプレゼンテーションを見て、京都大学は優秀な学生さんが集まる大学であることもよく分かりました。

また、いつも謙虚で親切で、周りの人へ配慮をしている京都大学の学生は非常に印象的でした。他の学生ともよく交流していた学生の皆さんのおかげで、本学部の学生は「毎月京都大学の学生と交流したい」「ベトナムと日本の違いがやっと分かった」「家族に紹介したい」「ホームステイがあればいいな」などの感想を述べていました。修了式での、両国の学生のアオザイの試着・記念品交換・写真撮影の姿は忘れられない思い出になりました。

それに、京都大学の学生の皆さんは市内観光・交流活動によってハノイの大学生の日常、公共交通、文化生活、言語等の様々な面を実感できるように努力していました。「陸のハロン湾」であるチャン・アンの旅を通じて皆さんにベトナムの自然景観美と文化的価値の双方を伝えることを目的としました。短期間の滞在とはいえ、ベトナム語、ベトナム文化・社会、及びベトナムの人に対する初めての印象を心に留めていただければと思います。

今回の研修については、京都大学の先生方と一緒に計画の段階から参加でき、京都大学の先生方が周到に効果的な準備を進めてくださっていたことが分かりました。さらに、学生のためにベトナムでの研修・交流プログラムを充実させようと、尽力してくださった京都大学の先生方の熱心な姿を拝見して、感服の気持ちでいっぱいになりました。ハノイ国家大学外国語大学は国際交流を重要視する教育機関として、今後とも、京都大学の多くの学生の皆さんが本学での交流及び研修を目的として来ていただき、ハノイ国家大学と京都大学との協力関係がますます発展していくことを祈念しています。

VÕ MINH VŨ

Giảng viên Khoa Đông Phương học

Đại học Khoa học xã hội và Nhân văn - Đại học Quốc gia Hà Nội

Xin chào các giáo sư và các bạn sinh viên Đại học Kyoto!

Chúng tôi rất vui khi có dịp được giao lưu với các bạn sinh viên Đại học Kyoto thông qua chương trình Vietnam In-Country Training 2014, từ ngày 22 đến 28/9/2014 vừa qua.

Trường Đại học Khoa học xã hội và Nhân văn trực thuộc Đại học Quốc gia Hà Nội đã tham gia tổ chức một phần chương trình Vietnam In-Country Training 2014 của Đại học Kyoto. Chỉ trong một khoảng thời gian ngắn ngủi 1 tuần, thông qua các bài giảng về “ASEAN và Nhật Bản”, “Di sản văn hóa thế giới của Việt Nam” và buổi tham quan làng Đường Lâm, ngôi làng duy nhất tại Việt Nam được công nhận là di sản văn hóa quốc gia, tôi tin rằng các bạn sinh viên Đại học Kyoto đã có cơ hội hiểu biết sâu sắc hơn về Việt Nam. Ngoài ra, chúng tôi cũng tổ chức một buổi thảo luận trao đổi ý kiến giữa sinh viên ba trường Đại học Kyoto, Đại học Khoa học xã hội và Nhân văn, Đại học Ngoại ngữ. Tại buổi thảo luận, các bạn sinh viên Việt Nam, Nhật Bản đã trình bày những hiểu biết của mình về chủ đề “Sự thay đổi dạng thức sinh hoạt tại Đông Á – Trường hợp Nhật Bản và Việt Nam”, đồng thời trao đổi ý kiến về việc những thay đổi đó có ảnh hưởng như thế nào tới hành động, giá trị quan của bản thân. Các bạn sinh viên Việt Nam chia sẻ, buổi thảo luận đã giúp các bạn đã hiểu rõ hơn về Nhật Bản và về chính Việt Nam, đã tự tin hơn trong việc tạo dựng mối quan hệ và làm việc với người nước ngoài.

Trong bối cảnh toàn cầu hóa hiện nay, xu hướng quốc tế hóa nghiên cứu giáo dục đại học đang diễn ra mạnh mẽ ở cả trong và ngoài trường đại học. Cơ hội giao lưu quốc tế cho sinh viên đang dần dần trở thành yếu tố cần thiết không chỉ đối với tương lai của Việt Nam, Nhật Bản mà đối với cả Châu Á.

Tại trường Đại học Khoa học xã hội và Nhân văn, trong những năm gần đây đã có nhiều hơn các chương trình giao lưu sinh viên. Chúng tôi cũng đang tích cực mở và phát triển nhiều chương trình giao lưu quốc tế đa dạng, tiếp đón nhiều sinh viên đến từ nhiều nơi trên thế giới, trong đó có Nhật Bản. Kinh nghiệm được giao lưu với các nền văn hóa khác, trao đổi ý kiến với những người có giá trị quan khác nhất định sẽ là tài sản quý giá cho mỗi sinh viên. Do đó, chúng tôi rất hi vọng có thể thực hiện nhiều chương trình giao lưu sinh viên có ý nghĩa hơn nữa với Đại học Kyoto trong tương lai.

Vo Minh Vu

ハノイ国家大学人文社会科学大学 東洋学部 講師

京都大学の先生方、学生の皆さん

このたび、2014Vietnam In-Country Training (2014 年 9 月 22 日～28 日)を通じて、京都大学の学生の皆さんと交流することができ、大変うれしく思います。

ハノイ国家大学の直属大学である人文社会科学大学ではこのたび、京都大学の 2014Vietnam In-Country Training プログラムの一部を実施させていただきました。わずか 1 週間ではありましたが、「ASEAN と日本」、「ベトナムの世界文化遺産」の講義、及び国の文化財として認定されている唯一の村である Duong Lam 村での実地研修を通じて、京都大学の学生の皆さんがベトナムのことをより理解できたと信じております。講義のほかに、京都大学、人文社会科学大学、外国語大学 3 者による発表討論会が行われました。この討論会において、3 校の学生は、「東アジアにおける生活様式の変容—日本とベトナムを事例に—」について、それぞれの見識を発表しました。また、その変容が個人の活動、価値観、他者への意向にどのように影響を与えているかについての意見交換を行いました。この発表討論会を通じて、他者である日本のこと、自国であるベトナムのことをより深く理解でき、外国人と関係を築いた自信や外国人と働く自信が高まったという声は、ベトナム人学生から多く聞かれました。

全世界のグローバル化が進むにつれて、大学の教育研究における国際化も大学の内外で激しい勢いで進んでいます。学生の国際化は、ベトナム、日本両国のみならず、アジアの未来にとって必須のものとなりつつあります。

人文社会科学大学では、近年学生交流が増えつつあり、日本をはじめ世界中からの学生を受け入れて、さらに多くの多様な国際交流プログラムを開拓・充実しております。異文化交流、異なる価値観をもった人々と意見を交わすことは、間違いなく将来のキャリアのための貴重な資産となりますから、今後、京都大学と人文社会科学大学との学生交流分野において、より有意義な交流プログラムを実施できることを期待しております。

どうもありがとうございました。

今回私は、ベトナムの独自の文化、伝統を肌で感じ、単なる知識でしかなかったものを経験として身につけることで、現在行っているボランティア活動をより充実させる為、ならびに将来の日本の経済やベトナムの発展の為に、より有効に働けるような人に成長したいと思い、このプログラムに参加しました。二週間のプログラムでのベトナム生活は新しい発見の連続であり、私の人生における大きな一歩となりました。ハノイ市街地に着くや否や、若者の多さと活気に圧倒され、あちこちでひっきりなしに高層ビルや鉄道の建設が行われている風景には驚かされました。街はめまぐるしく動き、絶えず成長していました。本プログラムでは、ハノイ国家大学外国語大学、人文社会大学、社会科学院の三カ所で、日本語専攻のクラスへ参加したり、ベトナム文化や環境問題、家族やジェンダーに関する特別講義やベトナム語講座を受講したりしました。その他にも、古都チャンアン(世界遺産)やドンラム村(伝統的建造物、景観の保護管理地区)での実地研修を行いました。最も印象深かったのは、実地研修でドンラム村へ行った時のことです。この村は伝統的なお菓子をつくる村で、その伝統を保存すべくお菓子を作る数軒の家庭にJICA から援助がなされていました。援助のおかげで生計が立てられるようになったのは良いものの、かえって援助を受けていない家庭との経済的格差が生じてしまっていました。援助によって伝統を守るとはとても大切なことですが、そのせいで、村民同士で軋轢が生じ、村のコミュニティが変化してしまっただけでは、村を保護したことにはならないはずです。ボランティア活動に参加する際、単に援助をすれば相手に幸せを与えることが出来る、と思い込んでいた自分の浅はかさに気づきました。相手にとっての幸せとは、こ

ちらの側の基準で判断できるものではなく、相手の側の基準を満たすかどうかで決まるものなのだと思います。その基準を少しでも共有するためには、相手の生活習慣や文化、思想、歴史的背景を学ぶことが不可欠であると強く感じました。ベトナムの急速に変化する様子をこの目で見て、文化や伝統生活の保存、継承について今まで以上に関心を持ち、その方法を今後の大学生活でのひとつのテーマにしていこうと思っています。

また、ベトナムの学生との交流を通して、ベトナム人の熱心さに感心し、素直さに心引かれました。言語に自信が無いと言いながらも必死に伝えようとする積極的な姿勢は、圧倒的に日本人に勝るものだと感じました。また、自分の恋愛の話から将来の話まで生き生きと語る姿は、そういうことを恥ずかしがったり誤魔化したりしてしまう日本人とは対照的で、新鮮に感じました。社交性をもち、かつ意欲的に学問に励む、活気ある若者にあふれたベトナムの将来はわれわれの想像以上に豊かなものになるだろうと思います。言葉では上手に書けませんが、これまでよりもベトナムという国、そして世界が強くて大きいものに感じ、自分も日本の将来を担う一員である、という自覚がしっかりと心に刻まれました。

今回のプログラムは、私自身のベトナムについて考えが変わっただけでなく、日本の未来やその担い手としての自分自身を見直すチャンスとなりました。将来を担う世代同士が知り合いになり、意見を交換し、互いに世界が広がりました。そして、将来においても今回築いた関係を効果的に生かして、互いの社会に大いに貢献できると確信しています。貴重な経験をさせていただき、感謝いたします。

このプログラムに参加したことで非常に多くのことを学んだだけでなく、将来の自分について深く見つめなおすことができたと思っています。出発前、私は異文化交流を通じて日本という国を客観的にみるという目標を立て準備を行っていました。しかしプレゼン発表準備の段階で、日本人なのに知らなかったことを多く発見し正直恥ずかしい思いをしていました。しかし、ベトナム人学生の皆さんに、より多くの日本文化を知ってもらいたいという思いのもと、一生懸命準備に取り組みました。

ベトナムでは、文化講座の他にベトナム語研修、実地研修、そして日本語学科クラスの授業参加などがありました。文化講座では先生方がベトナムの文化や歴史などについて講義をしてくださり、特にASEANについての講義は東南アジアからみたベトナムについて知ることができて、個人的に非常に興味深いものでありました。また、実地研修では Trang An、Hoa Lu そして Duong Lam 村に行きました。大自然を体で感じ、ベトナムの歴史について学び、そして農村の文化を目の当たりにしました。それぞれの研修ではベトナム人学生の方も案内してくださり、より深くベトナム文化について理解することができました。しかし、自分の中で最も印象深く残っている経験は、日本語学科クラスの授業参加です。学生の皆さんが私たちを温かく迎えてくださり、たくさんの交流を行いました。話をしていると、彼らは日本に来たい、あるいは留学したいと強く考えており、一生懸命日本語の勉強を行っている様子でした。あるクラスでプレゼン発表の手伝いをした際、自分が担当したグルー

プで非常に衝撃を受けたことがあります。それは、日本語を勉強している理由についての統計だったのですが、「日本語は将来の仕事に役立ったため」という項目が一番多く占めていたのです。日本文化が海外で多くの人に受け入れられていることは知っていましたが、学生たちが将来の自国あるいは日本のために日本語を勉強していると分かったとき、私は初めて自分が日本人であることに誇りを持つと同時に大きな責任感を感じました。彼らは日本に対して大きな期待を抱いて現在一生懸命勉強しているのだから、私たち日本人はそんな彼らの期待を裏切らないようなすばらしい日本社会を作っていかなければならない、と心から思いました。これからの日本社会を担っていくのは私たち若者ですが、日本の人々だけでなく世界の人々のためにも責任感を持って働くことの重要性を学んだような気がします。

出発前にたてた「日本という国を客観的にみる」という目標は、少し達成されたと思います。日本人である限り、日本を客観的にみることは難しいかもしれませんが、2 週間様々なベトナム人学生たちと交流して、彼らからみる「日本」を聞くことができました。日本語を勉強する彼らにとって日本とは憧れの場所であると同時に、自分たちの将来がかかっている場所です。そのような話を彼らから聞くことができて、これから私は日本社会、そして世界の様々な人々に対して何を行うべきなのか真剣に考える必要があると痛感しました。2 回生という時期に、このようなことに気付くことができたので、この研修は私にとって本当に有意義なものでした。

今回のプログラムでは、SEND プログラムの目的である現地の言語、文化学習や日本文化の紹介はもちろんのこと、現地で日本語を学習する人との交流や生活体験など、様々な経験を行うことができました。

ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学においてはベトナム語やベトナムの文化や世界遺産について、また ASEAN や地球温暖化などについて講義していただきました。特に印象に残っているのは ASEAN についての講義です。国際政治や世界史についての知識をほとんど持っていない状態で、さらに英語での講義ということで身構えていましたが、分かりやすく、楽しくお話をしていただけたため、ASEAN についての基本的な事項やこれからの展望などについて、非常に興味深く聞くことができました。

ハノイ国家大学の学生とは日本語の授業への参加や相互学習、食事や休日の活動を共にすることを通してかなり交流を深めることができました。発表会では私たちは日本の暮らしや文化についてベトナムの学生に紹介し、ベトナムの学生にはベトナムの昔と今の違いや、ベトナム人と日本人との違いについて発表してもらいました。お互いの発表についての質問や意見交換も盛んに行われ、実りの多い発表会になったと思います。発表会後の修了式ではアオザイを着て、ベトナムの若い女の子の間で流行っている娯楽である「自撮り (selfie)」を楽しみました。

また、実地研修として訪れたチャンアンではベトナムの大自然を満喫し、ドンラム村ではベト

ナムの伝統的な生活様式について知ることができました。中でも私が最も気に入ったのは、ドンラム村で見学した寺院です。私は日本の寺社仏閣が好きで、奈良に住んでいるためよく寺院や神社を訪れるのですが、ドンラム村の寺院は日本のそれとはまったく異なる雰囲気を醸し出していました。特に驚いたのが仏像の違いです。日本の仏像は木像ならば茶色、金銅像などの金属製のものなら金属がくすんだり錆びたりした色といったものが多いのですが、ドンラム村の仏像は赤や緑で彩色を施されており、またかなり大きかったのも日本の仏像とは全く異なる迫力がありました。仏壇にはスーパーで売っているようなチョコパイやクッキーが供えられており、そこにも日本との違いが感じられて面白かったです。

このように今回様々なことを学び、経験することができましたが、心残りが二つあります。一つは、ベトナム語をあまり身に付けることができなかったことです。プログラム中にベトナム語学習の時間は二回ありましたが、そこで学んだことを生活の中であまり使うことができなかったことを反省しています。もう一つはあまり観光をできなかったことです。毎日午前、午後と予定が詰まっており、あっという間に二週間が過ぎてしまいました。交流した学生たちとは SNS を通じてまだ連絡を取っていますし、もう一度行きたい場所も心残りだと感じることもあるので、ぜひまたベトナムを訪れたいと思います。そのときにはもう少しベトナム語を話せるように、ベトナム語の勉強を継続していきたいです。

二週間という短い間でしたが、とても濃密な二週間でした。出発前に大きく分けて二つの目標を定めたのですが、研修を通してそれらを達成することができました。

一つ目の目標はベトナムを肌で感じ、ベトナム人と仲良くなり、彼らの考え方を知ることです。実際に日本語の授業に参加して多くのベトナム人学生と仲良くなり、彼らと一緒に話をし、勉強し、遊ぶことを通じて、彼らの考え方などを知ることができました。日常的な物事に対する考え方だけでなく、歴史に対する考え方も学ぶことができました。特に驚いたのは、ベトナム人のフランスに対する考え方です。ベトナムはフランスに支配されていたにも関わらず、フランスに対して悪い印象を持っている人は少なく、むしろよい印象を抱いている人が多いというのは驚きました。その原因として、ベトナムは最終的にフランスに勝ったから、というのも考えられますが、それだけでなく、ベトナム人は過去のことを水に流し未来へ進むというのもこの原因の一つであると知りました。しかし一方で、国境を接し、過去に何度も戦ってきた中国に対する印象はかなり悪いようでした。また日本に対する印象は悪くなく、むしろよいものでした。これらはものすごく興味深かったため、今後自分自身このようなことを調べていきたいと思いました。また交流を通して、ベトナムの学生は日本人に比べて好奇心が強く、私たち日本人も見習わなくてはならないと思いました。他にも、ベトナム人はとても親切で人懐っこいように感じられました。もちろん出会う学生が、日本が好きであるからかもしれませんが、それを差し引いても、日本人より親切で優しい

ように感じられました。

二つ目の目標は日本のことを伝える、ということでしたが、これに関しては達成できた部分とできなかった部分がありました。ベトナム人学生との交流や相互学習を通して、日本人の日常生活や物事に対する考え方などについては伝えることができました。また私を含めた日本人学生の行動や態度を通して、日本人がどのようなものであるのかというのも伝えられたと思います。しかし日本について十分に伝えることはできませんでした。このことは反省し改善していきたいと思います。例えば、日本の世界遺産の数などを答えられないことがあり、“外国と比較した日本”に関する知識をこれからつけていかななくてはならないと思いました。また、日本はもともと男尊女卑だったが、最近はその状況が変わってきているのはなぜなのか、といったことに対して、普段あまり考えることはなかったのですが、今後このようなことも考えていきたいと思いました。すなわち、日本に関する知識をもっと身に付けると同時に、日本はなぜそうなっているのか、ということについても知っていきたいと感じました。そして今後、外国人に伝えていきたいと思います。

今回の研修を通じて多くのものを得ましたが、そのなかでも、ベトナム人との友情はものすごく大事な宝物となりました。二週間という短い間にこれだけ仲良くなれたのは本当に幸せなことであり、今後も一生連絡を取り続けていきたいと思います。日本とベトナムで離ればなれになってしまうかもしれませんが、これからもこの宝物を大事にしていきたいです。

私は、今回 9 月 14 日から 9 月 28 日までの 2 週間、ハノイ国家大学サマースクールプログラムに参加しました。はじめは、ベトナムという国は、歴史や地理の教科書で習うベトナム戦争をしていた、気候があたたかいところという印象でした。私は最近国際的な人間になりたいと考え始めたのですが、東南アジアの国々すら知らないという状態でそのように考えるのは非常におかしいことです。そこで今回のプログラムでは、「ベトナムの文化や生活を学ぶこと」を目標にしました。また、ベトナムの学生と交流するということで、「日本の良さを伝える」、「日本語をわかりやすく伝える」ということを目標にしました。

実習内容としては、1 週目は、外国語大学で授業を受け、2 週目は主に人文社会科学大学で授業を受けました。外国語大学では、日本語選択の生徒と一緒に授業に参加したり、ベトナム語を習ったりベトナムの歴史を学んだりしました。

日本語専攻の生徒はとても熱心に日本語を学んでいました。その姿勢はとても見習うべきものがあり、私の学習に対する気持ちを大きく変化させるものでした。また、積極的に授業に参加して発言するという、受け身にならない授業は参加していてとてもためになりました。京都大学に戻っても積極的に授業に参加しようと思いました。ベトナム語講座では、数の数え方や、簡単な文法を学びました。ベトナム語は相手に対して言葉を変化させるのが日本語と似ていました。ベトナムのホスピタリティは、日本と似ていると言いますが、言葉の点を考えても、日本と似ているのかと思います。

実地研修では、チャンアンという「陸のハロン湾」と呼ばれるところと古い町並みのダンロム村に行ってきました。チャンアンは、ボートにのり、洞窟を探検するような体験でした。洞窟はとても

神秘的でベトナムの自然の美しさに感動しました。2 週目は、人文社会科学大学でベトナムの成り立ちを学びました。その時先生がおっしゃっていた「ベトナムは戦争が多いが、戦争は好きではない」という言葉です。とてもその言葉からは平和や人種の尊重について考えることができました。2 週目の実地研修はダンロム村で、JICA も支援しているベトナムの古い町並みを観光地化したものです。現地の人の生活様式や伝統文化を学ぶことでベトナム内部の暮らしを知ることができ、とても斬新な体験でした。しかし、そこで現地の人に嫌がられるという体験もしました。たしかに、その土地では、普通に生活している方々もたくさんおられます。これから、生活している方と観光地としての役割を上手く調和させていくことが課題だと思いました。

これらの研修から私は、ベトナムという国の良さを 2 週間という短い期間で発見することができました。またベトナムの学生と交流することによって、ベトナムの大学生の生活を理解することができました。しかし、学生生活だけではベトナム全体を理解したとは言えないので、それ以外の生活も知りたいと思いました。日本の良さを伝えるという目標は達成できたと思います。ベトナムは日本の製品であふれていて、とても日本の良さを分かってくれていました。K-POP が想像以上に流行しており、日本の文化も韓国に負けずに宣伝していく必要も感じました。日本語を分かりやすく伝えるのは、思っていた以上に難しかったのですが、ベトナムでは日本語がとても人気であるので、ベトナムと今後関わる場合は、このような能力が必要だと感じました。

今回私は、9月14日から28日までの約二週間、ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクールプログラムに参加しました。

まず語学講義としては、出発前に5日間、アルファベットから基本を学習した後、プログラム中にベトナム人の日本語の先生から2度、買い物時に必ず使う数字や値段の尋ね方など、滞在中に特に役立つフレーズを学びました。日本円と比べて通貨の単位が大きく(参考:100円 $\approx$ 20,000ドン)初めは苦労しましたが、徐々に慣れて終盤には値切り交渉もスムーズにできるようになりました。日本語もしくは英語で行われ文化講義では、文化、宗教、歴史を中心に学びました。今まで、ベトナムという一国だけに注目して勉強したことがなかったので、どれも初めて知る興味深い内容で、非常に良い経験ができました。ベトナムの戦争続きの歴史を聞いていると、今後の日本、世界はどうあるべきかを自分なりに考えなおすきっかけにもなりました。

現地の大学生との共同学習・相互学習としては、読解、作文、会話、翻訳など、実際に日本語を勉強している授業に参加しました。中学校から熱心に勉強している学生は本当に日本語が上手で、私も同じだけ英語を勉強してきたのですが、彼らとの差を痛感し、もっと頑張らないといけないと感じました。また、昼食・夕食を彼らと一緒に食べることが多く、さらに休日にはたくさんの学生にハノイ周辺の案内をしてもらったので、授業時間以外でも学ぶことが多々ありました。

この研修期間中によく感じたこととしては、日本語の難しさです。もちろん私を含めた日本人は、日本で生活している時に何気なく使っています。しかし、それをいざ教えようとした時に、何となくイメージがあるけどうまく伝えることができない、ということが何度もありました。例えば句読点や記号の使い方です。普通ではあまり経験することのない「ネイティブ」という立場に立つことで、新しい視点が得られたと感じました。他には、ベトナムには笑顔の人が多かったです。学生、先生、タクシーの運転手、店の店員など。私も彼らのように笑顔で毎日楽しく過ごしていけるように努力していきます。

私は海外旅行が好きで長期休みに出かけることが多いのですが、今回は学校のプログラムの一員として参加したので、「単なる旅行ではできない現地の大学生との交流」を第一目的としてきました。この点については、非常によく達成できたと感じています。毎日のように知らない人達と出会い、さまざまな話をし、ベトナムに大切な友達がたくさんできました。これからも交流を続けていき、いつかまた再会したいと強く願っています。しかし今回失敗してしまったことが一点あります。それはベトナム語の上達です。初めはベトナムの学生に何度も質問して教えてもらいながら、少しずつ語彙が増えていったのですが、途中から相手が日本語を話せることに甘えてしまい、使う頻度が極端に減ってしまいました。今後、もしこのようなプログラムに参加する機会があるなら、この失敗を活かしていこうと思います。

今回のプログラムの内容は主に、ベトナム語の会話、日本語の読解・会話、ベトナムの文化史等の講義が中心で、最終日は日本とベトナムを事例とした生活様式についてプレゼンテーションで発表しました。具体的には、ベトナム語の日常会話について習得し、ベトナムの学生に日本語を教えることで日本人が使用する日本語のイメージ強化に努めました。ベトナムの歴史や経済について学んだほか、ベトナム人にあまり馴染みがないであろう鉄道（特に新幹線、リニアモーターカー）について知ってもらい、日本に来るときのイメージ付けになることを期待して発表しました。

授業等を通してベトナムの学生と接する機会が多く、一緒に観光や食事をする中で、日常生活から学問まで幅広く交流することができました。また、ハロン湾、チャンアン、ドンラム村に行くことで、ベトナムの自然、農民達の生活について触れ、貴重な体験となりました。

本プログラムの参加を通して、やはり多くの現地の学生と交わることができたことが一番大きいと感じました。ベトナムの学生は人懐こくて純粋な者が多く会話していてまず楽しかったです。恋愛等の日本人の恥ずかしがりそうな話題も積極的に話しており、両国の性格の違いを感じました。また、ベトナムは東南アジアの一国ですが、タイのバンコクなどと大きく異なった、むしろ中国と多少似た独自の文化を持っていることを感じ、驚かされました。ベトナムは古くから戦争を中心として中国と接点が多くあったことなど新しい発見があり、とても興味深かったです。

私は本プログラムにおいてベトナムの文化を味わうことを目標にしていました。上記の点以外にも、農耕をしている牛、チャンアンの自然な洞窟、野生のバナナ、バイクの多さや車を優先する交通マナーの違い、社会的地位や年齢に応じて人称代名詞が複雑に変化するベトナム語、男性のアオザイ試着など幅広い点においてベトナムの文化を味わうことができました。国による性格や価値観の違いを知ったり海外の学生と接したりすることは、異なる文化を持つ海外で仕事をする上で大きなヒントになると思いました。

私は本プログラムでは班長を務めさせていただきました。行動の自由度が比較的高く、日本と違い授業や実地研修、健康面でも不測の事態が起こりやすい中、皆を「統率」するのは想像以上に容易ではなかったです。しかし、今回の経験で身に付いた判断力、決断力は今後社会人としてチームを率いるときに大きく役立つと思い、私は班長をやってよかったと思っています。

思い起こすと、この二週間はあっという間でしたが、とても内容の濃いものでした。帰国した今でも、ベトナムの街の雰囲気や食事の味、交流を重ねた学生たちとの思い出が鮮明によみがえってきます。特に文化の垣根を越えて多くを語り合ったベトナムの学生さん達と、困ったときはいつも協力してくれ、時には大切なアドバイスをしてくれた京大のメンバーはかけがえのない仲間、財産であり、今後も深い付き合いをしたいです。

研究上の関心から以前より常々ベトナムに行きたいと考えていたのですが、なかなか機会に恵まれずにいました。そのような中でこのプログラムを知り、ベトナム社会への理解を深められる絶好の機会だと思い、今回のプログラムに参加させていただきました。

本プログラムの半分近くは、ハノイ国家大学外国語大学日本語専攻、およびハノイ国家大学人文社会科学大学日本学専攻での授業への参加で占められています。どのクラスでも、学生たちの熱気に圧倒されました。日本語を勉強し始めて1年という学生でも、日本語でコミュニケーションをとることができる点に感銘を受けました。日本語を専攻するようになった理由を尋ねると、日本のサブカルチャーへの興味、給料のよい日系企業に就職するため、東日本大震災であれほどの被害を受けながら復興していることから関心を持った、などさまざまな回答が返ってきました。両校の学生は食事や観光に連れて行ってくれるなど、なにかと我々の面倒を見てくれ、ベトナム人の高いホスピタリティを実感しました。

研修最終日には「東アジアにおける生活様式の変容—日本・ベトナムを事例に」と題して、3校の学生が日本語でプレゼンテーションを発表しました。研修中なかなか準備する時間が取れないにも関わらず、京大の学生たちはそれぞれベトナムの学生の興味を引けるように内容を工夫してプレゼンテーションを準備し、ベトナム側学生と活発な質疑応答を行っていました。外国語大学・人文大学の学生によるプレゼンもどれも興味深く、こちらも活発な質疑応答となりました。

上記の授業参加以外には、外国語大、人文社会大、社会科学院で、ベトナムの歴史、社会、環境問題、国際政治についての講義を受け、ベトナムへの理解を深めました。質疑応答ではベトナム人の中国、フランス、アメリカに対する見方や、ASEANから見た日本など、日本ではなかなか聞く機会のない意見を伺うこ

とことができました。また2回だけではありましたが、初級ベトナム語を勉強しました。

実地研修では、今年世界遺産になったチャンアンと古都ホアルー、昔ながらの農村が残るドンラム村に行きました。チャンアンでは、小船に乗って幻想的な山々や鍾乳洞の洞窟を巡りました。ドンラム村は、事前に同村の世界遺産登録活動を行っている人文大の先生から講義を受けてから実地研修に臨んだため、実際に村を巡ることで、伝統的なベトナムの農村に対する理解が深まりました。この村はJICAの支援を受けているのですが、たまたま同村で活動を行っている青年海外協力隊の方にお会いでき、お話を伺うことができました。自由行動のできる週末には、世界遺産であるハロン湾にまで足を延ばしました。

前述のようにベトナムに来たのは初めてでありまして、今まで知識としてしか知らなかったベトナムを体験することで得られたものは大きかったです。特に私は韓国で在外研究を行っているため、日本および韓国とベトナムを比較する視野を新たに持つことができました。また引率者の立場での参加でありましたが、学年も専門分野も海外経験もさまざまな学生たちから学んだことも多かったです。ベトナム語や英語が通じなくても臆することなく、日本語と片言の英語・ベトナム語・ジェスチャーでコミュニケーションを成立させる姿からは、言葉が通じなくとも、心を開いてコミュニケーションを取ることの重要性に改めて気づかされました。

タイトなスケジュールのため終盤体調を崩した参加者もいたのですが、概ね大きなトラブルもなく日程を終えることができたのは幸いです。ここまで充実した研修となったのは、プログラムをご準備下さった各大学の先生方や、滞在中サポートしてくださったベトナム人学生達のおかげです。この場を借りて深く御礼申し上げます。

「京都で学ぶアジアと日本」

「京都で学ぶアジアと日本」研修 2015 参加学生募集のお知らせ

《短期 SEND プログラム__京都大学学生対象》

研修概要

2015 年 2 月、京都大学国際交流推進機構国際交流センターでは、京都大学アジア研究教育ユニット(KUASU)との共催で「京都で学ぶアジアと日本」研修 2015」を実施します。

このプログラムは、SEND 双方向型教育プログラムとして企画されました。「SEND」(Student Exchange – Nippon Discovery)プログラムとは、ASEAN を始めとする世界各地と日本との架け橋となるエキスパート人材の育成を目指す事業で、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」の支援を受けています。

今回、プログラム実施一回目として、チュラーロンコーン大学(タイ)やハノイ国家大学(ベトナム)といった ASEAN 地域を代表する大学から、学生を 15 名招聘することとなりました。ついては、タイ、ベトナムの学生と一緒に本プログラムに参加する学生を、京大内でも募集したいと思います(10 名程度／研修費等の補助あり)。日本語・日本文化講義を受講したり、討論したりする中で、日本が持つ可能性、あるいは課題を見つめ直しませんか。

将来、長期留学や在外研究・勤務といった進路を考えている人はもちろん、海外の学生との交流に関心を持つ人の参加をお待ちしています。

研修日程・内容 2015 年 2 月 8 日(日) ～ 2 月 21 日(土)

2 月 8 日(日)	関西空港に到着(タイ／ベトナム)
2 月 9 日(月)	開講式、キャンパス案内
2 月 10 日(火)～2 月 19 日(木)	日本語・日本文化講義、文化講座、文化体験、学外研修、学生交流
2 月 20 日(金)	討議(協働学習)、修了式
2 月 21 日(土)	関西空港から出発(タイ／ベトナム)

募集人数 10 名程度 ※定員に達し次第、締め切ります。

募集対象 京都大学に在籍する正規学生(国籍不問)

募集条件

1. 異文化体験・学習に高い意識を持つ者
2. 国際交流に対して積極性のある者、責任感のある者
3. 日本語非母語話者については、講義内容を理解するのに十分な日本語能力を有する者

応募方法 応募用紙(所定)に必要事項を記入し、下記の書類提出先まで持参してください。

書類提出先：(吉田南構内)吉田国際交流会館地下 1 階 国際企画連携部門 事務室内

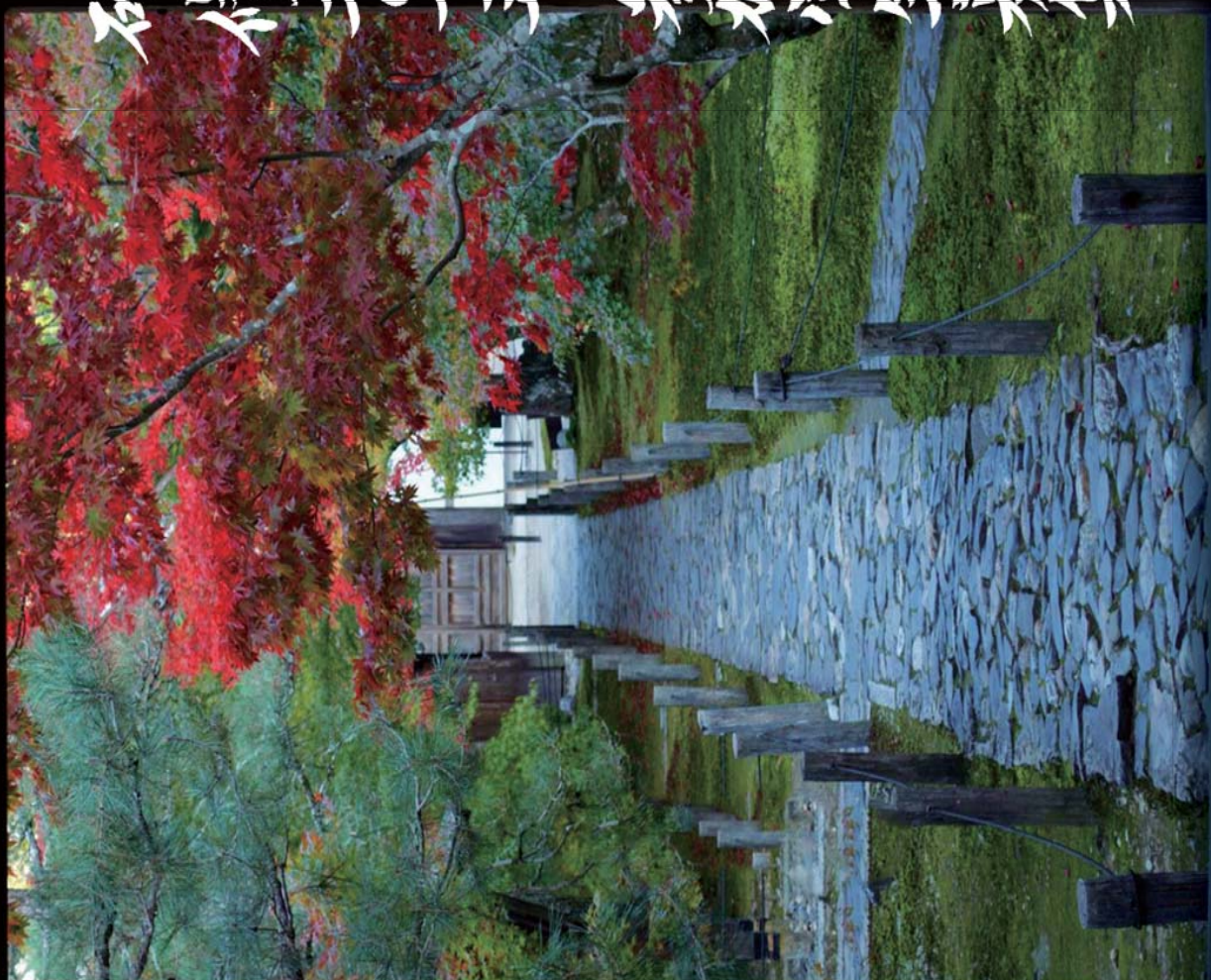
備考 研修に係る経費の一部について補助を行います。詳細は、下記の問合せ先に照会してください。

問合せ先

京都大学国際交流センター	森 眞理子／佐々木 幸喜
京都大学国際学生交流課	ドニークラーク 有美
TEL：075-753-5678	／ E-mail：sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp (佐々木幸喜)

「京都大学から心へ日本」

研修二〇一五 参加学生募集



「研修期間」
2015.2.8 (SUN)
2.21 (SAT)

平成 24 年度採択 文部科学省
大学の世界展開力強化事業
「開かれた ASEAN+6」による日本再発見
—SEND を核とした国際連携人材育成—

2015 年 2 月、京都大学国際交流推進機構国際交流センターでは、アジア研究教育ユニット (KUASU) との共催で「京都で学ぶアジアと日本」研修 2015 を実施します。
このプログラムは、SEND 双方向型教育プログラムとして企画された 2 週間の短期プログラムで、以下に記載する大学の学生を対象としています。

● 募集人数 (対象大学)
・5 名 (チュラーロンコーン大学)
・10 名 (ハノイ国家大学)
・10 名 (京都大学)

● 研修内容 [予定]
1. 日本語・日本文化講義の受講
2. 文化講座、文化体験
3. 学生交流、討議
4. 学外研修

なお、参加学生に対して、学外研修費などの補助が一部予定されています。詳細は、下記に問い合わせてください。

● 問い合わせ先
京都大学国際交流センター
森眞理子 / 佐々木幸喜
京都大学国際学生交流課
ドニーワーク 有美
TEL : 075-753-5678
E-mail : asean-send.6
@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

研修日程

2月8日(日) 短期交流学生入国、参加学生顔合わせ			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
6:40	到着(ベトナム:VN330)		関西国際空港
7:50	到着(タイ:JL728)		
	ホテルチェックイン		ホテル・京都・ベース 四条烏丸
12:00-	顔合わせ、自由行動		

2月9日(月) 開講式、オリエンテーション、歓迎会、キャンパス案内			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
10:30-11:00	開講式	[国際交流センター] 家本 太郎 准教授、河合 淳子 准教授、 湯川 志貴子 准教授、佐々木 幸喜 助教、 浦木 貴和 講師、下橋 美和 講師、白方 佳果 講師 [国際学生交流課] 植村 正樹 課長、横田 俊之 交流支援掛長、 上村 健 交流支援掛主任、ドニークラーク 有美 掛員	京都大学国際交流多目的ホール
11:00-11:50	オリエンテーション、クラス分けテスト	[国際交流センター] 佐々木 幸喜 助教	京都大学国際交流多目的ホール
12:00-13:00	歓迎会	[国際交流センター] 家本 太郎 准教授、河合 淳子 准教授、 佐々木 幸喜 助教、浦木 貴和 講師、 下橋 美和 講師、白方 佳果 講師 [国際学生交流課] 植村 正樹 課長、横田 俊之 交流支援掛長、 上村 健 交流支援掛主任、ドニークラーク 有美 掛員	京都大学国際交流セミナーハウス
13:00-14:30	キャンパス案内		

2月10日(火) 日本語講義、言語交換、発表(SEND)準備			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(1)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(1)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(1)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5
10:30-12:00	日本語Ⅰ(2)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(2)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(2)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5
13:00-14:30	言語交換、発表(SEND)準備		吉田国際交流会館 南講義室5

2月11日(水) 建国記念の日 学外研修			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
8:15-8:45	移動	[国際交流センター] 佐々木 幸喜 助教	集合:大学正門前

9:00-12:00	学外研修・文化体験(友禅染体験)		丸益西村屋
13:30-14:45	学外研修・文化体験(和菓子作り)		京菓子司 総本家 よし廣

2月12日(木) 日本文化講座			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本文化講座(書道)	北山 聡佳 講師	国際交流センター 北講義室1
10:30-12:00	日本文化講座(書道)	北山 聡佳 講師	国際交流センター 北講義室1

2月13日(金) 日本語講義、言語交換、特別講義			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(3)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	言語交換、発表準備		吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(3)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5
10:30-12:00	日本語Ⅰ(4)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	言語交換、発表準備		吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(4)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5
13:00-14:30	特別講義 「ひらめきときめき オノマトペ」	[国立台湾大学] 呂 佳蓉 助理教授	吉田国際交流会館 南講義室5
14:45-16:15	特別講義 「京都で学ぶ一人形浄瑠璃との出会い」	[慶北大学校] 朴 麗玉 専任研究員	吉田国際交流会館 南講義室5

2月14日(土) 学外研修			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
9:30-9:50	移動	[国際交流センター] 佐々木 幸喜 助教	集合:大学正門前
10:00-11:30	学外研修(環境・文化)		琵琶湖疏水記念館
11:30-13:00	移動		琵琶湖疏水記念館 → 琵琶湖
14:30-17:00	学外研修(文化)		琵琶湖 → 岡崎周辺

2月15日(日)			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
終日	自由行動		

2月16日(月) 日本語講義、文化講義			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(5)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(3)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	言語交換、発表準備		吉田国際交流会館 南講義室5
10:30-12:00	日本語Ⅰ(6)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(4)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	言語交換、発表準備		吉田国際交流会館 南講義室5

13:00-14:30	文化講義(使用言語:英語) 「日本古典文学にみる日本人の美意識」	[国際交流センター] 湯川 志貴子 准教授	吉田国際交流会館 南講義室5
14:45-16:15	文化講義(使用言語:日本語) 「簡単!古文書入門」	松田 直子 講師	吉田国際交流会館 南講義室5

2月17日(火) 日本語講義、学外研修			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(7)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(5)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(5)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5
10:30-12:00	日本語Ⅰ(8)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(6)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(6)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5
12:30-12:45	移動		集合:大学正門前
14:00-15:30	学外研修	[京都府立総合資料館] 楠 久美 様 [国際交流センター] 佐々木 幸喜 助教	京都府立総合資料館

2月18日(水) 日本語講義、文化講義			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(9)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(7)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(7)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5
10:30-12:00	日本語Ⅰ(10)	下橋 美和 講師	吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(8)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(8)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5
13:00-14:30	文化講義(使用言語:日本語) 「学校教育にみる日本文化の諸相」	[国際交流センター] 河合 淳子 准教授	吉田国際交流会館 南講義室6

2月19日(木) 日本語講義、発表準備			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
8:45-10:15	言語交換、発表準備		吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(9)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(9)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5
10:30-12:00	言語交換、発表準備		吉田国際交流会館 南講義室3
	日本語Ⅱ(10)	浦木 貴和 講師	吉田国際交流会館 南講義室4
	日本語Ⅲ(10)	白方 佳果 講師	吉田国際交流会館 南講義室5

2月20日(金) 発表、修了式、歓送会			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
8:45-12:00	発表準備、言語交換		

13:00-15:30	発表、講評	[国際交流センター] 森 真理子 教授、家本 太郎 准教授 河合 淳子 准教授、湯川 志貴子 准教授、 佐々木 幸喜 助教、浦木 貴和 講師、 下橋 美和 講師、白方 佳果 講師	国際交流セミナーハウス
15:45-16:15	修了式	[国際交流センター] 森 真理子 教授、家本 太郎 准教授、 河合 淳子 准教授、佐々木 幸喜 助教、 浦木 貴和 講師、下橋 美和 講師、白方 佳果 講師 [国際学生交流課] 植村 正樹 課長、横田 俊之 交流支援掛長、 上村 健 交流支援掛主任、ドニークラーク 有美 掛員	国際交流セミナーハウス
16:30-18:00	歓送会	[国際交流センター] 森 真理子 教授、家本 太郎 准教授、 河合 淳子 准教授、湯川 志貴子 准教授、 佐々木 幸喜 助教、浦木 貴和 講師、 下橋 美和 講師、白方 佳果 講師 [国際学生交流課] 植村 正樹 課長、横田 俊之 交流支援掛長、 上村 健 交流支援掛主任、ドニークラーク 有美 掛員	カンフォーラ

2月21日(土) 短期交流学生帰国			
時間	カリキュラム／イベント	教職員	場所
a.m.	ホテルチェックアウト		ホテル・京都・ベース 四条烏丸
10:30-	出発(ベトナム:VN331)		関西国際空港
17:20-	出発(タイ:JL727)		

参加者名簿

	Name	大学	学部・研究科	学年
《全日程参加》2月8日(日)～2月21日(土)				
1	Chantra Wangcharoewong	チュラーロンコーン大学	文学部	B2
2	Parida Jirawuttinunt		文学部	B2
3	Patarasorn Koopipat		文学部	B2
4	Pornkamol Chuensanguan		文学部	B2
5	Prim Soongswang		文学部	B2
6	Nguyen Manh Linh	ハノイ国家大学 人文社会科学大学	東洋学部	B4
7	To Thi Ngoc Anh		東洋学部	B4
8	Nguyen Thi Oanh		東洋学部	B3
9	Trinh Thi Hang		東洋学部	B3
10	Nguyen Viet Tiep		東洋学部	B2
11	Nguyen Thi Le Hang	ハノイ国家大学 外国語大学	大学院研究科	M2
12	Le Minh Hieu		大学院研究科	M2
13	Tran Kieu Hung		大学院研究科	M2
14	Vu Thi tam Dan		大学院研究科	M1
15	Nguyen Thuy Duong		東洋言語文化学部	B4
16	新城 拓海(Takumi SHINJO)	京都大学	法学部	B3
17	守本 萌(Megumi MORIMOTO)		法学部	B1
18	井形 岳史(Takefumi IGATA)		経済学部	B3
19	扶瀬 聡史(Satoshi FUSE)		工学部	B3
20	◎米田 実紀(Minori YONEDA)		農学部	B3
21	畠山 稔弘(Toshihiro HATAKEYAMA)		大学院医学研究科	D1

《前半のみ参加》 2 月 8 日(日)～2 月 15 日(日)				
22	○中島 明日華(Asuka NAKASHIMA)	京都大学	文学部	B4
23	奥谷 紘子(Hiroko OKUTANI)		法学部	B1
24	伊藤 勇太(Yuta ITO)		経済学部	B2
25	石井 裕樹(Hiroki ISHII)		工学部	B3
26	北尾 亮太(Ryota KITAO)		工学部	B3
《後半のみ参加》 2 月 15 日(日)～2 月 21 日(土)				
27	○吉鶴 諒子(Ryoko YOSHITSURU)	京都大学	法学部	B2
28	栽松 豪(Go UEMATSU)		経済学部	B5



● Indonesia

SENDプログラム

2015 年インドネシア大学スプリングスクールプログラムのご案内

締切：2014 年 12 月 12 日(金) 12 時 00 分

【日程】

- ・2015年 2月22日(日) デポック市到着
- 2月23日(月)～3月6日(金)：於 インドネシア大学
インドネシア語・文化講座、文化体験、学生交流、実地研修、発表討論
- 3月7日(土) 自由行動
- 3月8日(日) 帰国

【詳細】

- ・募集人数：15名程度
- ・募集対象：京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、
農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、経営管理大学院に所属する者を優先する)
- ・募集条件：異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・費用内訳

\$ 1=109.00円 / Rp 1=0.0101円 (2014年11月現在)
--

 - 学費：調整中 [2013年度 \$ 788]
 - 航空券代：約93,000円
 - 宿泊費：約31,000円～約34,000円 (一泊あたり約2,400円～約2,600円) [学内のゲストハウス]
 - 諸費用 (インドネシア国内移動費・その他)：約30,000円～50,000円
 - ※この中には、入国時の「滞在査証発給手数料」(\$ 35.00 [約3,800円]、
出国時の「空港税」(Rp 150,000 [約1,350円]) が含まれます。
 - 海外旅行保険料 [全員必須] : 約12,000円 ※AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」に加入すること
(治療・救援費用無制限に設定)
- ・補助金
 - 以下のとおり各種支援・補助を行います。
 - 費用補助 (上限 139,000 円) : 15 名程度
 - その他の支援 (70,000 円) : 7 名 ※JASSO の支給要件を満たす者
日本国籍を有する者、または日本への永住が許可されている者
前年度の成績評価係数が 2.30 以上の者
 - ※参加人数によって、費用補助の額は変動する可能性があります。
 - ※ただし、参加決定後に取り消す場合はキャンセル料が発生します。

【申し込み】 今年度から応募方法が変わりました。

- ・申請手順：1. オンライン申請を行う。(オンライン申請の手順については【別紙】参照)
- 2. 申請内容をプリントアウトしたものに自署し、以下の書類と共に所定の提出先に持参する。
 - ①応募申請書(書式1-2、短期派遣・単位取得免除プログラム)
 - ②語学力証明書(書式3、英語に関する記入のみで可)
 - ③語学試験(英語)を受験済みであればそのスコアコピー(提出自由)
 - ④成績証明書
 - ⑤パスポートの顔写真ページ写し(未取得者はその旨を申し出、早急に取得すること)
 - ⑥収入に関する証明書(JASSO 奨学金申請者のみ。応募申請書「書式1-2」3頁を参照のこと)

※申請書類①と②は、国際交流センター、アジア研究教育ユニット（KUASU）の各ホームページからもダウンロード可能です。

＜国際交流センター＞ <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>

＜アジア研究教育ユニット（KUASU）＞ <http://www.kuas.cpier.kyoto-u.ac.jp/>

・申請書類提出先：研究国際部 国際学生交流課 交流支援掛 SEND プログラム担当 075-753-5679
（吉田南構内 吉田国際交流会館地下1階 国際企画連携部門 事務室内）

・選考：書類審査および面接により行います。
面接は12月中旬に京都大学国際交流センター内で行います。

・最終結果通知：12月下旬 オンライン申請時に登録済みのメールアドレスに通知します。

・本件照会先：国際交流センター 森 真理子 / 佐々木 幸喜
国際学生交流課 ドニークラーク 有美
asean-send.6@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

【スケジュール】

- ・参加者オリエンテーション：2015年1月上旬
- ・ヘルスケア講義：2015年1月中旬

※オリエンテーションおよびヘルスケア講義は出席必須です。日時・場所は追って連絡します。

【備考】

- ・本プログラムは他プログラムとの併願を認めていません。
- ・本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（前期：金曜5限／後期：火曜2限）を受講した上での参加を推奨しています。
- ・本プログラムに参加しても、京都大学の単位になるわけではありません。
- ・参加者全員に治療・救援費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。
- ・自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。

2014年11月28日（金）に募集説明会を行います。

〔場所〕 本部構内 国際交流センター 国際交流多目的ホール 〔時間〕 12:10～12:50

～SENDプログラム～

インドネシア大学 スプリングスクール

【日程】

出発日:2015年2月22日(日)
帰国日:2015年3月8日(日)
(約2週間)

The Simble of University
of Indonesia



【詳細】

- ・募集人数 : 15名程度
 - ・研修内容 : インドネシア語・文化講座、学生交流、実地研修、発表討論
 - ・募集対象 : 京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、経営管理大学院に所属する者を優先する)
- 【\$ 1=109.00円 / Rp 1=0.0101円 (2014年11月現在)】
- ・費用 : 学費 調整中 [参考/2013年度実施分 \$ 788]
航空チケット代 約93,000円
宿泊費 約31,000円～34,000円(一泊あたり約2,400円～約2,600円) [学内のゲストハウス]
海外旅行保険料 [全員必須] : 約12,000円※AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」
諸費用 (インドネシア国内移動費・その他) : 約30,000円～50,000円
 - ・補助金 : 以下のとおり各種支援を行います。
費用補助 (上限139,000円) : 15名程度
その他の支援 (70,000円) : 7名 ※JASSOの支給要件を満たす者
日本国籍を有する者、または日本への永住が許可されている者
前年度の成績評価係数が2.30以上の者
※参加人数によって、費用補助の額は変動する可能性があります。
※ただし、参加決定後に取り消す場合はキャンセル料が発生します。

【申込み方法】

書類 : オンライン申請 <https://area34.smp.ne.jp/area/p/nita0mjell1pepbt9/hbbQ7J/login.html>
オンライン申請内容をプリントアウトしたものに自署し、以下の書類と共に所定の提出先に持参する。
①応募申請書 ②語学力証明書 ③語学試験 (英語) を受験済みであればそのスコアコピー
④成績証明書 ⑤パスポートの顔写真ページ写し
⑥収入に関する証明書 (JASSO奨学金申請者のみ。応募申請書「書式1-2」3頁を参照のこと)
提出先 : 研究国際部 国際学生交流課 交流支援掛 ドニークラーク 075-753-5679
(吉田国際交流会館地下1階 国際企画連携部門 事務室)

【締切日】2014年12月12日 (金) 12時00分

【本件照会先】

国際交流センター 森 真理子 / 佐々木 幸喜 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp

【備考】

- ・本プログラムは他プログラムとの併願を認めていません。
- ・本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(前期:金曜5限/後期:火曜2限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・本プログラムに参加しても、京都大学の単位になるわけではありません。
- ・参加者全員に治療・救済費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。
- ・自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。



研修日程

2015 Indonesia In-Country Training Period: 22nd February – 8th March

As of 20th January

Date	Time	Category	Curriculum / Event	Lecturer / Staff	Place
Sun., 22nd-Feb	12:00		Departure (GA889)		Kansai International Airport
	17:30		Arrival		Jakarta International Soekarno-Hatta Airport
	Afterwards		Check-in		Center for Japanese Studies Building (PSJ)
Mon., 23rd-Feb	9:00-11:00		Breakfast and campus tour	Tutors (student)	Universitas Indonesia Depok Campus
	11:00-11:30		Orientation (program explanation)	BIPA and tutors (student)	BIPA
	11:30-13:00		Lunch break		
	13:00-15:50	Class sit in	(id) Sintaksis (jp) シンタクス	Lea Santiar, M.Ed.	Faculty of Humanities
	16:00-20:00		City sightseeing	Tutors (student)	Depok
Tues., 24th-Feb	9:00-10:40	BIPA	(id) Bahasa Indonesia (jp) インドネシア語講座		BIPA (room 6305)
	11:00-12:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	13:00-15:50	Class sit in	(id) Jepang dalam Pendekatan Teori Sosial Budaya (jp) 社会理論アプローチから見た日本	Bachtar Alam, Ph.D.	Faculty of Humanities
	16:00-18:00	Discussion	Final presentation preparation	Tutors (student)	Faculty of Humanities
Wed., 25th-Feb	9:00-10:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	11:00-12:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	13:00-16:00		Free time		
	16:00-18:00	Discussion	Final presentation preparation	Tutors (student)	Faculty of Humanities
Thurs., 26th-Feb	9:00-10:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	11:00-12:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	13:00-16:00	Class sit in	(id) Sejarah Jepang Kontemporer (jp) 現代日本史	Prof. Dr. I Ketut Surajaya	Faculty of Humanities
	16:00-18:00	Discussion	Final presentation preparation	Tutors (student)	Faculty of Humanities
Fri., 27th-Feb	9:00-10:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	11:00-12:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	14:00-16:50	BIPA	Arumba		
	Afterwards				
Sat., 28th-Feb	09:00-18:00	Tour	Taman Mini Indonesia Indah	BIPA and tutors (student)	Jakarta
Sun., 1st-Mar	09:00-18:00	Tour	Kota Tua, Jakarta	BIPA and tutors (student)	Jakarta
Mon., 2nd-Mar	9:00-10:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	11:00-12:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	13:00-15:50	Class sit in	Sintaksis	Lea Santiar, M.Ed.	Faculty of Humanities
	16:00-18:00	Discussion	Final presentation preparation		Faculty of Humanities
Tues., 3rd-Mar	9:00-10:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	11:00-12:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	13:00-15:50	Class sit in	Jepang dalam Pendekatan Teori Sosial Budaya	Bachtar Alam, Ph.D.	Faculty of Humanities
	16:00-18:00	Discussion	Final presentation preparation		Faculty of Humanities
Wed., 4th-Mar	9:00-10:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	11:00-12:40	BIPA	Bahasa Indonesia		BIPA (room 6305)
	14:00-15:40	BIPA	Arumba		
	16:00-18:00	Discussion	Final presentation preparation		Faculty of Humanities
Thurs., 5th-Mar	9:00-10:40				
	11:00-12:40				
	13:00-16:00	Class sit in	Sejarah Jepang Kontemporer	Prof. Dr. I Ketut Surajaya	Faculty of Humanities
	16:00-18:00	Discussion	Final presentation preparation		Faculty of Humanities
Fri., 6th-Mar	9:00-12:00		Final Presentation		Faculty of Humanities
	12:00-14:00		Lunch break		
	14:00-18:00				
Sat., 7th-Mar			Check-out		Center for Japanese Studies Building (PSJ)
	23:25		Departure (GA888)		Jakarta International Soekarno-Hatta Airport
Sun., 8th-Mar	8:15		Arrival		Kansai International Airport

参加者名簿

	氏 名 (Name)	所 属	学 年
班 長	浪花 晋平 (Shimpei NANIWA)	総合人間学部	B2
	舟橋 知生 (Tomomi FUNAHASHI)	総合人間学部	B1
	肥爪 聡子 (Satoko HIZUME)	教育学部	B5
副班長	斉藤 侑奎 (Yuki SAITO)	法学部	B3
	平山 明秀 (Akihide HIRAYAMA)	経済学部	B4
	牟禮 あゆみ (Ayumi MURE)	理学部	B1
副班長	鶴田 惇 (Jun TSURUTA)	大学院農学研究科	M1
	坂井 あんず (Anzu SAKAI)	大学院農学研究科	M1
	勝村 良裕 (Yoshihiro KATSUMURA)	大学院経営管理教育部	M1

Tutoring Bahasa Indonesia (February 16th –February 20th, 2014)

Asif Aunillah

Graduate School of Energy Science, M1

This report is about class diary on the course of tutoring Bahasa for a group of Kyoto University Student who planned to go for short course in University of Indonesia, Depok. This event was held by the International Center and International Student Mobility Division. The course was held in 5 days and aimed to Introduce about Bahasa, pronunciation number and alphabet, and basic conversation and phrase in Bahasa. Each day, it consists of several parts :

- Review material from yesterday, except in the first day
- Essence material
- Example, normal conversation that related with the material

Day 1:

Before start, I introduce myself and tell student to introduce about them.

In the first, I play a short video about Indonesia to make them interest and than explain more by using power point about country, nature, people, habit, and culture.

After that, we study about pronunciation about alphabet in Bahasa. The number of letter in Bahasa is same with English, but the pronunciation is same with Japanese especially in vocal letter. For example, “a” in Bahasa is same with “a” in Japanese etc. special for letter “e”, it has several pronunciations. For example “e” in “*lelah*” and “*capek*” is different pronunciation but Indonesian people will understand although they use same spelling

For consonant, there are several letter is difficult for them such as “l” and “q” because in Japanese didn’t have that letter. “q” letter is not a problem, because very rare use in Bahasa, usually used in absorption in arabic word for example “*qur’an*”. In Bahasa sometime consonant become last word for example “*pelajar*”, “*daging*”, and “*minum*”, it is rare found in japanese. Only letter “n”, didn’t have vocal letter after it.

Presentation slide already prepared before, so it is faster to explain to them. If there any example that didn’t include in power point, I write and show to them. I spoke the letter and example one by one, and than they repeat after me.

Day 2:

In this day, we studied about self-introduction phrases. Start from greeting, name, and origin. For greeting, we use “*selamat*” and the combination. For example : “*selamat pagi*” (good morning),

“*selamat sore*” (good afternoon), “*selamat makan*” (Let's eat) and another greeting. Also additional word to address people, such as “*Bapak*” for Mr. or “*Ibu*” for Mrs., for example if want to call Mr. Yahman, we call “Bapak Yahman”.

Because they difficult to spell dead consonant and “r, I suggest them to use “mahasiswa” or “mahasiswi” instead of “*pelajar*” (student), but it has same meaning because didn’t have dead consonant and letter “r”. After that they tried to introduce them self and I tried to revise the pronunciation.

Day 3:

We study about number, combination and about Indonesian currency. After that, I gave them some quiz about it. We also study about Calendar, related with day, and how to use that. For example “*besok*” (tomorrow), “*kemarin*” (yesterday),

After that, we studied about question word : “*apa*” (what), “*siapa*” (who), “*dimana*” (where). Example for use that are : “*apa itu?*” (what is that), “*siapa namanya?*” (who is her name), “*Dimana toilet?*” (where is toilet). They also ask about suffix “*nya*” because some question have “*nya*” in last. “*nya*”, it show an ownership of something. They also studied how to make sentence question using that and how to answer.

Day 4:

In forth day, we studied about about food and drink. I tell them to remember important word related with food, such as “*pedas*” (spicy), “*enak*” (delicious), and “*sambal*” (condiment) and etc. “*pedas*” and “*sambal*” is importance word, because Indonesian food is usually spicy. After that, we also try conversation to order food and how to pay. I also tell them about Indonesian food. There are much type of food like “*bakso*”, “*nasi goreng*”, “*rendang*” but much of them is spicy

Day 5:

I last day, we studied about sentence structure. Usually in sentence structure in Japanese normally subject-object-verb with particles marking the grammatical function of words, but in Bahasa is subject-verb-word. For example “*Saya akan pergi ke Indonesia*” (I will go to Indonesia) but in Japanese have different arrange, there is 私はインドネシアに行きます. After that, we review material from the first day to make better understand and make them memorize a little bit more and ask them if they have some question.

Tutoring Indonesian Language (February 16th – February 20th, 2015)

Atrida Hadiani

Department of Civil and Earth Resources Engineering. D2

Through this report, I summarize the Indonesian language class for preparation to students who will have study tour to Universitas Indonesia in Jakarta, Indonesia. The language class was held in five days, due to the very short time, I taught the students basic conversation for daily life. It comprises, conversation in restaurants, conversation for shopping and conversation for travelling.

Day 1

- I prepared some handout for the students, which includes self-introduction, greetings, conversation at class, numbers, name of days and name of months.
- Firstly, I wrote alphabet from A to Z and its pronunciation in Indonesian language with katakana, so that the student can easily understand to pronounce it correctly. I asked them to follow how I pronounce each alphabet and explained if there is a difference with English pronunciation, for example, there are 3 kinds of E and 2 kinds of O in Indonesian language which pronounce differently.
- Then, I introduce myself in Indonesian language and asked the students to follow introducing themselves too.
- Later, the students learned simple greetings such as “selamat pagi/siang/sore/malam”, “permisi”, “maaf” and “terimakasih” and I explain when and how they should use those phrases.

Day 2

- The class begun with reviewing the previous day lesson, such as pronouncing alphabet, introducing self and basic greetings. Moreover, I also explained how to call people, especially for teacher and older people. For example, in Indonesian language, people only call “Pak” (Mr) or “Bu” (Mrs/Miss) to call teacher or older people.
- After that we started to learn conversation at class. The students practiced several phrases that commonly used in class, such as starting class, during class, and closing class. Besides, the students asked several questions about classroom conversation.
- In the second half, the students learned numbers. It was quite difficult because some words have three syllables. They tried to count to ten, then twenty to one hundreds, thousands, and millions. In addition, I explained about clock and price.

Day 3

The topic of this day was “Let’s Eat”, which is about how to find and buy foods.

- Firstly, I explain the time of eat such as breakfast, lunch and dinner in Indonesian language. Then, kinds of eating-places that commonly found in Indonesia, particularly in Jakarta. I introduced the students to Indonesian foods and beverages. They became more enthusiastic to know more about the foods and beverages. Moreover, I also talked about fruits and meats in Indonesia.

- Secondly, they learned the conversation in restaurants, from ordering foods to pay the bill. I gave them example of the conversations and explain the sentence pattern, then ask them to modify according to what they want. In this situation, I played role as waiter and the students as guest. Therefore they can understand how to use the sentence in real situation. Moreover, I explained about taste, in case their friends will ask about taste.
- Lastly, I gave some tips on eating in Indonesia due to hygienic issues, taste and culture.

Day 4

The topic of this day was “Shopping”, which is about how to find and buy goods, especially for daily necessities and souvenirs.

- The lesson begun with what kind of goods they usually buy in convenient store or supermarket for daily need. I introduced some shopping places in Jakarta to give brief image of it.
- Then, the students learned basic conversation for shopping in several situations, from looking for a shopping place, just looking around, in convenient store, looking for stuff with specific size, and pay the bill. For these conversations, I explain the pattern and asked them to try modifying the sentence.
- In the end of session, I introduced Indonesian money and explain the value and currency comparing to Japanese Yen.

Day 5

In the beginning, I reviewed the previous lessons from the beginning and summarize the important words, phrases and pattern.

The topic of the class this day is “Travelling”.

- Firstly, I introduced the students to several traveling activities that they can do in Jakarta. I also recommend them to several good tourism sites to visit within Jakarta City and around Jakarta, such as Bogor and Bandung.
- Then, we talked about basic conversation regarding travelling. The students asked me many questions like “how to ask direction”, “how to get in train or taxi”, etc.
- In the end of class, I gave some tips for travelling for their safety and convenient while travelling.

In this language class, due to the limited duration, I only focus on conversation. Therefore, in the beginning I just taught the basic daily conversation and thematic in the next sessions. However, I didn't giving much attention on grammar. I spoke a lot in Indonesian language to the students even before and after the class, greeting them, asking “how are you” or “see you tomorrow” to make them get used to listen and respond. They often confused and forget the right respond, and I told them the correct one. The students were very attentive to each lesson, they tried their best to follow the correct pronunciation in every words. The thematic lessons attempt to give the image of real situation, so that they can understand easier.

Report on Indonesian Language Tutoring (16-20 February 2015)

By Purnomo Husnul Khotimah

This report contains the activities of Indonesian Language Tutoring held by ISMD. This activity is in preparation for Kyoto University students who will stay in Indonesia for some time.

I am designing the learning materials by using location setting. The intent of this is to use specific location as the background situation in implementing the Indonesian language. I choose this method after reflecting on Japanese language classes that I follow in the semester 1. I think this method is quite effective in introducing the basic grammar and useful at the same time in daily life.

In the presentation of everyday material, it consists of several parts:

- core material, containing learning focus
- exercise, contains material which must be done by the participants
- conversation, containing background conversations location appropriate to the theme of the day.
- review, contains material points the previous day.

And here is description of the learning material.

1. Day 1 - In the classroom

On the first day, the core material is introductory and learn to pronounce Indonesian letters and words. The difficulty of the participant is on pronunciation consonant at the end of the word, letter n, l and r.

For example the word `perkenalkan`, the participant felt a bit hard to pronounce. Even so the participant attempted to pronounce properly. I gave an input if it feels hard, he can use more informal words, such as "hello" or "hi".

Vocabulary is introduced at the first meeting, namely as:

- vocabulary introduction,
- eg personal data (nama, asal, mahasiswa/i),
- greetings (encounter and farewell)
- greeting words (Bapak, Ibu)

The participant had complained about the number of words to be memorized, but I encourage them to simply choose one word that polite enough to be used for all person. For example, it is enough to memorize the words "I" and "you / your" when dealing directly with the speaker.

At the end of class, I offered to participants if there are words you want to be known in Indonesian can be asked to me.

2. Day 2 - In the shop

After I repeat the first day material, we learn about the number, question words (apa, bagaimana, berapa), verb (makan) and reference words (ini and itu).

Because the setting is restaurant, briefly I introduce Indonesian food and drinks and various flavors. In addition I also introduce the Indonesian currency (notes and coins).

Then ask participants how to express the word "delicious", "hungry", and "thirsty" in Indonesian. I am very happy to get this question because it demonstrates that the participant has interest and passion for learning Indonesian language.

The participants are somewhat difficult to pronounce the word "haus" which means "thirsty" in English. I taught her that the word "hungry" is pronounced similar with the word "house". After that participants can pronounce properly.

3. Day 3 -In public transport

With the background of the public transportation, I introduced the question words (siapa, mana), direction, particle for place reference (di, ke) and the verb "pergi".

I also introduce the types of transportation in Jakarta and Depok map (Margonda region) The participant quite interested in the overview map of Depok. However, the participant felt a bit hard to memorize the numbers one to ten. I suggest to simply memorize one to five. Because most likely in the daily activities in the said floor or ordering food will not be more than five figures. Participants' responses were quite happy and be more in the spirit of memorizing numbers.

4. Day 4 - At the mall

Basically on the fourth day, I just want to repeat the previous day by implementing the material that has been studied with the mall setting. For example using question words "Berapa" to ask "Lantai berapa?".

I review the question words, in the following way :

- apa to ask something
- berapa to ask related to numbers
- dimana to inquire location
- bagaimana to ask how or taste of food
- siapa to ask that relate to a person or a person's name

In addition I also explained the suffix "nya" that show ownership of something.

5. Day 5 - Notes

At day 5, I summarize what we have learned so far. And at the same time I introduce sentence structure that we have used. Some sentence structures that I introduced are:

- active sentence
- passive sentence
- yes or no question

On day 5 I actually plan to do the evaluation of how the participant improve, but I can not do. The problem is the participant's attendant. Basically each participant is eager to learn Indonesian language and able to follow the lesson very well. However, one participant only came on the first day and the fifth day, while the other participant only came on the second day until the third. So this situation made me unable to do evaluation.

インドネシア研修・オーストラリア研修 合同発表会

日時: 2015年2月19日(木)9:00~12:00
 場所: 吉田国際交流会館 南講義室6
 担当: 国際交流センター 森 真理子
 KUASU/国交セ 佐々木幸喜

《オーストラリア研修メンバー》

	Name	Title
1	Kazuki Koike, Shota Inoue, Sayaka Ogawa, Nanami Oshima	Trip Japan
2	Kotowa Orihira, Sungwoong Park, Fumie Okazaki, Asami Oshimura	Japanese traditional culture -Sado-
3	Bowen Zhuang, Yuka Kiyoshima, Mariko Watanabe, Akihiro Yamada	Omotenashi (Hospitality in Japan)
4	Hirofumi Matsui, Nana Haruki, Tatsuhiko Inada, Dongyan Zheng	Japanese Food
5	Atsuko Fujii, Eriko Sakane, Tasuku Nakanishi, Takanobu Noda	Onsen in Japan

《インドネシア研修メンバー》

	氏名 (Name)	発表タイトル
1	舟橋 知生 (Tomomi Funahashi) 坂井 あんず (Anzu Sakai)	【建物】「日本の住居の歴史と京町屋」
2	鶴田 惇 (Jun Tsuruta) 牟禮 あゆみ (Ayumi Mure)	【環境】「原発」(仮)
3	浪花 晋平 (Shimpei Naniwa)	【日本語】「素晴らしくうっとうしい日本語」
4	肥爪 聡子 (Satoko Hizume) 勝村 良裕 (Yoshihiro Katsumura)	【ビジネス】「労働問題から探る日本の(変な!?)ビジネス文化」
7	斉藤 侑奎 (Yuki Saito) 平山 明秀 (Akihide Hirayama)	【宗教】「日本と宗教」

(作成: 佐々木幸喜)

Sekilas Pelaksanaan *Spring School* 2015 (Universitas Indonesia)

Mulai tahun 2014 Universitas Indonesia mendapat kehormatan dengan menjadi salah satu destinasi *Spring School* yang diadakan oleh Universitas Kyoto. Namun demikian, program tahun 2015 (22 Februari – 7 Maret 2015) meninggalkan kesan yang sangat mendalam dari sisi persahabatan yang terjalin di antara mahasiswa Universitas Kyoto dan Universitas Indonesia, terutama Program Studi Jepang. Sejak awal *Spring School* tahun 2015 di Universitas Indonesia memang didesain agar mahasiswa kedua belah pihak memiliki banyak waktu untuk belajar bersama dan saling berinteraksi. Landasan pemikiran inilah yang kemudian diimplementasikan ke dalam berbagai kegiatan dalam *Spring School* 2015.

Secara garis besar kegiatan *Spring School* 2015 terbagi menjadi dua bagian, yaitu pelajaran bahasa Indonesia dan kegiatan belajar bersama dengan mahasiswa UI. Di samping itu terdapat pula pengenalan budaya Indonesia melalui kelas alat musik arumba serta tur ke Taman Mini Indonesia Indah dan Kota Tua Jakarta. Kecuali pelajaran bahasa Indonesia dan arumba, seluruh kegiatan mengikutsertakan mahasiswa UI. Kegiatan belajar bersama yang dilakukan terdiri atas *sit in* pada tiga mata kuliah Program Studi Jepang (Sintaksis Jepang, Jepang dalam Pendekatan Teori Sosial-Budaya, dan Sejarah Jepang Kontemporer) dan penelitian kecil mengenai perbandingan Indonesia-Jepang. Dalam penelitian kecil tersebut mahasiswa dibagi menjadi kelompok-kelompok kecil yang terdiri atas dua orang mahasiswa Universitas Kyoto dan dua orang mahasiswa UI. Hasil dari penelitian tersebut dipresentasikan pada tanggal 6 Maret 2015 dan dihadiri oleh para dosen dan mahasiswa. Sebelumnya sebagai persiapan presentasi hampir setiap hari masing-masing kelompok melakukan diskusi.

Tidak hanya di dalam kelas, interaksi yang intensif juga dirasakan di luar kelas. Masing-masing mahasiswa Universitas Kyoto dipasangkan dengan satu orang mahasiswa UI yang berperan sebagai pendamping (*buddy*). Mahasiswa pendamping bertugas untuk memperkenalkan kehidupan di sekitar kampus Universitas Indonesia maupun di luar kampus. Melalui panduan dari mahasiswa pendamping inilah mahasiswa Universitas Kyoto mengetahui dan mencoba berbagai makanan, alat transportasi, dan berbagai macam tren di Indonesia. Tentu saja interaksi di luar kelas tidak hanya terbatas pada mahasiswa pendamping. Secara aktif mahasiswa kedua universitas saling memperkenalkan diri dan kemudian menjalin persahabatan. Pada tanggal 6 Maret 2015, sebagai penutup seluruh rangkaian kegiatan diadakan pesta perpisahan yang dihadiri sangat banyak mahasiswa.

Interaksi di dalam dan di luar kampus inilah yang mengeratkan persahabatan di antara mahasiswa kedua universitas. Melalui banyaknya kegiatan bersama yang dilakukan, mahasiswa memiliki sangat banyak kesempatan dan cara untuk saling mengenal dan belajar langsung mengenai budaya serta masyarakat dari negara lain yang selama ini mungkin informasinya terbatas pada literatur. Tentu saja diharapkan bahwa keseluruhan program ini akan berkontribusi dalam melahirkan sumber daya manusia yang siap dan tidak canggung ketika harus berhadapan dengan perbedaan budaya.

Saya berharap program serupa dapat terus dilanjutkan pada tahun-tahun yang akan datang mengingat kontribusinya dalam melanggengkan persahabatan antara mahasiswa Indonesia dengan mahasiswa Jepang. Besar pula harapan saya agar para partisipan program yang lalu dapat berkontribusi dalam lingkungan dan bidang masing-masing kelak dengan memanfaatkan pengetahuan serta pertemanan yang telah dibangun.

2014 年度スプリングスクールの所感

Himawan Pratama

インドネシア大学人文科学部講師

2014 年よりインドネシア大学は京都大学短期スプリングスクールの受け入れ大学として名誉をいただいておりますが、本学にとって 2 回目となった 2014 年度のプログラムは、特に学生交流という面において、大変印象深かったです。本年度のプログラムでは、両大学の学生を交流させるというのが一番大きな目的となりました。したがって、ほとんどの活動はできる限り両大学の学生が交流しあう場として設定しました。



本年度の活動は大別すると二つに分けられます。一つはインドネシア語講座です。ここで京都大学生は日常的な会話でよく使われるインドネシア語を学びました。もう一つはインドネシア大学生（UI生）との共学です。この活動は本年度で初めてとなりましたが、学生交流の機会として重大な役を果たしました。共学の内容は以下の通り分けられます。

1. 本学日本学科の授業参加
2. 日本・インドネシアの比較小研究

授業参加では京都大学生が三つの授業（日本語のシンタックス、文化・社会学のアプローチから見る日本、現代日本史）をUI生と共に受けました。この目的は日本がインドネシアにどのように受け止められているかを理解させることでした。共学のもう一つは日本・インドネシアの比較小研究でした。ここで両大学の学生は 4 人グループ（京都大学生 2 人、UI生 2 人）に分かれて、学生が決めたテーマについて研究しました。最後に研究の結果を発表しました。その発表の為に学生が毎日ほどディスカッションをしていました。以上の活動に加え、アルンバ（Arumba）というインドネシアの伝統的な楽器のクラスや、ジャカルタ市内ツアーというインドネシア文化の紹介という活動もありました。

クラス内だけではなく、クラス外でも学生の交流機会が多かったというのが、本年度のプログラムの特徴です。初日から、一人の京都大学生には一人のUI生を生活のサポート役として付けました。このシステムは「バディ」といいました。バディのサポートで京都大学生がインドネシアの色々な食べ物、学生が使っている乗り物、などが体験できました。もちろん、学生交流はバディには限りませんでした。学生たちは積極的に知り合って、友だちになりました。プログラムの終了日（3 月 6 日）に京都大学生の為に送別会も行われました。

本年度においてのたくさんの交流機会は両大学の学生にとって大変貴重な経験です。共に勉強した、そして共に遊んだという色々な活動で直接違う文化を持っている同じ世代の人と触れ合うことができました。これは言うまでもなく、将来大事な経験になるでしょう。

このようなたくさんのメリットを考えて、今後とも両大学の学生の交流する場を作らせていただければ幸いです。本年度の参加した学生にはスプリングスクールで得た知識や経験を活かして、社会に貢献してほしいと願っております。

僕の海外への憧れは以前から強く、色々な国へ行きたいと思っていました。自分の知らない世界を見て、自分の世界観を広げたいということも考えていました。漠然と留学したいとは思っていたものの、準備などの大変さからなかなか行動に移していませんでした。そんな僕にとってこのプログラムは、海外に2週間という短期間、援助を受けていけるということで理想的なものでした。以前オーストラリアに短期留学したことがありますが、それは旅行のようなものだったので、実際に海外で生活するとはどのようなものなのかを知ることができればという期待も込めてこのプログラムに参加しました。

プログラムを終えて思ったのは、住む環境は違えど、やはり皆同じ人間なのだな、ということです。インドネシアはとても暑く、街の様子も日本と全く違ってすごくわくわくしました。同時に、こんなに住む環境が違う人々と簡単に分かり合えるのだろうかと不安にも思いました。しかし3日もすると、これまでの友人たちと変わらず、すぐにうちとけることができました。日常の他愛ないふれあいを通して親しんだことで、仲良くなるのに場所も時間も関係ないのだということが分かりました。

またUIでは熱心に、しかも楽しそうに勉強する学生さんたちの姿に驚かされ、これは負けてられないなと、京大での勉強のモチベーションを得ました。プレゼンの準備では、複数人で発表の準備をすることの難しさを身をもって体験したし、グループ内で時折始まる英語で会話についていくのに必死になりました。インドネシア語をはじめ、英語も日本語も話せるUIの学生の方々に囲まれ、英語すら不如意である自分は、劣等感を覚えてしまいました。単に仲良く過ごすだけでなく闘争心も刺激される期間と

なったのです。帰国後も語学習得に励みたいと考えています。

留学についてですが、留学を考えているという一人のUIの学生さんの話を聞きました。また、今回プログラムに参加した他の京大生のみなさんは、ほとんどが自分より海外経験豊富な方で、その人たちからも色々な話を聞きました。2ヶ月間海外の学生とともに船に乗って、旅をしながら世界の様々な問題についてディスカッションをしたりなど、聞いているだけでワクワクするような体験を多くの人がしていて、自分も頑張らねばと思いました。僕は環境問題に興味があるので、留学先は、国民の環境意識が高いと言われているドイツを考えています。

プログラムの内容は、平日午前はインドネシア語講座、午後はUIの授業とプレゼン準備、休日はツアーと、概ね満足のいくものでした。ただ、ツアーの予定は自分たちで立てていきなかったと思いました。

今回のプログラムによって、僕のこれからの進路が大きく変わることはありませんでしたが、得たものは多かったです。僕は班長でしたが、他の京大生、UIの学生さん、先生方をはじめ様々な人からサポートしていただきました。本当に感謝しています。2週間という短い期間でしたが、得たものは大きく、行く前に立てた目標は概ね達成できたと思います。未知の世界に触れ、変わらない人の温かさに触れた、印象深いプログラムでした。

今回わたしは、気候も宗教も大きく異なるインドネシアという国への興味と、この夏に参加させていただいたSENDプログラム(ベトナム研修)において、外国人との交流に積極的になりきれなかったという反省からリベンジの意味も込めて、インドネシア大学スプリングスクールプログラムに参加させていただきました。いわゆる「社交辞令」的な挨拶や会話にとどまるのではなく、大学生として深い話をしたり、日常的なたわいもない話をしたりすることを目指して、出発前からインドネシア語の勉強をしたり、インドネシア大学の学生と連絡を取り合ったりといった事前準備にも取り組みました。その甲斐あってか、研修中は積極的に学生と交流することができました。互いの母語に対する理解や共通の話題の有無がいかに関係コミュニケーションを左右するか、ということを実感し、それらの大切さを再認識しました。研修中はほぼ毎日インドネシア語の語学講座を受講し、日に日に使えるインドネシア語が増えてゆくのはとても快感でした。休日には”Taman mini”というテーマパークに行き、島それぞれの独自の文化を学んだり、ジャカルタの“Kota”という地区の博物館巡りをするなどして、伝統的な文化や歴史について学びました。出発前に懸念していた宗教のことについては、予想以上に日常生活に宗教が関わっていて驚きましたが、自分の意思をはっきり持ったり、明確な生活の規範をもったりするという意味において、宗教はとても役立っているように感じました。宗教という問題が身近に存在しているからこそ、それへの理解も進んでおり、日本人がいかに関知、無頓着かということを感じ知らされました。現地

に行って現地の声を聞くことは誤解を解き、正しい理解を得るのに最も効果的な方法だと実感したと同時に、その際相手の生活文化のどこまでは立ち入り、どこからは立ち入らないでおくべきか、ということを探るのはとても難しいことだと思いました。幸いにも今回交流した学生は、「日本人は何がわからなくて何が知りたいのか、ということをも自分も知りたい」と言ってくれ、生活、文化、宗教等のさまざまな考え方について実りのある話ができて、これはとても大きな収穫となりました。また、研修期間中、インドネシア大学の学生と京都大学の学生とでチームを組んでプレゼンテーションの作成を行いました。建築・文化財保護、ビジネス、宗教、言葉、ゴミ問題の5つのグループに分かれ、なんどもディスカッションを重ねて細かな意見交換をし、発表に向けて相互の理解をはかりました。発表が日本語ということで京都大学の学生主導となりがちで、インドネシア大学の学生の発表が簡単な内容に終始してしまったのは反省すべき点であると思います。簡単な表現を使うにしろ、内容まで簡単になってしまったのは、とても残念でした。京都大学の学生側がもっとうまく内容を引き出せなかったのか、どうすれば難しい内容を簡単な言葉で伝えることができたのか、ということをよく考えなければなりません。この反省を、今後の外国語学習や国際交流のポイントとして活かしていきたいと思います。2週間のインドネシアでの生活を経て、宗教や歴史に対する興味が深まり、さらに視野が広がったように感じます。この経験を武器に、今後も活動的に国際交流に参加してゆきたいと考えています。

私は以下二つの目標を持って本プログラムに参加しました。そこで本報告書では、これら二つの目標に関して、成果及び成果をもたらしたプログラム内容について述べます。

【目標】

- ・多文化共生社会について学ぶこと
- ・日常会話程度のインドネシア語を習得すること

【多文化共生社会について学ぶこと】

本プログラムにおいて、個人、社会双方の観点から多文化共生社会について考えることができ、その理解が深まりました。

個人の観点については、インドネシア大学の学生との交流の中で、「多文化共生社会、インドネシア」に対する考えを聞くことができました。彼らの立場は、多文化の中で多数派に属する者、少数派に属する者などそれぞれに異なっていました。多様な彼らとの交流の中で、私個人として、ある考えの傾向に気付かされました。それは、多数派は現在のインドネシアの多文化共生社会に満足している一方、少数派は満足していないという傾向です。例えば、インドネシア大学内にはモスクはありますが、教会や寺院は存在しません。そういった現状について、少数派に属する学生の多くは疑問を抱いていました。

社会の観点については、インドネシア社会に関する講義の中で学ぶことができました。講義内では、多数派の少数派に対する誹謗中傷、またそれに対する反対運動などが取り上げられ、社会全体として多文化共生社会特有の多くの問題を有していることが分かりました。

このような学びは、私の今までのインドネシアに対する考えを大きく変えました。プログラム参加以前、私はインドネシアに対して、多文化共生社会がうまく機能している国という印象を抱いていました。しかしながら実際には、多文化共生社会特有の多くの課題を抱えていると気付かされました。

【日常会話程度のインドネシア語を習得すること】

本プログラムの期間のみで、日常生活に全く支障の出ない程度にインドネシア語を習得することはできませんでした。しかしながら、プログラム参加以前インドネシア語を学んだことがなかったことを考えてみれば、その語学力を多いに向上させることができたと思います。それを支えたのは、本プログラムの持つ二つの特徴です。

一つ目に、「学んだことをすぐに使える環境」です。プログラム期間中、私達は午前語学の授業を受け、午後にインドネシア大学日本語学科の学生との交流を行いました。その結果、午前に学んだことを、すぐに午後に使える環境が整いました。その環境は「学んだことを使う→通じて嬉しい→語学学習のモチベーションが上がる→また新しいことを学ぶ」という好循環を生み出し、効果的なインドネシア語学習を可能にしました。

二つ目に、「体系立てられた授業」です。一例を挙げれば、私達は数字表現を学んだ次の日に、価格表現を学びました。このように、前の授業で学んだことを次の授業で活かすことができるという体系が整っていたために、スムーズにインドネシア語の学習を行うことができました。単語に関しても、前の授業で学んだ単語を次の授業で使用するという体系があったため、またインドネシア語によるインドネシア語の授業で既習の単語に触れる機会が非常に多かったため、授業の中で自然と単語を復習、習得することができました。

【おわりに】

本プログラムにおいて、多文化共生社会について理解を深め、またインドネシア語の語学力を向上させることができました。今後はこれらの経験を活かし、多文化共生社会やインドネシア語について更に学習を進めたいと考えています。

今回の研修目的は 1.インドネシア語の習得
2.国際交流の 2 点であった。

1.に関して、インドネシア大学(UI)のインドネシア語講座を受講した。

インドネシア語講座は、毎日午前中に 3 時間 BIPA(外国人用インドネシア講座)を受けた。使用言語は基本インドネシア語であったが、身振り手振りを交えて楽しく授業に取り組むことができた。最終日には speaking のテストがあり、2 人か 3 人のグループで行った。Reading でも writing でもなく speaking のテストをすることに驚きつつも、日本とインドネシアの語学教育の違いを垣間見た気がした。

英語と似ており、取り組みやすい言語であったこともあり、簡単な自己紹介や物の場所の言い方、買い物での会話等はできるようになった。しかし、学んだことを会話として自由自在に使うまでには至らなかったように思う。語学は話すことが重要であり、上達の近道である。もっと積極的に授業内外でインドネシア語を使っていくことが必要であった。

2.の国際交流の一環として、UI の学生と共に共同発表を行った。

UI 生 2 人と京大生 2 人の 4 人グループを 5 班つくり、平日に 2 時間程度ずつ準備をした。私たちの班は、人種・宗教差別がテーマであったが、UI の人が外国語である日本語で発表するという点を差し引いても、普段、人文科学部で日本語を専門として学習する UI の日本語学科の学生にとって、社会問題は内容的に難解であったかもしれない。ただ、今回の共同学習

には発表すること自体よりも、UI 生と京大生が、その難しいテーマに関する知識を得、考えるという、発表までのプロセスに意義があったように思う。自分の国で起きている問題については案外知らないことが多く、それを知るというだけでも大きな価値があった。さらに、人種宗教のような深刻な話題について、普段日本にいても学生同士で話す機会は多くない。けれども、インドネシアに行くと、大学内にモスクがあったり、公衆トイレの隣に礼拝施設があったりと、日本との宗教観念の違いを目の当たりにする。その違いへの疑問を現地の学生にぶつけることで、少しばかり人種宗教への理解が深まったように思う。所見を述べると、日本人の自分から見ると、異なる宗教が共存しており、一見相容れない営みが同時に行われていることも、大半のインドネシア人にとっては、もはやそれが既に日常であり、文化の 1 つに組み込まれているような印象さえ受けた。もちろん宗教観念というものがあることには間違いないが、日常生活レベルで考えた時、宗教は生活の中で完全独立しているものではなく、宗教が他の日常的行いと融合しており、それを一体として文化・慣習が出来上がっているのではないだろうか。

共同発表については京大生側が提示したテーマが難しいこともあり、共同研究・発表という学問的なレベルには十分に達せなかった。しかし、共同発表の準備や観光を UI の学生と共に行い、時間を一緒に過ごすことで、双方の国と自国への理解を深めることができた為、国際交流の目的は達成できたように思う。

今回のインドネシアでの研修を通して確実に自分の世界を見る視野が広がったと思う。まずインドネシア語への理解が確実に深まった。このことによってインドネシアという国がより身近な国となり、自然とインドネシアの文化、宗教などの問題についての学習意欲が高まった。またプレゼンテーションでも大きな学びを得ることが出来た。自分の班は宗教・人種をテーマにし日本国内での「ヘイトスピーチ」を取り上げたのだが、インドネシア大学の先生から非常な好評を得ることができた。先生からインドネシア国内での宗教差別などの事例を学び、日本国内の状況とそれを比較し、コメントをいただくという過程で自分の視野は広がり、学習意欲は大きく向上した。今回のプログラムを足掛かりとして今後もインドネシア語やムスリムの文化などについて継続して学んでいきたい。

インドネシアでは多くの現地の食べ物に接し、食文化の違いを垣間見ることができた。また気候の違いがキャンパスの様子からもはっきりと伺えた。週末の研修ではタマンミニという場所でインドネシア国内の多くの部族の文化について知ることができ、またワヤン(Wayan; 演劇の一種)やアジア通貨危機時のインドネシア銀行の状況などを学べた。宗教に関しては現地の学生がモスクや教会でお祈りをしている姿を頻繁に目にし、宗教に対する意識の違いを目の当たりにすること

ができた。さらにオランウータンなどの動物と触れ合う機会もあり、改めて京大の霊長類研究所への関心が高まった。

平日の午前中はインドネシア語の学習をした。挨拶から始まり、簡単な対話、数字の数え方などを反復して学ぶことができ、身につけることができた。午後からは統語論やマルクス経済学、日本近現代史、インドネシアの楽器や、インドネシア国内の宗教、政治などの現況について詳しく学べた。週末のツアーではインドネシア国内の多様な民族、宗教、歴史について学べた。

今後、記者として働く予定の自分にとって、今回の研修は非常に大きな影響を与えた。まずインドネシア語を初歩ながら学べたことでインドネシアへの親近感が増した。さらに多くの友人、日本に詳しい先生と知り合えたため将来インドネシアで仕事をしたいという思いが強くなった。特に日本文化、政治に詳しい先生と知り合えたことは大きな収穫であった。自分が関心のある問題について今後も多くの知見を与えてくださるであろう。今回の研修は進路選択に不安を抱えていた自分の背中を押してくれ、多くのすばらしい友人との出会いもあり精神的に前向きにしてくれた。また今まで東アジアに関心が高かった自分にとって自らの視野を ASEAN 地域に拡大してくれた点で自分の今後の仕事に大変意義深い、大きな影響を与えてくれた。

私がこのプログラムに参加したのは、インドネシアの言語を学ぶとともに、日本と異なる土地での人々の生活や習慣、文化について知りたいと思ったからだ。今回初めてインドネシアを訪れて、多くの貴重な体験ができた。

このプログラムでは、大学での授業としてインドネシア語講座の受講と日本学科の授業の聴講を行い、それ以外の活動としては日本学科の学生との共同発表を行った。

インドネシア語講座では、基礎的なインドネシア語の単語や表現を学び、簡単な会話練習を行った。ここで学んだ表現は、現地の人々との交流や買い物をするときなどに実際に利用できるものが多く、身につけた知識をすぐに活用することができた。しかし、片言では伝えられないことも多く、これからも継続して学んでいきたいと思った。日本学科の授業を受けたことは、日本について新たな視点から考えるよいきっかけとなった。たとえば、日本によるインドネシア占領による影響の中には、教育の普及や社会の組織化、独立運動の活発化など、良いものもあったという意見を聞いて、こういった歴史を良い、悪いに二極化して考えることの問題性と限界を感じた。

現地の学生との共同発表では、京都大学生、インドネシア大学生の混合グループによるプレゼンテーションを準備し、最終日に発表した。この発表を通してお互い、相手の国についてはもちろん、自分の国についても理解を深められたと思う。また、他の班の発表を聞く中でも、自国について学ぶことが多くあった。このような機会は日本でも普段なかなか得られないので、今回このような共同発表を行ったことは非常によい経験となった。

また、休日にはインドネシア大生と共にインドネ

シア各地の伝統的な家を再現した公園と、オランダ占領時代の町を訪れた。占領時代を経てインドネシアというひとつの国にまとまった現在も、各民族の人々が自分たちの文化を保持し続けているということには驚いた。このような、「インドネシア文化」という言葉ではまとめきれないほどの多様性について、渡航前にはあまり深く考えたことがなかったが、実際に見てみると、なぜここまで多くの異なる文化が生まれたのか、各文化どうしの関連性はどの程度あるのかなど、多くの疑問がわいてきた。今回のプログラムではこういったことについてあまり多くを知る機会がなかったが、これから自分なりに学んでいきたい。

今回インドネシアで 2 週間過ごす中で、こういったインドネシアの興味深い点も数多く見つけたが、他方で、問題点もいくつも目についた。そのうち最も気になったのが大気汚染だ。大都市のジャカルタでは大気汚染が酷いだろうということは予想していたが、大学のキャンパスがあるデポックでも、大通りに行くと一気に空気が変わる気がするほど空気が汚れている。もちろん、新興国のこういった現状について聞いたことがなかったわけではないが、実際に自分の目で見てみると、その深刻性は予想していた以上だった。こういった問題を解決するために何をすべきなのかということについても、今後考えていきたい。

このプログラムに参加して、インドネシアの言語や社会、文化などに今まで以上に興味を持ったが、2 週間という短い期間では非常に限られたことしか知ることができなかった。これからも、これらのことについて積極的に学んでいきたい。

私は環境問題に関心があり、インドネシアについては大規模プランテーションによる熱帯林の破壊が問題であるということをよく授業で聞いていました。また、イスラム教関連のニュースが増える中で、イスラム教について知りたいと思うようになりました。今回のプログラムでは、インドネシア大学の学生との交流を通して、インドネシアの人たちがインドネシアの環境問題についてどう考えているのかということと、イスラム教について色々知ることを目標としました。

インドネシアに滞在中は、午前中にインドネシア語の授業、午後は日本学科の授業を受けていました。インドネシア語の授業では、先生方が明るく楽しく授業をしてくださるので、毎日の授業がとても楽しみでした。授業で習った会話を食堂やゲストハウスにいる地元の方とすぐに実践でき、語学学習の大きな励みになりました。また、授業最終日に行われるプレゼンテーションのため、インドネシア大学の学生と時間を見つけて準備を進めました。私たちのチームのカテゴリーは環境で、初めは日本の原発やインドネシアのプランテーションなどをテーマにしようと考えていたのですが、身近な話の方がよいということになり、テーマはごみ問題となりました。インドネシア大学のメンバーの一人が日本を訪れた際に大型リサイクルショップの存在に驚いた経験があったため、インドネシアと日本のリユース事情を分析し、インドネシアにも大型リサイクルショップが進出できるのかという視点からごみ問

題を発表しました。インドネシアの暮らしでは、生活のいたるところでイスラム文化を感じられました。ちょっとしたお店の中にもお祈りのための場所があり、インドネシア大学の学生の多くも時間になるとお祈りに行きます。大学内にも大きなモスクがありますし、豚肉やお酒を目にする機会はほとんどありません。ただ、一方、イスラム教といっても色々宗派があり、それぞれ考え方が違うということをインドネシア大学の学生から教わりました。また、確かにイスラム教が多数ですが、インドネシアは多宗教の国です。日本学科の授業の中に社会学の授業があったのですが、その授業で先生は「マジョリティーは一番鈍感だ」とおっしゃっていました。多宗教・多文化の国ということは、少数派を尊重しなければならないのですが、多数派は鈍感なので少数派の思いはなかなか反映されない、という意味です。この言葉は環境問題にも当てはまる、常に意識していないといけない大切な言葉だと思います。

今回のプログラムで、インドネシア大学の先生、学生にはとてもよく面倒をみていただき、色々なテーマの話をしながら交流できました。環境問題に関しては、貧困や失業率などの他の社会問題に隠れてしまっているような感じがしました。環境問題解決のためにはアプローチ方法が重要だと思いました。イスラム教に関しては、日常的なイスラム文化には触れられたと思いますので、日本でも勉強をして理解を深めたいと思っています。

Kami pergi ke Indonesia 14 hari. Saya sangat menyenangkan. Saya makan Nasi goreng, Rendang, Bakso, Soto, Sate... semuanya bagus! Saya senang sekali bisa bicara dengan UI mahasiswa dan dosen. Saya belajar Bahasa Indonesia di Kyoto juga. Terimakasih banyak!

今回のインドネシア大学 (UI) SEND プログラムは、インドネシア語研修、日本語の統語論やインドネシアの社会などに関する授業、グループごとのプレゼンテーション、そして UI の日本語学科の学生たちとの交流が主な内容でした。チューターとして UI 生たちが京大生についてくれて、食事や買い物、週末の観光などでは私たちを案内してくれました。

インドネシア語講座では BIPA の先生方から毎日インドネシア語を教えていただきました。研修前は語学について少し不安を感じていたのですが、京大で1週間留学生の方からインドネシア語を教えてもらっていたこともあり、スムーズに慣れることができました。簡単なあいさつ、数字、位置、買い物での会話などを教わりましたが、会話やゲームが盛り込まれた授業で、とても楽しく学ぶことが出来ました。また授業以外でも、UI 生に単語や日常会話をたくさん教えてもらいました。しだいに話せる内容が増えていき、成果が感じられたのがとても嬉しかったです。

語学以外では日本語学科の授業を受講しました。私が最も興味深いと感じたのはインドネシアの現在の課題についての授業でした。その中でも印象的だったのが、インドネシアでは現在宗教に対してリベラル化と保守化が混在しているというお話です。このように宗教について考えることは授業でも授業以外でも多々ありましたが、宗教が日常生活に深く根付いているという点で日本とのギャップに驚くことは研修中たくさ

んありました。日本にいと宗教についてみんなで話すということがあまりないので、今回いろいろな考えを聞くことができて良かったです。

プレゼンテーションでは、私たちのグループは「日本とインドネシアの住居」について取り組みました。お互いの国の住居の歴史と特徴的な建物を紹介するという内容であったため、UI 生と議論をするということはあまりなかったのですが、発表の後に先生方から、もっと内容を掘り下げ日本とインドネシアとを形式的ではなく実質的に比較してもらいたかったという意見をいただきました。反省点として、観点を絞りもっと比較・検討に重きを置いて議論をするべきだったと思います。しかし4人で協力してプレゼンテーションを作り上げることができたのでその点は良かったです。また、ジャワ島の伝統的な家屋 joglo については初めて知ったのですが、構造、用途ともにとても面白いなと思いました。他にも地域ごとにたくさんの伝統的家屋があるそうです。

私は SEND プログラムに応募した大きな動機として、現地の方々と交流したいという気持ちがありました。今まで何度か観光では海外に行くことはあったのですが、現地の方と交流するという機会があまりなかったからです。今回プログラムに参加させていただき、たくさんの学生さん、先生方とお話することができました。その中で新たな発見や改めて気付くことなども多々あり、とても貴重な体験となりました。また、学校の外ではインドネシア語で話しかけたり道を聞いたりすることもありましたが、現地の言葉でコミュニケーションが取れるととても楽しく、語学の重要性を強く実感しました。しかし自分の気持ちが上手く伝えられないことも多く歯がゆい思いをしたので、今後、英語はもちろんインドネシア語の勉強も続けていきたいと思っています。

「Saya belajar Bahasa Indonesia 2 minggu. (私はインドネシア語を 2 週間勉強しました)」
「Apakah Universitas ada di dekat? (大学は近くですか?)」「Setiap hari macet di sini? (ここは毎日渋滞ですか?)」 —これらは、最終日に車の助手席に乗った際、自分からドライバーに話しかけた会話の一部である(注:文法上の正確さは保証できず)。

プログラムの中心であるインドネシア語学習は、アルファベット等の初歩から始まり、基本的な単語(名詞、数詞および動詞等)や文型の習得を図るものだった。言語自体のシンプルさ、および先生の楽しい授業のおかげでもあるが、2 週間の学習で、冒頭のような簡単な会話が楽しめるようになるとは、我ながら驚きであった。

語学のほかには、現地学生と共に講義(社会構造論および日本の現代史等)を聴講した。それらの多くは日本語のサポートもあり、また日本人学生からも発言を引き出す講義であったといえる。さらに、プログラムには現地学生と共同での資料作成およびプレゼンテーションも含まれていた。自分のグループはテーマを労働問題に設定し、両国の具体的な問題、その背景および実例等を整理し、協力して同大学の先生および学生に対して発表を行った。国籍を始め、バックグラウンドが全く異なる学生と議論を交わすことは、マネジメントを専攻する自身にとって、いつも学びの良い機会となってくれる。

今回の研修ではインドネシア大学の先生方および学生たちと交流の時間を多く持つことが

できた。よって、彼らとの出会いや、過ごした時間も貴重な財産といえる。しかし、今回強く印象に残ったことは、インドネシア料理がおいしかったこと、そしてそれらが依然として低価格であるということである。約 20 年前にもインドネシアを訪れた経験があるが、今なお 100 円あるいは 200 円で十分なボリュームのおいしい食事ができるということは、逆にいうと、今後さらに経済発展する余地があるということだ。そのことを実感させられた。

研修参加に際し、私は 2 つの目標を定めていた。1 つは、経済発展が続く現地の社会・経済状況を肌で感じるということ、そしてもう 1 つは、現地の学生と交流を深めるということである。

1 つ目の目標は、十分に達成できた。宿泊施設が学内にあったためキャンパス内で過ごす機会が多かったが、食事、買い物、そして観光等で出かける機会も多く、その際、エネルギー的な人々や街の様子をあちこちで目にすることができたからである。また、2 つ目の目標も同じく、十分に達成できた。これは、インドネシア大学側が、いわゆるマンツーマンで熱心なサポートをしてくれたことによるところが大きい。なお、今回の研修の反省点だが、全く思い浮かばない。自分にとっては、それほど充実したプログラムであったと評価している。最後になったが、本学でサポート頂いた先生方、現地の先生および学生たち、そして一緒に参加したメンバー一同に感謝したい。



 Australia



SENDプログラム

2015年シドニー大学スプリングスクールプログラムのご案内

締切：2014年11月5日(水) 12時00分

【日程】

- ・2015年2月28日(土) 出発
3月1日(日) シドニー到着
3月2日(月)～3月12日(木)：於 シドニー大学
オリエンテーション、英語講義、文化講座、学生交流、実地研修
3月13日(金) 発表討論、修了式
3月14日(土) シドニー出発
3月15日(日) 帰国

【詳細】

- ・募集人数：20名程度
- ・募集対象：京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、
農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、経営管理大学院に所属する者を優先する)
- ・募集条件：異文化体験・学習に高い意識を持つ者
- ・応募資格：右記の英語力を有する者 (IELTS5.0以上、TOEFL iBT61以上、もしくはこれらに相当する語学能力)
- ・費用詳細

1 AUD=99.76円 (2014年10月現在)

 - 学費：2,070AUD (約207,000円)
 - 航空チケット代：約162,000円
 - 宿泊費：660AUD (約66,000円) / 13泊 ※学内のゲストハウス [予定]
 - 海外旅行保険料 [全員必須]：約13,000円 ※AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」に加入すること
(治療・救援費用無制限に設定)
 - 電子入国許可手数料 [全員必須]：3,240円 ※詳細は参加者オリエンテーションで指示します。
 - 諸費用 (国内移動費・その他)：約40,000円～50,000円
- ・補助金
以下のとおり各種支援を行います。
 - 研修支援 (約70,000円)：若干名 ※JASSOの支給要件を満たす者
日本国籍を有する者、または日本への永住が許可されている者
前年度の成績評価係数が2.30以上、かつ収入が限度額未満の者
 - ＜KUASUによる補助＞航空チケット代・宿泊費 (160,000円)：4名
 - ＜上記以外による補助＞学費・航空チケット代・宿泊費 (約435,000円)：15名程度※ただし、参加決定後に取消す場合はキャンセル料が発生します。

【申し込み方法】 今年度から応募方法が変わりました。

- ・申請手順：1. オンライン申請を行う。(オンライン申請の手順については【別紙】参照)
2. 申請内容をプリントアウトしたものに自署し、以下の書類と共に所定の提出先に持参する。
 - ①応募申請書 (書式1-2、短期派遣・単位取得免除プログラム)
 - ②語学力証明書 (書式3、英語に関する記入のみで可)
 - ③語学試験 (英語) のスコアコピー
 - ④成績証明書
 - ⑤パスポートの顔写真ページ写し (未取得者はその旨を申し出、早急に取得すること)

⑥収入に関する証明書（JASSO 奨学金申請者のみ。応募申請書「書式 1－2」3 頁を参照のこと）

給与所得者・・・源泉徴収票のコピー（税込み）

給与所得以外・・・①確定申告を確定申告書の持参・郵送により行った場合

確定申告書（第一表と第二表）（控）の写し（税務署の受付印があるもの）

※税務署の受付印がないものは、加えて市区町村役場発行の「所得証明書」（有料）が必要

②確定申告を電子申告により行った場合

申告内容確認表の写し（受信通知又は即時通知を添付）

学部生については世帯の年収（給与所得世帯 908 万円未満、給与所得以外の世帯 422 万円未満）の証明書、

大学院生については本人および配偶者の収入（修士課程 486 万円以下）の証明書を提出してください。

この奨学金を受給する学生は、帰国後に留学の学習成果に関する報告書の提出が義務づけられています。報告書が提出されない場合、もしくは不備がある場合、一旦支給された奨学金の全額返却が求められる場合がありますので注意してください。

※申請書類①と②は、国際交流センター、アジア研究教育ユニット（KUASU）の各ホームページからもダウンロード可能です。

＜国際交流センター＞

<http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>

＜アジア研究教育ユニット（KUASU）＞

<http://www.kuasuu.cpiet.kyoto-u.ac.jp/application/application-procedures/>

- ・ 申請書類提出先：研究国際部国際学生交流課交流支援掛 派遣プログラム担当 075-753-5679
（吉田国際交流会館地下 1 階 国際企画連携部門 事務室）
- ・ 選考：書類審査および面接により行います。
面接は 11 月上旬～中旬に京都大学国際交流センター内で行います。
- ・ 最終結果通知：11 月中旬～下旬 オンライン申請時に登録済みのメールアドレス宛に通知します。
- ・ 本件照会先：国際交流センター 森 真理子
佐々木幸喜 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp
研究国際部国際学生交流課 清水 瞳 shimizu.hitomi.2e@kyoto-u.ac.jp

【スケジュール】

- ・ 参加者オリエンテーション：11 月下旬
- ・ ヘルスケア講義：12 月下旬

※オリエンテーションおよびヘルスケア講義は出席必須です。

日時・場所は追って連絡します。

【備考】

- ・ 本プログラムは他プログラムとの併願を認めていません。
- ・ 本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（前期：金曜 5 限／後期：火曜 2 限）を受講した上での参加を推奨しています。
- ・ 本プログラムに参加しても、京都大学の単位になるわけではありません。
- ・ 参加者全員に治療・救済費用無制限の AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。
- ・ 自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。

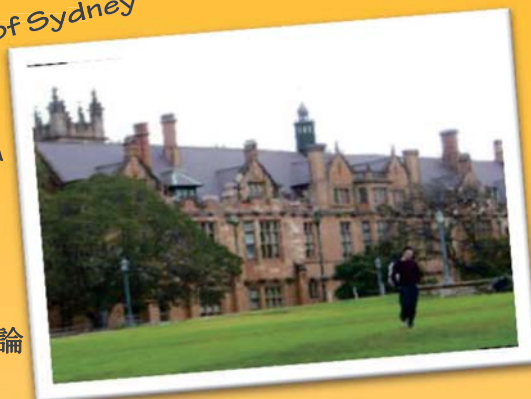
～SENDプログラム～

シドニー大学スプリングスクール

【日程】

出発日:2015年2月28日(土)
帰国日:2015年3月15日(日)
(約2週間)

The University of Sydney



【詳細】

- 募集人数 : 20名程度
- 研修内容 : 英語講義、文化講座、学生交流、実地研修、発表討論
- 募集対象 : 京都大学に在籍する正規学部生・正規修士課程学生
(大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、経営管理大学院に所属する者を優先する)
- 応募資格 : 右記の英語力を有する者 (IELTS5.0以上、TOEFL iBT61以上、もしくはこれらに相当する語学能力)
- 費用 : 学費 約2,070AUD (約207,000円) 【1AUD = 99.76円 (2014年10月現在)】
航空チケット代 162,000円
宿泊費 660AUD (約66,000円) / 13泊
上記費用に含まれないもの
(国内移動費・電子入国許可手数料・海外旅行保険料等)
- 補助金 : 以下のとおり各種支援を行います。
(ただし、参加決定後の取消にはキャンセル料が発生します)
研修費用 (70,000円) : 若干名 ※JASSOの支給要件を満たす者
<KUASUによる補助>航空チケット代・宿泊費 (160,000円) : 4名
<上記以外による補助>航空チケット代・学費・宿泊費 (約435,000円) : 15名程度



【申し込み方法】

書類 : オンライン申請 <https://area34.smp.ne.jp/area/p/nita0mjell1pepbt9/hbbQ7J/login.html>
オンライン申請内容をプリントアウトしたものに自署し、以下の書類と共に所定の提出先に持参する。
①応募申請書 ②語学力証明書 ③語学試験 (英語) のスコアコピー ④成績証明書
⑤パスポートの顔写真ページ写し
⑥収入に関する証明書 (JASSO奨学金申請者のみ) ※詳細は「②応募申請書」参照
提出先 : 研究国際部国際学生交流課交流支援掛 派遣プログラム担当 075-753-5679
(吉田国際交流会館地下1階 国際企画連携部門 事務室)

【締切日】 2014年11月5日(水) 12時00分

【本件照会先】

国際交流センター 森 真理子 / 佐々木 幸喜 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp
研究国際部国際学生交流課 清水 瞳 shimizu.hitomi.2e@kyoto-u.ac.jp

【備考】

- 本プログラムは他プログラムとの併願を認めていません。
- 本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(前期:金曜5限/後期:火曜2限)を受講した上での参加を推奨しています。
- 本プログラムに参加しても、京都大学の単位になるわけではありません。
- 参加者全員に治療・救済費用無制限のAIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。
- 自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。



Young Leaders Program Cross Cultural Communication

Kyoto University

February 28th – March 15th 2015

Sat 28th February

Depart Japan

Sun 1st March

Arrive in Sydney 07:15am CX111, Met by ILP staff at airport then bus to accommodation



= Please wear your ILP T-shirt for this activity

WEEK 1:

Mon 2 nd Mar	Tue 3 rd Mar	Wed 4 th Mar	Thu 5 th Mar	Fri 6 th Mar
8:30 Depart your accommodation and travel to uni 9.30 – 10.30 Arrival Orientation - Program - Campus 10.30 – 12.30 Campus Tour with local students [John Woolley S243]	9.30 – 11.30 <u>Lecture</u> Cross cultural communication Amanda Budde-Sung 11.45 – 12.45 <u>Lecture/Workshop</u> Cross cultural marketing Yoshinori Sakuno, Managing Director - doq [New Law Seminar room 105]	9.30 – 12.30 <u>English Class</u> English Communication Eugene Karangis [New Law Seminar Room 346]	9.30 – 12.30 <u>English Class</u> English Communication Eugene Karangis [Eastern Avenue Room 120]	 8.45 Meet bus at clocktower <u>Field Trip</u> Calmsley Hill City Farm • Australian agriculture and economics • Sustainable farming techniques • Meet Australian native animals • Koala information talk 15.00 Bus back to University
12.30 – 13.30 Welcome lunch	12.45 – 14.00 Lunch break	12.30 – 13.30 Lunch break	12.30 – 13.30 Lunch break	
14.00 – 16.30 <u>English Class</u> English Communication Eugene Karangis [John Woolley S243]	14.00 – 16.00 <u>Lecture</u> Global Business Management Sid Gray [New Law Seminar room 105]	13.30 – 16.00 <u>English Class</u> English Communication Eugene Karangis [New Law Seminar Room 346]	13.30 – 16.30 <u>English Workshop</u> Management Skills - Leadership and teamwork Wendy Jocum [Eastern Avenue Room 116]	

Sat 7th Mar

Free Time

Sun 8th Mar

Free time

Updated: 27 February 2015



WEEK 2:

Mon 9 th Mar	Tue 10 th Mar	Wed 11 th Mar	Thu 12 th Mar	Fri 13 th Mar
9.30 – 12.30 <u>English Class</u> English Communication Eugene Karangis	9.30 – 12.30 <u>English Class</u> English Communication Eugene Karangis	9.00 – 12.00 <u>Group Presentations</u> Final group assessment Eugene Karangis Submit final report	 8.15 Meet at Circular Quay Wharf No3 to catch the Ferry to Manly – don't be late!! Ferry departs at 8:35 <u>Field trip/Workshop</u> Manly Life Saving Club Beach Safety and surf lifesaving Culture Surf rescue workshop	9.00 – 12.00 Japanese Class Level 5 Yasuko Claremont [Teachers college Rm 436-436-440] 9.00 – 12.00 Japanese Class Level 7 Hirokazu Mashimo [Quadrangle Building, Latin 2 S225] 10.00 – 12.00 Japanese Class Level 9 Masako Kubo [10-11: Teachers college Rm 440] [11-12: Education Building room 419]
[Badham 145 Tutorial Room 2]	[Edward Ford Seminar room 316]	[John Woolley S243]		
12.30 – 14.30 Lunch break	12.30 – 14.00 Lunch break	12.00 – 13.00 Lunch break		12.30 – 14.00 Farewell Lunch
14.30 -15.30 <u>Visit</u> Promoting Japanese language and culture in Australia The Japan Foundation	14.00 – 17.00 <u>Lecture observation</u> Audit of selected lecture at Sydney University [Rooms – Various]	13.00 – 16.00 <u>Japanese culture workshop</u> Kyoto students present to local students [John Woolley S243]	PM Explore Manly Beach	14:00 -16:00 Evaluation Closing Ceremony and Certificate presentation [John Woolley S243]

Sat 14 th Mar	Sun 15 th Mar
18:30 Bus pickup from accommodation (return your Opal Card to Rebecca before getting on the bus) 22:20 Depart Sydney CX138	Arrive in Japan

参加者名簿

	氏 名 (Name)	所 属	学 年
	大島 七海 (Nanami OSHIMA)	総合人間学部	B3
	坂根 衣璃子 (Eriko SAKANE)	総合人間学部	B3
副班長	井上 翔太 (Shota INOUE)	総合人間学部	B2
	折原 琴和 (Kotowa ORIHARA)	文学部	B4
班長	小池 和輝 (Kazuki KOIKE)	文学部	B4
	中西 佑 (Tasuku NAKANISHI)	法学部	B2
	渡邊 真理子 (Mariko WATANABE)	医学部	B1
	庄 博文 (Bowen ZHUANG)	薬学部	B2
	野田 貴頌 (Takanobu NODA)	工学部	B4
	小川 紗也加 (Sayaka OGAWA)	工学部	B3
	藤井 温子 (Atsuko FUJII)	農学部	B4
	稲田 達彦 (Tatsuhiko INADA)	農学部	B3
	晴気 七菜 (Nana HARUKI)	農学部	B3
	岡崎 史恵 (Fumie OKAZAKI)	農学部	B2
	清島 優花 (Yuka KIYOSHIMA)	農学部	B2
	押村 亜沙美 (Asami OSHIMURA)	農学部	B1
	鄭 東嬌 (Dongyan ZHENG)	農学部	B1
	山田 晃大 (Akihiro YAMADA)	農学部	B1
	松井 宏文 (Hirofumi MATSUI)	大学院経営管理教育部	M2
副班長	朴 晟雄 (Sung Woong PARK)	大学院経営管理教育部	M1

YOUNG LEADERS PROGRAM – THE UNIVERSITY OF SYDNEY, AUSTRALIA

Rebecca Whitcomb

Assistant International Project Coordinator,
International Leaders Program, Office of Global Engagement

Cross Cultural Communication is a tailor made, two week intensive program designed for selected students from Kyoto University. All components are closely inter-linked with the major theme of this training, allowing students to understand and develop important elements of leadership and communication skills as well as intercultural awareness.

The learning outcomes of the program are:

- Improve ability and confidence in using English language skills in an academic and business environment
- Effectively use cross-cultural communication and leadership skills
- Recognize the importance of understanding Australian cultural values and their impact on society and business
- Develop relationships and networks with Australian students, academics and the community.

The program is comprised of four main components: English language classes, lectures and workshops, educational field trips and visits and interaction with local students.

English language classes will enhance overall English proficiency of students across all skills: speaking, listening, reading and writing skill, as well as develop confidence in interacting with native English speakers within the broader community and academic realm using an integrated approach towards achieving optimum communicative competence.

Lectures and workshops will allow students to further develop their understanding in areas including management, cross cultural communication and globalization. These will all be delivered in an interactive way to encourage students to actively participate and engage in utilizing new concepts and ideas.

The field trips and visits are designed to complement the students learning and to give them a broader understanding of Australian environment and lifestyle. Trips include visiting a working farm to learn about Australian agriculture, economics and issues and challenges relating to sustainability. It also provides an opportunity to learn about native animals such as Kangaroos and Koalas. Other field trips include visiting the Japan Foundation to learn about how Japanese language and culture is promoted and supported in Australia and also a visit to Manly Life Saving Club to develop a deeper understanding of the Australian beach culture and outdoor lifestyle.

One of the most important aspects of the program is that it allows the students to interact and develop relationships with local students. This will be done through a variety of ways such as discussion groups, attending Japanese language classes at Sydney University and a Japanese culture workshop where students from Kyoto University present various aspects of Japanese culture to local students and staff. A number of student “buddies” will also join the group on a daily basis and help the Kyoto students to enjoy university life and show them around Sydney.

YOUNG LEADERS PROGRAM - THE UNIVERSITY OF SYDNEY, AUSTRALIA

Rebecca Whitcomb

Assistant International Project Coordinator,
International Leaders Program, Office of Global Engagement

シドニー大学の **Cross Cultural Communication** (異文化コミュニケーション) プログラムは 2 週間の集中講習であり、選定された京都大学生を対象とします。ニーズにあわせてカスタマイズできることプログラムは、全体において異文化コミュニケーションに焦点をあて、参加学生が国際文化の理解や、自らの指導力とコミュニケーション力を向上することが目的となっています。



以下のような学習成果が期待できます。

- ・英語力を磨き、英語でのコミュニケーション力を強化。大学の授業ではもちろん、就職先でも活用できるビジネス英語などのスキルを向上。
- ・異文化間のコミュニケーションやリーダーシップスキルを効果的に活用。
- ・オーストラリアの文化的価値を理解し、これが社会やビジネスに及ぼす影響を把握する。
- ・オーストラリア人の大学生や研究者、地域社会とのつながりを築く。

本プログラムは 4 つの分野から構成されます：

1. 英語学習
2. 講義とワークショップ
3. 実地見学
4. 現地の学生との交流。

英語学習では、「話す」「聞く」「読む」「書く」それぞれのスキルを磨き、参加学生の英語力を全体的に向上させます。また、包括的なアプローチにより、大学内や地域においてネイティブとの会話を積極的に交わせるようになります。

講義とワークショップでは、経営や異文化コミュニケーション、国際化などの分野をより一層理解できるようになります。対話型の開催で、学生が自発的に参加し、新しい発想や意見を吟味する場になっています。

実地見学では、オーストラリアの環境や生活を把握することによって、参加学生の学習が補完されます。見学対象の例として、作動中の牧場に行って現地の農業や経済、持続可能性への課題などについて学ぶ学生もいます。またオーストラリア固有種動物カンガルーやコアラについて勉強したり、国際交流基金のシドニー支部で日本語や日本文化の推進について学んだりします。それから、オーストラリアのビーチカルチャーやアウトドアへの理解を上げるために、マンリー・ライフ・セービング・クラブを見学するケースもあります。

現地の学生との交流や関係作りも重要視しています。ディスカッショングループや、シドニー大学の日本語講座への参加などでこれが推進されます。日本文化を学生と大学の職員に紹介する日本文化ワークショップにも参加していただきます。また、期間中参加学生に付き添う現地の大学生‘バディ’がキャンパスを案内したり、シドニー市内に遊びに連れれたりしてくれます。

今回、シドニー大学スプリングスクールに参加してオーストラリアの歴史や文化はもちろん、人々の多様さ、日本文化や日本語などが想像以上に親しまれていることに驚いた。中学生の頃にオーストラリアを訪れたことはあったが、当時は英語を用いてコミュニケーションを行うことに力を注ぎすぎたため、の文化や人々について考える余裕があまりなかったように思う。今回、再び訪れてオーストラリアが持つ人種の多様さに驚いた。街中のレストランには、白人系はもちろん、私たちと同じアジア系の人々を見かけることも多かった。また、シドニー大学で講義をしてくださった先生方の多くは、オーストラリア出身ではなかった。普段日本で生活をしていると、外国人を見かけただけで異文化を持つ人と考えて接してしまい、壁を感じることも多くある。しかし、日本と同じ島国であるにも関わらず、オーストラリアでは多様な人種の人々が共存していた。今もなお、肌や髪の色で差別も起こり得るなか、オーストラリアで多様な人種が共存していることには、驚きを感じた。また、こうした人種の多様性を完全には受け入れられない自分も同時にいた。なぜオーストラリアにいるのに、これほどアジア系の人々を見かけるのか、白人だけではないのか、その背景の歴史を理解したつもりになっても、目の前に広がる世界に追いついていなかったように思う。その原因として、日本において作られたオーストラリアに対する固定概念が影響しているように感じた。オーストラリアやアメリカ＝白人といったイメージが自分の中に作られてしまい、その周囲の人々にまで今まで気が付かなかったのではないと思う。実際に多くの人種の人を目にすることで、今回、自分の視野の狭さや固定概念が持つ影響力の強さを感じた。

オーストラリアでは日本文化が想像以上に広く受け入れられ、好意的に感じてもらっていることに驚きを覚えた。街中には Sushi の文字が至る所にあり、日本から来たことを現地の人に伝えると、非

常に興味を示してくれることが多く、実際に日本へ行ったことがあると話す人も多かった。さらに、道で迷っている際にオーストラリアの人へ話しかけると決まってやさしく道を教えてくれた。見知らぬ人同士でも気軽に挨拶をしあい、”Thank you” が飛び交う雰囲気は、日本でも取り入れられるべきだと感じた。また、オーストラリアでは英語を話す機会が日本に比べ断然多く、日々英語で考えるよう自分でも努力を試みた。英語で話すことで、日本語で話す場合に比べて率直に意見を述べるができることがあった。また、英語を使い実際にコミュニケーションを行うことで、今まで本の中でのみ覚えてきた表現方法が実際に使われていることに嬉しさも感じた。日本では沈黙やいわゆる「空気を読む」ことで言いたいことが相手に伝わるがあるが、海外では自分の意見をはっきりと伝えなければ誤解されてしまうことがあると感じた。

プログラム内容としては、午前中に英語講義を受け、午後は様々なワークショップや企業の訪問を行った。ワークショップではグループで意見交換をすることもあり、自分の考えを深めることができた。また、企業や農場を訪問することで、日本との違いに驚かされた反面、日本と共通する部分もあり、興味深かった。

学部卒業後は大学院へ進学することを決めている。今まで科学的な観点からでしか持続可能な農業について考えたことはなかったが、今回参加して、農業について学んだ際に、経済的な視線も重要であると実感した。将来は日本での農業改革に携わりたいと考えていたが、国が違っていても抱えている問題は共通するものがあることに気が付かされ、日本以外での国にも応用できる技術を研究していきたいと考えた。また、科学的専門知識に加えて、専門外の分野の知識についても身に付けたい観点から問題を捉えられるような研究者になれるよう、今後励んでいきたい。

今回の SEND プログラムシドニー大学スプリングスクールプログラムでの授業や現地学生との交流、また学生寮での共同生活などを通して、国際的な理解を深めること、仲間と協力すること、自身の進路について再考することの機会が得られた。

最初に、今回のプログラムでの授業で学んだことが挙げられる。授業の多くは、異文化間のコミュニケーションと相互理解をテーマにしたものであり、英語の授業での読解からスラングまでの幅広い言語習得は言うまでもなく、異文化間でコミュニケーションが行われるときにどういったものが円滑なコミュニケーションの障壁となるのかについてのものであった。それらを通して、言語的なスキルそのものを身につけるだけではなく、各々の持っている文化的背景がいかに大きな影響を与えているのかについて考察することが肝要だと、強く感じた。これから様々な国の人と関わっていく機会が増えていく中で、より良いコミュニケーションのためには、配慮が不可欠なものだと考えたからだ。また、現地の学生との交流を通して、自分たちが普段見ているものとは違う「日本」というものも垣間見ることができたように思う。そのことは特に、現地の大学で日本語の授業に参加した際に感じた。授業の議題が日本の「フリーター」であり、ほかの国の人たちからは～と言われるなど、興味深い意見が出されたからだ。

次に、この2週間の研修期間、仲間たちと大学生活や寮生活など慣れない環境の中で多くの時間をともに過ごしたことで、当初はほとんど初対面だったにもかかわらず、互いに理解を深め合うことができたと感じている。プログラム

の授業やアクティビティ中はもちろんのこと、放課後や週末のシドニー市内やブルーマウンテンの観光を通して、より濃密な時間を共有することができた。様々な専攻や学年の人がおり、普段は日本でもあまり接点がないような人とも多く関わることができ、お互いに刺激を与えられたように感じている。また、日常生活において、食料を共同で購入したり、洗濯機をみんなで回したりするといった経験は、外国での共同生活の醍醐味であったと思う。

そして、今回のプログラムは自身の進路にも少なからず影響を与えていると思う。私は以前にカナダに留学した経験があるが、その時も、今回の留学においても、留学して様々な文化に触れるたびに、もっと自分の知らない世界の文化や情勢、歴史について知りたいと感じ、またそれまで当然だと思っていたことが世界的に見ると決して当然というわけではないということを目の当たりにした。そして、そのよう多様性の中で自分の興味のあることを学んでいきたいという気持ちがより強くなった。

以上のように、「国際的な文化交流や理解のみならず、仲間との共同生活なども通して得たものは、時刻にことについてもより深く考える契機となった。この経験を今後に活かし、これからも様々な文化に触れ、理解を高めていきたい。これからも様々な文化と触れ合い、互いの理解を高めあっていきたい。

今回のプログラムのうち、平日の大学における講義は主に英語に関する広範な知識を供するものであった。それは英語の語法や発音だけでなく、オーストラリアの歴史や文化にもかかわるものであり、ひとくちに「英語」といっても国や地域ごとの差は歴然と存在することを再認識でき、より言語学への興味が深まった。

また、今夏より開始予定のイギリスへの長期派遣留学のための下準備として、文化差からくる振る舞いの形や受け取り方の違いについての講義を受けることができた。

なにより大きかったものは後でも述べる国際交流基金訪問である。日本と異文化の橋渡しをするこの団体の活動は自分の興味関心への自覚を促した。日本文化を他国に理解してもらうための活動やそれに付随する現地スタッフとの協力、及び相手国の文化への理解・関心の推進を行う活動は非常に興味深いものであった。

また今回の留学において、大学内外での学習だけでなく、他の参加者との寮での共同生活も私に大きな影響をもたらしたように思う。毎日ほぼ常に複数人の参加者と行動し、話をする中で、文化や将来のビジョンなどに関して自分の抱いた感想や意見を即座に彼らと交換することができ、様々な考え方の形を知った。二週間のプログラムだが、共同生活の密度の高さのおかげで相互に深く相手を知ることができた。

私にとって今回の留学は英語母語圏への二度目の訪問になる。一度目は高校生の時分であったが、今回大学生として改めて訪れた英語圏は、高校生の時と大きく変わって見えた。

平日の講義後や週末はシドニーの市街地を

訪れることが多かったが、その際に多く見かけたのは白人だけでなくインド系、中国系の人々であった。多様な人々が主に英語を共通語として使用して調和のうちに暮らす様子は、一つの文化交流の形であるだろう。

この光景は大学内においても同様であり、様々な文化的背景を持つ人々が机を並べて講義を受ける姿を実際に直接見ることができた。加えて農場や海など、オーストラリアの特徴的な場所を実際に研修という形で訪れ、直に現地の方々から話を伺うことができたのはよい経験となった。このように学術面のみならず文化的側面においても得るものが多々あったと言える。

プログラム全体として思っていたよりも英語を使用する機会は多くなかったものの、日本の国際交流基金の訪問など、日豪間のつながりを間近に見られたことが私にとって最も価値のあるものであった。そういった機会を盛り込んだこのプログラムの内容は私にとって満足のいくものであったと言える。

大学内の講義の一環として、日本とオーストラリアをつなぐような仕事や機関の存在について学ぶことができ、そういったものに強く惹かれる自分を発見できたように思う。特に国際交流基金への訪問で、職員の方から具体的な仕事を説明していただけたため、自分のやりたい仕事、かかわりたい分野が見えてきた。将来的には日本文化の紹介や、異文化との相互理解の促進に貢献できるような職に就きたいと思うようになった。

私は 2 年前の同じ時期にハワイ大学のスプリングスクールプログラムに参加しました。当時は自分が話した初歩的な英語が相手に伝わっていることが新鮮で嬉しく思い、試験や教科のひとつであった英語が実際の言語であることを体感することができました。しかし今回は英語の多様性について気づかされました。シドニーではオーストラリアで生まれ育った人達だけではなく、ほかの国の出身でシドニーには留学に来ている人や、両親や祖父母の時代に移民してきた人など、多様なバックグラウンドを持つ人たちと出会いました。日本とは違うシドニーのコスモポリタンな雰囲気は新鮮であり、興味深いものでした。また、それに伴い多様な英語が使われていました。そもそもオーストラリアはアメリカ英語ではなくイギリス英語に近く、自分には馴染みのない発音であり、それに加えて、それぞれのバックグラウンドごとのアクセントが加わった様々な英語と出会いました。このような実用的な英語と触れることで、英語が世界共通語であることをより強く実感しました。また、世界の人たちとコミュニケーションをとる道具として、今後英語を活用していくためには、英語の多様さを知ったうえで鍛えていくことが必要だと感じました。

今回のプログラムでは、バディとしてシドニー大学の学生何人かが私たちの面倒を色々と見てくれました。私にとって現地の学生と実際に交流して仲良くなることは難しいことなのですが、今回のバディの方々は皆本当に友好的で、授業以外でも昼ごはんや夜ご飯を食べに行ったり、お酒を飲みに行ったりと facebook 等の SNS で友達になるだけではなく、ちゃんとフェイストゥフェイスでの交流をすることができました。国が違っても一緒に楽しむことができ、人間の核の部分は変わらないのだと再認識しました。

プログラム内容は主に 5 つのパートで構成されていました。

1. 英語の授業: 話すことに重点を置いたワークを行いました。ワークのテーマはオーストラリアの歴史やアボリジニといったオーストラリアに関するも

のであり、オーストラリアへの理解を深めることができました。また、最後の英語授業時に日本とオーストラリアの比較に関するスライド発表とレポート提出が求められました。

2. 日本文化交流: 日本で各グループ事前にテーマを決め準備していたものを発表しました。当日は 20~30 人程度の日本に興味のある現地学生の方々が来て下さり、発表を楽しんでくれました。発表後にはいたるところで会話の輪が生まれ、新たな交流がたくさん生まれました。

3. 英語講義 (グローバルマネジメント・グローバルリーダーシップ等): シドニー大学の先生方、また現地で会社運営をされている方の講義を受けました。どの講師の方々も分かりやすいように内容が工夫されており、興味深くお話を聞くことができました。

4. 課外授業 (企業訪問・ファーム訪問・ライフセービング講習): 大学外で行われた授業です。企業訪問では国際交流基金を訪ね、オーストラリアでの日本語の立ち位置や、日本文化を広めるための活動に関するお話を聞きました。ファーム訪問では、ファームを歩きながらオーストラリアの農業についての解説を聞きました。カンガルーやコアラ等のオーストラリア特有の動物を観察する機会もありました。

5. 日本語授業への参加: シドニー大学の日本語授業へお邪魔し、現地の学生と一緒に授業を受け、練習問題と一緒に取り組みました。

私は 4 回生であり、就職活動を終えているので、ファーストキャリアの会社に変更はありません。今までは今後の働く場所として海外を視野に入れているだけでした。シドニーでは、5 時・6 時あたりには仕事を終え皆帰宅していたり、転職を複数回行うことが当たり前だったり、日本と異なる働き方を見聞しました。もちろん国の現状等を踏まえると安易な比較はできませんが、日本の働き方が全てではなく、日本以外の働き方も参考にし、これからの人生を歩んでいきたいと思いました。

学習成果については、2 週間の派遣期間では自分の定めた水準にまで向上させることができなかった(今回の派遣での最大の目標が「英語を聞き取り、話の流れと内容を理解する」であった)。しかし、「教養知識」の有無が、相手の言いたいことをどれだけ正確に理解できるかを大きく左右するのだと再認識できたことは、目標を達成できなかったこと以上に大きな収穫となった。あるときは内容をほぼ 100%聞き取ることができるのに、別のときにはまったくといっていいほど、内容を理解することができなかった。これは、自分にリスニング能力を補うための背景知識が足りなかったからだと考えられる。聞き取ることができない単語はどの会話にも存在するので、話全体の意味を理解するためには、コンテキストを想像するための背景知識を身につけなければならないと痛感した。

オーストラリアでの滞在の内、最も印象に残ったことは「オーストラリアが多文化社会だ」という知識を肌で感じることができたことだ。オーストラリアでは大学でも街中でも、本当に多くの人種が存在している。街を歩いていると聞こえる言葉は必ずしも英語ではなく、中国語、韓国語、あるいは私にはわからない他の言語であった。同じ言語の話者同士が会話するときと、異なる言語の話者同士が会話するときで言語をスイッチすることができるのは、彼らが high school の時点で既に第二外国語を学んでいるからだろうと思う。英語は当然としてさらに別の言語を学ぶ、ということに全く抵抗を感じていないというところが日本の学生と異なる点だ。今回の滞在をきっかけに、私は自分が今までに学んでいない言語やその文化圏により興味をもつことができた。

派遣プログラムの内容において満足した点は、農場や海水浴場の訪問を通じて、現地の人の生の音を聞くことができた点である。例えば、英語学習授業の先生は Hi, mate. [hai, mat] と発音し、農場の男性は days [daiz] と発音した。他にも、cigarette を ciggie、Australian を Aussie、relatives を rellies と省略することもオーストラリア英語の特徴だと学んだ。私は英語の方言学を専攻しているため、オーストラリアなまりの英語が実際にどのように発音されるのかにとっても興味をもっていた。そのため、シドニー大

学の学生だけでなく、さまざまな年代・バックグラウンドの人と会話でき、中学高校で学んだ英語との違いを直接に体験できたことが非常に嬉しかった。

今回の派遣をきっかけに、就職後にも長期で海外に滞在したいと強く感じるようになった。また、今回の派遣を通じて、「言わなくても察するべき」「曖昧さを受け入れる」日本文化とはまったく異なる文化圏での経験をより多く積み重ねなければならないと感じた。派遣終了後に就職する予定の企業では、積極的に海外派遣を実施しているわけではない。しかし、自分が働く企業がどのような条件・場所であっても、海外の企業や外国人と関わりが全くないということはあり得ないはずだ。今回のように海外で生活して初めて知ったこと(物価の違い、公共交通機関における IC カードシステムの充実、価格の表記法)は、日本社会の改善点を探すヒントになりえるため、就職後にも必要だと考えられる。2 週間という短い派遣期間でもたくさんの感動と驚きを感じることができたので、より長期間海外での滞在の機会があれば、より豊富な知識と感性を持って仕事に、日本社会に向き合えるのではないかと考えるようになった。

海外での生活から得た教訓は、自分が母語でない言語を話すときに、どこまで相手の言葉を理解したのか、相手にきちんと伝えなければならないということだ。「この部分まではわかった」「ここから先が理解できないからもう一度話して」と言葉にして表すことがコミュニケーション上不可欠だ。しかし、聞き返すことで話の流れやテンポを一時止めてしまうため、実際に Could you speak again, please? と言うことが私には初め難しかった。とはいえ、相手の言葉を受け止めかつ話を深く掘り下げるためには、私の外国語能力を考えると、聞き返すことしか方法がない。そこで、相手が発した言葉を間違うことなく理解したい、という気持ちを持って聞き返すことを心がけた。すると、自然と相手との eye contact の回数が増え、お互いに全身全霊を込めて理解し合うことに繋がった。次に海外へ行っても、ぜひ実践したい。

今回の派遣を通して、大きく考え方が変わったものがいくつかある。その中でも特に私にとって大きい印象のあった二つを述べたいと思う。

まずひとつめが、長期留学に対するモチベーションである。1 回生時は漠然と、私費で語学学校に留学するのみでもよいかなと考えており、それが 2 回生になり、派遣留学をして海外の大学で、語学のみならず専門分野を学びたいというのぞみに変わったものの、夜ごと寝られなくなるような強い動機はえられないままだった。しかし今回、世界でも有数のシドニー大学において学べたことは、たった2週間の短い滞在であったにも拘わらず、その動機を与えてくれた。まずキャンパスの大きさと建物の荘厳さが日本の大学とけた違いなのである。在籍している留学生の数もはるかに多く、多様な観点からの意見をえられることも魅力である。教授の部屋のドアは時々開け放たれていて、そういう時は生徒の誰もが自由に入り意見を教授と交わすことができる。一番大きい図書館は9階まであり、自習するのに十分なスペースがある。プログラムの一環で法学部の授業に参加したが、その講義では途中で休憩がとられ、学生たちはその時間、教室の前に列をなして質問していた。学生の講義に対する熱意がそもそも違うことも特筆すべきだが、さらに言えばこのシステムならば、疑問を積み残したまま講義を最後まできくおそれがない。日本法とは異なる英米法の概念がきけたことも興味深かった。このように、なにが京都大学を含む日本の大学にないのか、逆に言えば、留学すれば今までえられなかったものをどうえられるのか、といった明確なビジョンがみえたことで、漠然と「海外の大学を見てみたい」という気持ちが、上記のようなものがえられる「海外の大学でどうしても学びたい」という痛切な思いとなった。これはとても大きな収穫であった。

二つ目がグローバル化に対する考え方の変化である。私はこれまでグローバル化によって、言語における英語の支配がみられるように、その他の文化においても優勢な文化の支配がすすみ文化のモノクロ化がどんどん進んでいってしまうのではないかと、その一環として日本も支配的な他国の文化の波に飲み込まれてしまうのではな

いか、という危機感を抱いていた。しかしながら、多文化共生をうたっているオーストラリアに行ってみれば話は全く違っていた。多様なバックグラウンドをもつ民族が、互いの文化を尊重しつつ自身の文化も保っていた。たとえば言語の面で言うと、英語という共通語はしゃべりつつも、自身のバックグラウンドとなる国の言語も加えて話すことができる、という人がほとんどであった。グローバル化イコール単一化、という図式のみではなく、世の中はつながりながらも、逆に言えばつながるからこそ、自身に特有の文化は際立って、人はそれを大切にできるようになる、という図式もありえると思うようになった。これも大きな考え方の変化であった。

その他の生活習慣に関しては、様々な違いを感じたが、一番注意しないといけないと感じたのは、日本では丁寧であるが、他の文化においては失礼にあたる行為である。日本では鼻を勢いよくかむことよりもまだ鼻をすすめる方が失礼ではないが、オーストラリアにおいては人前で鼻をすすめるのはおならをすると同程度に失礼と現地の学生からきいた。文化の違い、として簡単には受け入れられないような失礼な行為は、やはりしっかりと知っておくことが大事だと感じた。

プログラム内容は、大きく三つ「英語の講義、多文化にまたがる行為の講義、現地の文化体験」からなっていた。どれも満足のいくものであった上に、どの講義においても先生方はとても親身になって教授にあたってくれており、講義での質問に加えて、なかば関係のないような質問・課題も見てくださったことは、とても印象に残っている。また上に述べたように、派遣先であるシドニー大学の本物の講義に参加する機会がえられたことは、ほんとうに良い機会であった。

国家公務員に、特に外交官になりたい、という以前からあった希望がより強くなった。日本というバックグラウンドを背負ったうえで、他国の文化の素晴らしいところ(たとえばオーストラリアであれば多文化主義)を吸収し、それを日本にも還元できる、そういう進路をとりたいという思いを後押ししてくれたプログラムであった。

今回このプログラムへ参加して、私は初めて海外の大学で勉強するという経験をしました。の中で感じたのは、まず一つ目は、シドニー大学は本当にいろんなバックグラウンドを持った生徒がたくさんいるということです。オーストラリアは多文化社会ということで移民を積極的に受け入れているということもあってのことだとは思いますが、それでもやはり様々な人種の生徒が様々な言語を用いて大学生活を送っている様子は、京都大学ではほとんど見ることでできない光景であり、同時にとても新鮮な光景でした。日本にいと留学することに対してハードルが高いイメージがありましたが、シドニー大学に来てみて、留学することへのハードルが下がったとともに、可能であればぜひしたいと思いました。とはいえ、私の在籍する医学部人間健康科学科では交換留学のような制度は整っておらず、留学するとすると卒業に 5 年以上かかってしまうのが現状です。そのため、もう少し医学や薬学など医療系の学部でも国際化に関するカリキュラム体制が整ってほしいと思いました。

また、シドニー大学での授業は、やはり全体的にリーディングなどよりもディスカッションやグループワークが多く、積極性が求められるような内容ばかりで流石だと思いました。普段の京都大学の英語の授業では、リーディングやライティングがほとんどで、なかなかスピーキング能力や積極性を鍛えることは出来ません。そういう点においてシドニー大学の授業は優れており、京都大学にも取り入れてほしいと強く思いました。

シドニーで 2 週間過ごして感じたことは様々ありましたが特に 2 点について印象に残っています。一つ目は、とても健康的な街だと感じた、ということです。シドニーでは、街の至る所に公園や庭園があり、町中が緑で溢れていました。また、シドニーの人たちの多くはスニーカーを履いており、他にも街の中をランニングしたり、公園でストレッチしたりしている人たちがとても多く見受けられました。町全体が爽やかで、健康的だと感じました。二つ目は、本当に多文化社会だと感じた、ということです。シドニーの町の中には、チャイナタウンやコリアンタウン、タイタウンなど特定の国の人たちが集まるエリアが点在しており、また、そのような場所でなくても、様々な人種の人たちが街を行き交い、様々な言語が飛び交い、とても不思議な雰囲気が形成されていました。食文化に関しても、「オーストラリア料理」というものはあまりなく、世界中の食べ物が集まっているという印象を

受けました。バックグラウンドが違えば、言語や生活習慣、宗教など様々な問題が生じる可能性もありますが、オーストラリアでは絶妙なバランスで多文化社会が成り立っていて、個人的に非常に驚くとともに、2 週間ではその秘訣までは見つけることができなかったものの、異文化を受容するという点において他国に対して見本となっていくべき街だと感じました。

プログラム内容に関しては、今回の SEND プログラムのメインでもあった「文化交流」が一番印象に残っています。オーストラリアの文化に関しては、英語の授業の中で英会話の勉強をしながら、オーストラリアの歴史やアボリジニの文化について楽しく学ぶことができました。特にムービーを見たり、実際にオーストラリアの伝統的な食べ物を食べさせてもらったりなど、楽しく学習を進めるための工夫が凝らされていたのが印象的でした。また、日本文化の発信に関しては、出国前からグループで話し合い、準備を進めていく中で私自身も改めて日本の文化に向き合うことができ、世界に対して自慢できる日本の良いところも見出していくことができました。また、実際にシドニー大学の生徒に対して発表した時は、最初は伝わるか不安もありましたが、多くの生徒が興味深そうに話を聞いてくれて、プレゼン後も日本のことに関して盛り上がり話をするのができてとてもうれしかったです。外国の人が日本に対して興味を持ってくれて、日本語も学んでくれているというのは、一人の日本人としてとてもうれしく感じ、来てくれた現地の生徒の人たちは初対面の人たちばかりだったけれど、強い親近感を抱きました。そのため、同じように私も外国に興味を持ったり、外国語を学んだりすることで、外国の人たちと打ち解けることがより容易になるのではないかと感じました。異文化理解とは決して簡単なことではないけれど、まずは相手の異文化に対して興味を持ち、勉強したり体験したりなど、私たちから歩み寄っていくことが、異文化の人と理解を深める近道なのだろうと強く感じました。

進路への影響としては、直接的進路ではないものの、もっと英語を勉強したいと思いました。今回シドニーで 2 週間過ごしてみて、日本人同士では通じる英語も、ネイティブの人を相手にすると全く通じなかったりして驚くことがたくさんありました。世界の人とコミュニケーションをとるためには、発音や言い回しなど、今以上に自分の英語を向上させていかないといけないと強く感じました。

今回の派遣留学では、2 週間という短い期間の中で多くの成果を得ることが出来ました。まず、英語力についてですが、英語の授業が計 6 回あるに加え、現地での生活には英語が必要不可欠であるため、スピーキング力およびリスニング力の向上が少し見られました。特に、ネイティブの発音を真似ることで、少しずつより自然で流暢な英語を話せるようになったと思います。また、様々な場面で英語を聞くことによって、英語に対する抵抗が薄れただけでなく、以前に比べて自分から英語を積極的に使っていきたいと思えるようになりました。英語の他にリーダーシップ、ビジネス、異文化交流についての授業や、現地の日本企業訪問を通して、様々な観点から異文化についての理解を深めることができました。特に印象に残ったのは、オーストラリアの先住民であるアボリジニーと開拓民のイギリス人の関係にまつわる歴史的なお話であり、普段日本ではあまり接する機会のないような知識を得ることができました。

今回はオーストラリアのシドニーに 2 週間滞在しました。シドニーで生活するにあたり、最も驚いたことは移民の数が大変多いということです。街中や大学内のいたるところでアジア系やヨーロッパ系を始めとする、純粋なオーストラリア人ではない方がたくさんいました。オーストラリアは英語を公用語としているのですが、様々なバックグラウンドを持つ人が多くいることで、多種多様な英語アクセントを聞くことができました。また、移民が多くいることで、シドニーは外国人や異文化に対して大変寛容であるという印象を受けました。大学内でも様々な地域の留学生と一緒に授業を受けるので、普段接する機会のない地域の方からお話も聞けて、大変貴重な経験を得ることが出来ました。また、私が感銘を受けたもう一つの点としては、信号のない横断歩道を渡ろうとすると、車は必ず歩行者を譲ってくれるということです。この点は日本では残念ながらあまり

達成されていないのですが、シドニーでは渡ろうという意思を見せれば、自動車は必ず止まってくれます。このように、シドニーでの滞在を通して普段日本で得ることが出来ない体験を多く得ることが出来ました。

このプログラムは文化交流を趣旨としているプログラムですが、シドニー大学では「International Leaders Program」という名前でした。全体的な構成は文化交流というよりは、さまざまな授業やアクティビティを通してシドニー大学およびオーストラリアでの生活を体験するといったことが目的であるように感じました。しかし、期間が短いため授業回数が少なく、アクティビティの内容もあまり充実しているとはいえない状況でした。また、事前にプログラムの予定や内容に関する情報がほとんど与えられなかったため、準備不足の状態で開催に参加することになってしまい、困惑することも多々ありました。ただ、プログラム中に現地学生に対する日本についてのプレゼンがあったのですが、これについては渡航前から、大学のテスト期間中にも関わらず大量な時間を注いで準備したこともあり、現地の学生からかなりの好評を頂きました。

今回オーストラリアで短期留学をすることによって、海外の大学生活を垣間見ることができました。今までは漠然と留学したいと考えていたのですが、この派遣によってその夢がより具体的なものになってきました。ただ、今回の派遣を通して海外留学に対する自分の不足点や問題点も見つけることができ、それらを改善していく必要があると思いました。語学力のみならず、現地学生との付き合い方や異文化への理解など、様々な課題を克服していけないと、海外留学をするのは厳しいと思いました。今回の経験をもとに、今後日本で自分の知識を充実させ、将来大学院留学するという目標に向かって頑張っていきたいと思います。

今回私は春休みの約 2 週間を用いて、オーストラリアのシドニー大学で、現地の言語である英語、文化を学びながら、日本語や日本文化を現地の学生に伝えてきました。まずこのプログラムでは、平日は基本的に午前3時間の授業を、午後から 2~3 時間の授業を受け、その後自由行動という形式でした。平日でも二日間は農場に行ったり、ビーチに行ったりと退屈せず非常に楽しく過ごすことができました。週末は自由なので様々な場所に観光に行きました。授業や観光には現地の学生も参加してくれ、楽しみながら交流することができました。また偶然にもシドニー大学に留学している日本人に会うことができ、留学生活についてたくさん聞く機会がありました。やはり日本の大学とはスタイルが大分違うみたいで、金曜日と土曜日以外は毎日宿題に追われていると言っていました。日本では宿題がたくさんはでませんが、たくさんある自由時間をだらだら過ごすのではなく、将来を見据えてもう少し有意義に使っていきたいと思います。

二週間と非常に短い期間であります、英語力は向上したと確信しています。というのも、英語の先生が非常に素晴らしい方だったことはもちろん、授業や現地の学生と話している時に、オーストラリアの独特の言い回しやイントネーション・アクセントをたくさん学べたからです。私個人としては研究室にアジア系の留学生がたくさんいるため、彼らの話す英語には慣れていたのですが、旅行中にオーストラリア人と会うと、うまくコミュニケーションがとれないことを悩んでいました。しかし今回の研修で、大分苦手意識が払拭できました。日本に帰ってからはオーストラリアのドラマをたくさん見て、もっと学びたいと思います。

日本語を勉強している現地学生の授業の受講では、現地の学生の日本語能力、文化に関する知識に驚かされました。オーストラリアから日本がどのようにみられているのかを知ることができ、非常に興味深かったです。日本文化に関するプレゼンではたくさんの学生が聞きに来てくれ、とても盛り上がりました。その後は一緒に観光にでかけ、日本・オーストラリアの文化の違いについてたくさん話し合いました。

最後に、ハイレベルで優秀な周りの学生に囲まれ、自分ももっと英語の勉強を頑張ろうと強く感じ、一度は長期留学してみたいという思いがより強くなりました。今回のプログラムに参加して本当に良かったと思います。また、このようなプログラムがあったら積極的に参加していきたいと思っています。貴重な機会をつくっていただき本当にありがとうございました！

今回のプログラムは、私にとって初めての海外留学だった。実を言うと、学部3回生になる前までは留学や海外派遣にあまり興味がなく、今まではこのようなプログラムに挑戦したことがなかったのである。3回生になって留学生の友人の影響を受け海外留学の魅力を知り、今回のプログラムに挑戦したが、渡航前の参加者同士の交流を通して、どの参加者も様々な海外経験を持ち、意欲を持って語学学習や活動に取り組んできたことがわかり、不安な気持ちを持っていた。しかしながら渡航してからは、毎日が非常に新鮮で充実しており、あっという間にそうした不安は吹き飛んでいた。大学ではオーストラリアの歴史、文化など様々な角度からオーストラリアについて学ぶことができ、それらの一部は日本でも学んだことがあるものだったが、実際現地に足を運んで体感するのと、遠い国の情報として覚えるのでは受け止め方が全く異なり、非常に価値の高い経験となった。また、日本語を学ぶ現地の学生と交流することでオーストラリアから見た日本の姿を知ることができた。これらの経験は旅行では決して得られないものであった。渡航前は2週間という期間を長く感じていたが、実際に行ってみると時間が過ぎるのが早く、もっと長期に渡って留学したいという思いを強く感じた。語学の面においては力不足を感じることも多くあったが、今まで「勉強する対象」であった英語が「獲得したいコミュニケーションのツール」となり、語学学習に対するモチベーションが大きく上がった。私は大学院に進学するため、まだこのようなプログラムに参加できるチャンスがあると考えられるので、語学の勉強に励みつつ、更なる機会を探していきたい。

オーストラリアに行って大きく感じたことは、非常に人種の多様性に富んでいることである。現地では日本に興味のある学生や日本語を学んでいる学生と交流する機会があったが、誰もが様々なバ

ックグラウンドを持ち、確固とした自分の考えを持ちながらも他者との文化の違いに対して寛容であった。このような多様性は日本ではあまり見られるものではない。2週間の滞在を通して、オーストラリアは様々な文化の違いを包み込むおおらかな国だと感じ、もっと長く滞在してビジネス面など今回見えなかった文化を知ったり、シドニー以外の地にも足を運びたいと強く感じた。

プログラム内容について、まずプログラムの中心であった英語学習について述べる。1日中英語だけで暮らすのは初めての経験で、当初は聞き取りに苦労したが、少しずつ聞き取りの能力が上がったことを実感できた。語学力を身につけるには2週間という期間はあまりにも短く、日本人学生同士での日本語の交流も多かったため十分英語学習に集中できたとは言い難いが、上でも述べたように、英語学習の捉え方が変わったため、今後の学習へのモチベーションは極めて高まった。また、オーストラリアの文化や歴史、自然について学ぶ授業が多数行われたが、どれも興味深かった。紹介された場所やものを直接見たり体験したりすることができたため、印象に残った。

今後、私は大学院に進学する予定であり、まだ学生生活の中で海外経験を積む機会があると思われる。積極的に機会を模索し、できれば長期間に渡って海外に滞在したいと考えている。卒業後の進路についても、今までは日本国内のみしか見えていなかったのに対して、漠然とではあるが海外まで視野が広がった。

まず、シドニーに到着して私が驚いたのは人々の多様性だ。人々が行き交う通りを見渡せば、アジア系からヨーロッパ系まで様々な顔が目に入る。オーストラリアでは、中国、韓国、東南アジア、南北アメリカ、ヨーロッパの国々など様々なバックグラウンドを持った人たちが巧みにオージーアクセントの英語を操り暮らしている。日本人が構成員の 98%以上を占める日本で生まれ育った私にとっては、このような民族の多様性が混沌と渦巻くオーストラリアは、日本とは対極の存在であった。これらの人々は、時には交わり、時には交わることなく静かに共存しているように見えた。おそらく短期滞在の者には見えない民族の間での感情のぶつかりなどは存在しているのだろうが、想像をはるかに超えた多様性に驚き、様々な民族を受け入れるオーストラリアの器の大きさに感心した。少し話は飛躍するが、オーストラリアとは成り立ちが全く異なる日本でも、人口減少のためにいつかこのように多くの移民を受け入れる時が来るのではないかと考えていた私は、日本もオーストラリアに見習うべきところがあるのではないかと感じた。

プログラムでは、オーストラリアについて学ぶものが多かった。日豪の比較をテーマにしたプレゼンテーションやエッセイ、アボリジニーの文化、オーストラリア建国の歴史など、日本と全く異なる成り立ちや文化をもつオーストラリアのことを学ぶのは大変面白かった。英語の授業や日常の生活を通して、自分の英語力の圧倒的な不足を感じるとともに、日本ではなかなか危機感をもつことができない英語の必要性を痛

感した。

また、プログラムでは様々な人のお話を伺うことができた。シドニーで会社を立ち上げたマーケターの方の講演や日本文化発信を行う独立行政法人である国際交流基金の方とのお話を通して、日本と世界(オーストラリア)をつなぐ仕事の実際を垣間見ることができたように思う。

このプログラムを通して受けた影響はいくつかある。まずは、英語をもっと自由に操れるようになりたいと思っている自分に気づいたことだ。今の日本では、英語ができなくても生活には全く不自由がなく仕事に困ることもないので、やりたくない人はやらなくてもいいと私は考えている。しかしながら、この滞在を通して自分は英語を身に着け日本語を話さない人たちとも関わっていききたい人間なのだということを強く認識した。この気持ちを忘れずに、これからの姿勢に反映していきたいと思う。

また、オーストラリアで留学や仕事をしている人と話をする中で、自分がやりたいことを一生懸命やることが大切だと感じた。自分の意志を持って海外に飛び出した人たちの姿勢は、日本にしようとしてどこにしようと思わなければならないものがあると思った。

2週間という短期の滞在であったが、たくさんを経験させていただき感じるところも多くあった。このような機会をくださった京都大学およびシドニー大学の方々やプログラム中に関わってくださった方々に感謝したい。

自分は海外での短期留学はこれで二度目であるが、この留学をおえた今だからこそ、再びどこかに留学をしたいと思っている。さらに過去の二回とは異なり、より長期のものに臨みたい。それも今回派遣されたことにより、より海外で学ぶことへの意欲が高まったことが要因であると考えられる。また現地の学生とも交流することができた。一緒にご飯を食べに行ったり、観光をしたりと、共に時間をすごしたことにより、生のコミュニケーションをとることができた。今後もしよい友人として付き合いがいけそうであり、大変良かった。また初めてのオーストラリアということで現地の文化も存分に吸収することが出来たと感じている。日本とは異なることがたくさんあり、オーストラリア特有のゆったりした雰囲気の魅力を感じた。

オーストラリアは初めて訪れる国であったため、多少の不安はあったものの、案ずるより産むがごとし。大変充実した時間をすごすことが出来た。到着前にはあまりイメージが出来なかったが、友人の助けと現地の先生やバディーたちのおかげでシドニーにて見ておくべきものや、しておくべきことはあらかじめ出来たと感じている。今回は特に困難な状況が自分自身には発生しなかったが、今後も海外であるということをしっかり意識して海外生活をすごしていきたい。

本プログラムに期待したことは英語力を向上させることと、海外に対する理解を深めることであった。自分としてはこの二つのことを満たすプログラム内容であったと思う。二週間に渡って毎日のように英語に接したことで英語の四つの技能(読む・聞く・書く・話す)全てが向上したと

思うが、特に聞く、話すの分野が特に成長することが出来たと感じる。また先にも書いたように現地の学生と交流したことは大変有意義であったし、海でのライフセービングの実習は楽しくもあり実践的でもあったし、農場での研修ではただオーストラリアの農業の問題点を知るだけではなく、オーストラリアの動物達にも触れ合うことができた。やはり、本や写真だけではなく実際に見たり聞いたりすることの有用性を感じた。

この留学を通して、また長期の留学に向かいたいという意欲が高まったことは先にも述べたが、具体的には大学院に進学した時に英語で講義が行われるところで専門科目を学びたい。もちろん、その場所にいることで英語のブラッシュアップも同時に行えると考えている。

この2週間、私にとって最大の壁は、英会話でした。シドニーでの初日、周りの留学経験豊富な仲間たちがバディと楽しくコミュニケーションをとっているなか、私はほとんど会話に加わることができませんでした。これまでの大学生活において、英語を話す機会がほとんどなかったため、英語を読んだり聞き取ったりすることはできても、とっさに話すことができなかったのです。言いたいことを思いついても、それが伝わるかどうか自信が持てず、恥ずかしくて口に出せなかったのです。しかし、英会話の Eugenie 先生の授業や、街中のたくさんの英語に触れるうちに自分の中でどんどん身近に感じられるようになりました。異次元の言葉が徐々に自然に感じられるようになったのです。Eugenie 先生の授業は、オーストラリアの文化や歴史、考え方をわかりやすく講義してくださっただけでなく、私たちに積極的に英語を話す機会を与えてくださったため、私にとっては羞恥心を捨てて英語を話す大きなきっかけとなりました。そして、もっとも大きなきっかけとなったのはバディやシドニー大学の学生たちともしっかりと楽しく話せるようになりたいという自分自身の思いです。特に、私たちの日本文化についてのプレゼンテーションを聴きにに来てくれた生徒や、日本語授業で知合った生徒達は日本についてもとても興味ある人ばかりであったため、彼らとは話がつきませんでした。もちろん流暢な英語とはいえませんが、日本語で友達と冗談をいいながら話しているのと同じ感覚で会話できたことは、私にとって非常に大きな一歩でした。こうした心と心のつながり、仲良くなりたいという思いがこのプログラムの目的の一つである国際交流の真

の姿なのだと心から実感しました。

今回のシドニースプリングスクールは、私にとって初めての海外留学経験でした。2週間という短い期間でしたが、毎日大学でたくさんのプログラムに参加し、放課後や休日は街を探索してシドニーの人々のリラックスしたライフスタイルや明るい人柄を目の当たりにし、現地で出会った日本人やシドニー大学の友人達と交流したこの日々は、私の中の人生観を大きく変えました。また今回のメンバーは誰もが様々な経験をし、自分を磨くためにたくさんの努力をしている人ばかりで、このような魅力的な仲間に出会え、衣食住をともにしたことも私にとって大きな財産となったと強く確信しています。このプログラムを終えた今、これからもっと意欲的に様々なことに挑戦し、自分の可能性をもっと広げていくことを私はここに誓います。進路については、今までは日本国内しか考えていませんでしたが、また留学に挑戦してみたいと思います。今回のプログラムに携わってくださった京都大学およびシドニー大学の先生方、本当にありがとうございました。

私がこのプログラムに興味を持ったのは、英語力をあげるもののほかに、交換留学にそなえて海外の大学や現地の大学生と交流することに興味があったからです。実際に大学の授業で海外に行くのは 2 回目でしたが、前は学生同士での交流がなかったため、海外の大学生との交流は今回が初となりました。シドニー大学では、バディさんとして私たちと一緒に授業を受けたり、お昼を食べたりした学生はもちろん、日本文化についてのワークショップを通じて、多くの学生と交流することができました。また、日本文化のほかにも、日本のアニメやドラマなどについて、英語や日本語を織り交ぜながら会話をしましたが、どの学生も非常に意欲があり、特にアニメの話などでは国は違うけれども、共感出来たことでうれしく思いました。また、彼らの中には結構他の国(特にアジア圏)からの留学生や、日本への旅行経験者も多く、色々な話を聞くことができ、私もより海外を訪れたいと思うようになりました。またシドニー大学での日本語のクラスにも参加させて頂きましたが、祖父母や親が日本人という学生や、習い始めて数年といった学生に日本語で話しかけられ、日本では中学から英語を学んでいる割に英語をうまく話せない学生が多い中、積極的な彼らを見習わなければならないと思いました。

今回の留学で驚いたこととして、実際に行くと予想よりずっとアジア系の人が多かったということがあげられます。オーストラリアは移民を受け入れてきた多民族国家であることは知っていましたが、チャイナタウンはもちろん、日本料理店も多く、屋外でも日本人とわかる「こんにちは」、と声をかけてくれました。また、週に 1 回の日本人や日本に興味があるオーストラリア人たちとの交流もあるらしく、日本に比べて文化交流の場が大きいと感じ、日本でもそういう機会が多くなればよいと思いました。日常生活では、平日の授業終わりや休日に色々な観光地を訪れました。他の海外に比べて治安もよく、移動手段もそろっていたため、週末にはシドニー郊外のブルーマウンテンを訪れて壮大な風景に感動したり、ワークシ

ョップで仲良くなったシドニー大学の学生に Fish Market を案内してもらい、現地の食事を楽しんだりすることで、オーストラリアの乾燥した気候や活気ある市場の様子など身を以て知ることができ、日本との相違点に気付かされました。

今回は 2 週間と短いものでしたが、プログラムの内容は多岐に渡り、充実していました。シドニー大学では、オーストラリアについての英語の授業のほか、異文化交流やビジネス論、リーダー論についての英語講義を受講しました。また、実際のシドニー大学での授業も聴講させて頂き、実際の授業のスピードや授業の雰囲気を感じ取れましたが、私の受けた心理学の授業は日本の授業とよく似ていました。そのほかにも、オーストラリアの気候に対応した農業を学ぶための農場見学やビーチでのライフセービングなどのフィールドワーク、現地の学生に日本文化を紹介するワークショップを行いました。また、農場では、乾燥した気候から干ばつだけを想像していましたが、兎の増殖や牧草地についてなど、実際には他にも様々な問題があることが分かりました。

実際に今回の留学を終えて、留学したいという思いは大きくなりました。しかし、自分の英語力不足も切実に感じました。英語の授業では先生がゆっくりわかりやすく話してくれますが、友達との会話やフィールドワークでの説明などは非常に聞き取りにくく、聞き返したり、周りの人に助けてもらったりといったことがありました。また普段の日常生活で英語を使う機会がなく、始めの方は自分が言いたいことをうまく表現できず、ジェスチャーを使いながら随分もどかしい思いをしました。今後は会話に関しての英語を中心に英語の勉強を頑張りたいと思います。そして、今後の半年間の交換留学では授業を頑張るだけではなく、積極的に現地の学生との交流も楽しみたいと思います。

英語に関しては、言いたいことがあってもそれをうまく言葉にできずに、もどかしい、悔しい思いをすることが今回の滞在の中でも多々あり、英語を語学としてのみでなく、コミュニケーションツールとしてうまく使いこなせるようになりたいと強く思いました。ただ、それでも時間が経つにつれて道に迷った時や買い物で困った時などには自ら進んで現地の方に話しかけることが自然とできるようになったことは良かったと思います。研修を終えて、英語の語彙やリスニング、ライティング、スピーキングなどを中心に学習を継続したいというモチベーションを得ることができました。また、大学で所属しているサークルの関係で留学生と交流する機会を多く持つことができるので、そうした場も活用しながら英語学習や異文化交流をこれからも継続していきたいです。

今回は英語のクラス、文化交流ともにグループでのプレゼンテーションがあり、班員それぞれの予定がなかなかそろわない中で、授業後やアコモデーションに帰ってからなどの空き時間を見つけ、必死に作業してやり遂げた時の達成感は忘れられません。特に、各々が意見を出し合いながら一つのものを作り上げていくという過程は非常に面白いものでした。すべてのプレゼンテーションを終えてからの交流では、日本に興味を持っているシドニーの学生と英語や日本語を交えての会話を楽しみました。そこで出会った方と話す中では、留学に行くことを勧められました。以前にも留学経験のある方をはじめ多くの方に海外留学を経験することを強く勧められたことや、実際に参加した昨年夏のオックスフォード大学でのサマースクールや今回のシドニー大学でのスプリングスクールでの体験を通して、私の海外留学への関心はますます高まりました。現実的には大学在学中に長期の海外留学を経験することは難しいかもしれませんが、短期・長期に関わらず機会に恵まれれば今後も積極的に挑戦してみようと思っています。

今回の研修は 2 週間と比較的短いものでしたが、そのなかで日本ではできないであろう様々な経験をすることができました。まず、滞在中は外食する機会も多かったため、買い物やレストランでの注文の際に英語でのコミュニケーションが不可欠でした。学問としての英語とは異なり、話し言葉として使われている英語のスピードや決まり文句などを聞き取ること、また公共交通機関のアナウンスから情報を

得ることが非常に難しかったです。電車やバスの乗り方に慣れないうちは正しい目的地にたどり着けるか不安もありましたが、現地の方や職員の方が親切に行き方を教えてくださったおかげで、特に問題なく利用することができました。海外での生活を通して、分からないことや困ったことがあった際には、自力でどうにかしようとするのではなく、思いきって詳しい人に助けを求めることも重要だと学びました。

また、シドニーは中国人をはじめとするアジア系を中心にさまざまな国からの移住者が多く、街を歩いたり、レストランで食事をしたり、買い物をしたりすることで、多様な文化を身をもって感じることができました。それぞれ異なる文化が混在してはいるものの、例えば中国系の店はチャイナタウンに集中するなど、やはり完全には溶け合わずにそれぞれが別のものとして存在しているという印象を受けました。

現地の学生を招いての文化交流の場は非常に有益な経験となりました。プレゼンテーションでは、初めて現地の学生を相手にして英語で話すということもあり、かなり緊張しましたが、意図したところで笑ってもらえるなどの反応を得られたことで自信をもって発表を終えることができました。

Japan Foundation の訪問では、日本人社員の方は 3 年ほどのサイクルで海外勤務を経験するというお話をされていました。もともと将来海外での勤務をするということに興味があったので、そうしたワークスタイルもあると知れたことが私にとっての大きな収穫でした。

また、最終日の日本語クラスの見学では、海外で実施されている授業を通してあらためて日本語がどのような言語かということを考えさせられました。例えば、私たちが普段何気なく使っているフレーズでも、厳密に文法を正そうとすると日本人でも難しく、語学学習の難しさを「日本語を一から学ぶ」という新しい視点から見ることができました。

今回のプログラムでは、参加者の学年層が 1 回生から修士 2 回生までと幅広く、同じ日本の学生からもお話を聞くことのできる良い機会となりました。卒業後に大学院に進学される方、就職される方、これから院試を受ける方など、さまざまな先輩の実体験を直接伺うことができました。また上にも書きましたが、日本企業訪問では海外でのワークスタイルについての情報を得ることができたため、将来自分の職種について考える際の選択肢が広がりました。

私は今回の派遣によって主に二つのことについて学びました。

一つ目は日本ほど平和な国はないということです。私が行ったシドニーは緑豊かで人々も優しくとても穏やかな所でした。ただ、街中にはお金を求める人が何人もいて、これはとても意外でした。以前サンフランシスコに行った時にもそのような人を見て唾然としましたが、今回また目にしたことで、移民を多く受け入れることの難しさを感じました。移民が定職について、まともな暮らしを送れるようにすることは、移民の為だけでなく観光客や住民の安心感の向上にも繋がると思うので早急に取り組んで欲しいと思いました。

二つ目はオーストラリアの人々はとても日本に、特に日本のサブカルチャーに詳しいということです。日本に関するプレゼンをした時や日本語のクラスに入った時に感じたのですが、日本に興味を持っている人の多くは日本のサブカルチャーが好きなようでした。私は全然漫画やアニメに詳しくないので、彼らに私のことを期待していた日本人とは違うといった目で見られているように感じ、それは少し悔しかったです。また、日本に行ったことがあるという人の中で京都に来たことがあると言って人が半数くらいだったのが驚きでした。プレゼンをした時の様子を見ると彼らも茶道などの日本文化に興味がある上に、京都はとても日本の伝統文化が詰まった街なのに、観光客が東京に一極集中してしまうというのは勿体ないと思いました。なので、私は次に海外に行く時は有名な漫画を読んだり、アニメを見てサブカルチャーについて少し話せる状況にしておこうと思い、また京都でサブカルチャーのイベントを定期的に開くなどして京都にもっと外国人を呼ぶ PR をする必要があると感じました。

今回の派遣では盗難という辛い目に遭いました。私自身シドニーだから大丈夫だろうと少し油断していた分もあったので、海外に行く時はどこに行くのであっても厳重に注意しなければならないとい

うことや焦った時には全く英語が耳に入って来なくなってしまう何事も自分ではできなかったということを痛切に感じました。当時一緒にご飯を食べていた現地の方や同じプログラムに参加していた方々の優しい手助けや佐々木先生やドニークラークさん、郵船トラベルの皆様、在シドニー日本総領事館の職員の皆様の迅速な手配がなければ絶対に予定通り帰国することはできませんでした。無事に仲間と同じ飛行機で帰国できたことを心から有難く思います。

こんな経験をした後ですが、私はまたすぐに海外に行きたいと思いました。それは、これ以外にシドニーでとても良い経験を English Communication の時間や観光を通じて沢山させてもらえたからです。やはり海外は、日常的に英語を使う環境を提供してくれて、それは英語力を向上させたい私にとって魅力的であり、また、海外で見る日本とは全然違う文化の数々にはやはり興味をそそられます。私は自分の学科のカリキュラムの関係上、半年留学することは難しいけれど、今回のようなプログラムに参加することで自分を高めていけたらいいなと思いました。

この度は多くの方々にご迷惑をかけてしまいましたが、これからは安全第一で快適な海外生活が送れるように気を付けていきたいと思います。

私は 2015/2/28 から 2015/3/15 まで、二週間にわたってオーストラリアに渡航し、シドニー スプリングスクールに参加しました。この二週間の間、シドニー大学を訪問し講義を受けるだけでなく、現地の学生たちと交流し、様々なフィールドワークにも携わりました。短い時間でしたが、プログラムの内容はとても充実で、期待以上に言語力が鍛えられ、自分自身の成長が感じられました。そして、シドニーの素晴らしい文化と美しい景色を十分堪能し、異なる西洋文化に触れて、留学意欲が一層高まりました。

シドニー大学で受けた英語の授業は単なる英語を勉強する授業ではなく、英語でオーストラリア文化、Cross Culture Communication と leadership について勉強する授業でした。今までの学校での勉強と違って、授業中、私たちは受け身の立場で先生の話聞くのではなく、自発的に思考し、先生やグループメンバーに質問することによって lesson に携わりました。つまり、授業内のインタラクティブが重視されています。このようなインタラクティブを通じて、知識をより早く深く身に付けることができると実感し、これこそ勉強の本来のあり方だということがわかりました。それをきっかけに、これからの大学生活をどう送るべきかについて改めて考えました。また、現地の学生が受ける講義の見学にも行きました。講義自体はとても面白かったですが、自分の英語力の不足で一部の内容を聞き取れなかったことがとても悔しかったです。これから英語の勉強をいっそう頑張りたいと思いました。

英語の授業以外、フィールドワークの内容もとても充実していました。一周目の時、ファーム

を訪問し、ファーム経営者に持続可能な経営方式について興味深い話を伺いました。その後、ファームを見学し、オーストラリアのかわいい動物と触れ合って、十分満喫しました。二週目の時は、シドニーのマンリービーチにいきました。スタッフからビーチの安全保障と救助の話を伺い、サーフィンを体験しました。これらのフィールドワークから、観光しながら勉強する楽しさを感じました。

この他、シドニーにある Japan Foundation を訪問するや現地の学生に日本文化の紹介などのアクティビティに参加しました。この二週間、たくさんの人と出会い、今までやったことがないことに挑戦し、自分に対する認識も思わず変わりました。今回のプログラムに参加するメンバー全員は皆それぞれ異なる学部、研究科、学年の学生ですが、二週間の付き合いでとても仲良くなりました。皆が留学生の私にとっても優しくしてくれて、たくさん助けてくれました。私は出発前に自分が集団生活に適應できるかどうかずっと心配していましたが、メンバーたちの支えで無事に楽しくやってきました。自分の内向きの性格もすこし変わったと感じました。語学力の進歩も、自分自身の変化も、今回のプログラムから得られた掛け替えのない宝物です。

派遣前の僕はとにかく英語を話せるかどうかで不安でした。しかし、実際に授業やシドニー大学の生徒と交流してみると、意外に僕の拙い英語でも相手がある程度推測してくれるおかげで、コミュニケーションがとることができました。一番の問題はリスニングでした。相手が何を言っているか聞き取れず、自分がどう反応したらよいか分らなかったことが多々ありました。その典型的な例が実際にシドニー大学の授業を聴講したときです。僕が受講したのは経済学の授業で、1年間京都大学の授業で経済学を習っていたので、ある程度自信があったのですが、まったくと言っていいほど先生の言っていることが聞き取れませんでした。リスニング力の欠如のせいでもあります。専門用語を覚えていないこともあると思います。自分の専門で習った用語は英語でも覚えておいた方が将来留学する際に役に立つのではないかと思います。

プログラムの中で一番印象に残っているのはシドニー大学で日本語を習っている学生と交流したことです。日本語で会話しましたが、全員日本語が流暢に話せていて驚きました。両親のどちらかが日本人という人も中にはいましたが、ゼロから勉強したという人もいて、その熱心に日本語を勉強する姿勢を見習いたいと思いました。しかし、詳しく聞いてみると、スピーキングは出来るけれど、ライティングが出来ないという人がほとんどでした。やはり日本の漢字は英語圏の人たちには難しいようで

す。彼らは日本のアニメやドラマをネットで見えて楽しく勉強しているそうなので、僕も語学の勉強というかたい概念を捨てて、楽しく続けることができるような英語の勉強法を身に付けていこうと思いました。

生活面に関しては、物価が日本と比べて高いのである程度多めにお金を持って行った方がよかったと思いました。スーパーに行けば必要なものは大概そろうので特になくて困ったものはありませんでした。シドニーは午後 8 時からいにならないと日が沈まず、温暖な気候であつたのでとても過ごしやすかったです。

このプログラムには様々なバックグラウンドを持った人がいました。今までにたくさんのプログラムに参加してきた人、海外に留学経験がある人、そして今から留学に行こうという人、世界一周をした人、実際に海外で働いたことがある人など、このプログラムに参加していなければ全く縁もゆかりもない人たちと出会えたということが今回のプログラムの一番の収穫でした。そして、色々な人に「まだ 1 回生なのだから色々なことに挑戦して経験を積んだらいいよ」と言われました。もうすぐ就職する先輩を見ていると、自分の好きなことが出来るのは大学生活の間だけだと改めて思いました。この気持ちをしっかりと胸に刻んで、残りの大学生活を精一杯暮らしていきたいです。

[授業内容]

平日は大体、午前 9 時 30 分～12 時 30 分、午後 14 時～16 時に英語の授業があった。基本的に与えられたテキストに沿って、英語で意見を述べたり、チームで討論したりする形式であった。時には動画共有サービス YouTube の動画を使って、オーストラリアの文化・歴史について学ぶこともあった。

また、外部講師による授業も数回あった。オーストラリアで起業した日本人の方の講義や、リーダーシップ論、コミュニケーション理論の講義を受けることができた。

課外授業において、農場研修では農場経営を歴史的に学び、ジャパンファンデーション訪問では日豪交流の実際を体験することができた。

[感想]

学業面：間違いなく、英語での発信能力、聴講力が向上した。最初は、やはり相手が何を言っているのか時々わからないことが多かったが、次第に授業・交流において、スムーズにコミュニケーションをとれていることに気付いた。特に、帰りの飛行機で英語の映画を、ほとんど字幕を頼らずに聞き取れるようになっていたとき、自分の進歩に感動した。

私生活面：交通インフラ、文化施設、自然環境が非常に優れており、充実した生活を満喫できた。人々が都市・自然環境意識を強く持っていることが間接的に感じられた。ただ、非常に物価が高く、海外訪問者にとっては経済的には滞在しにくい場所であるという感じは否めなかった。

国際理解：オーストラリアは昔、白豪主義の歴史があることから、アジア人蔑視的な対応をも

しかしたら受けるかもしれないと若干覚悟していたが、全くそのようなことはなく、人種なぞ関係ない非常にフレンドリーな対応であることに気付いた。オーストラリアが移民の国であることを強く感じる事ができた。また、オーストラリアは日本語学習者数が世界 4 位ということもあり、非常に日本に対する理解・関心が強く、街中で日本語で話しかけられることが度々あったことに驚いた。

上記以外で特筆すべきなのは、オーストラリア人の特徴をよく表す、laid-back という気質であろう。物事に対して常にリラックスして取り組んでいる姿は、日本ではあまりみられるものではないものの、個人的には非常に好印象であった。人生を楽しむ姿勢という観点でとても参考になる姿勢だと思った。

SEND プログラムによる約 2 週間の海外研修であった。単位取得等はなく、修了証が与えられる形式であった。学問的な面よりも、国際理解・交流に重点を置いたプログラムであったと理解している。

今回の留学でのあらゆる経験を通して、①英語運用能力の向上②オーストラリア社会の理解の 2 つを達成した。4 月から総合商社で働くうえで、この経験は間違いなくプラスに働くと確信している。

1. 学習生活

SEND プログラムを通しての経験は日本での約一年の留学生活における最高の経験だと考えています。最初の理由は、派遣前に日本の学生たちと SEND プログラムの準備をしたことや、現地での滞在を通して、日本とオーストラリアの学生たちの考え方や行動を知り、そして日本の文化をもっと深く学ぶことができたからです。二つ目の理由は、派遣前はオーストラリアをよく知らなかった私が、シドニー大学のプログラムに参加し、オーストラリア文化、生活について集中的に学び、理解を深めることができたという点です。この二つの理由から、SEND プログラムの主な目的である日本、オーストラリア間の架け橋の役割ができる人材になるための基本要件を備えることができたと考えられます。

2. 海外での経験

オーストラリア建国の背景と国家の形成過程について学ぶことが出来ました。オーストラリアは Cook 船長が発見して以来、イギリス国内での囚人の収容が難しくなったため、オーストラリアに囚人を流したのをきっかけに国家に発展しました。また、オーストラリアの原住民であるアボリジニに対する歴史と現代におけるオーストラリアでの地位などについて学ぶことができました。また、プログラム学習後、現地の見学や現地の学生らとの交流を通して、オーストラリアの多民族文化、実際の生活と関係がある Laid back 文化、食文化などについて理解を深めることができました。

3. プログラムの内容

プログラムは英語学習、現地見学、学生との交流が主でした。英語学習ではオーストラリア文化と関係がある内容を含んだ教材を利用し、学習しました。最終的には日本文化とオーストラリア文化を

比べ、グループプレゼンテーションをしたり、個人エッセイを作成して提出しました。また、現地見学では地元の農場、Manly Beach を訪問しました。最後は、日本で用意した日本文化交流に関する発表をしながら現地の学生たちに日本文化を伝える機会を持つことができました。

4. 進路について

オーストラリアは成長する国家だと思います。人口は少ないですが、投資するならリスクの低い、安定的な見通しの市場だと学びました。人口に比べて資源が豊かだが、財源不足による未開発資源も多いため、現在、日韓の両国がリスクを分担してオーストラリアに投資しているインフラ開発事業で貢献したいと思いました。

3月15日(日)のシドニー大学スプリングスクールプログラム参加学生20名の帰国をもって、平成26(2014)年度のSENDプログラムも終了することができました。昨年度、SEND派遣プログラム2件(タイ、ベトナム)、テストケース1件(インドネシア)のカリキュラム開発を担当させていただいたのに続き、今年度は、派遣プログラム4件、受入れプログラム1件を担当させていただきました。これらを滞りなく終えることができたのは、言うまでもなく、多くの方々のご支援があったからです。プログラム実施に関わってくださった方々、特に、受入れ大学の担当教職員各位には改めて深謝申し上げます。カリキュラムの質をどのようにして保証するか、今思い返してみると、無謀ともいえるような様々な提案について、多くの時間を割いて検討してくださったこと、その懐の深さに、“人”に恵まれているなとつくづく感じます。また、文学研究科博士後期課程の Nguyen Thi Ha Thuy さん、人間・環境学研究科博士後期課程の浅井航洋さん、同修士課程の上田貴美さん、総合人間学部の糟野新一さんには、編集を始めとする様々な作業を補助していただきました。心より感謝申し上げます。

今年度のプログラム参加学生の中には、他の短期プログラムでの経験・反省から、応募を決めたという人もいました。SENDプログラムへの参加が、その問題意識をより具体的なものとし、これから直面するであろう幾多の問題に対する解決の糸口となることを強く願っています。本報告書が、学生派遣を考えておられる諸先生方の一助として、少しでもお役に立つことができれば幸いです。今後もSENDプログラムが皆様に支えられて、より一層発展することを確信しております。

(佐々木幸喜)

SEND プログラム 2014 年度実施報告書

(チューラーロンコーン大学サマースクール／ベトナム社会科学院・ハノイ国家大学サマースクール／
「京都で学ぶアジアと日本」研修／インドネシア大学スプリングスクール／シドニー大学スプリングスクール)

平成 27(2015)年 3 月発行

編集・発行 京都大学国際交流推進機構 国際交流センター／
京都大学アジア研究教育ユニット(KUASU)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話 (075) 753-5678

印刷・製本

株式会社 田中プリント
電話 (075) 343-0006